東彼杵町文化財調査報告書第4集

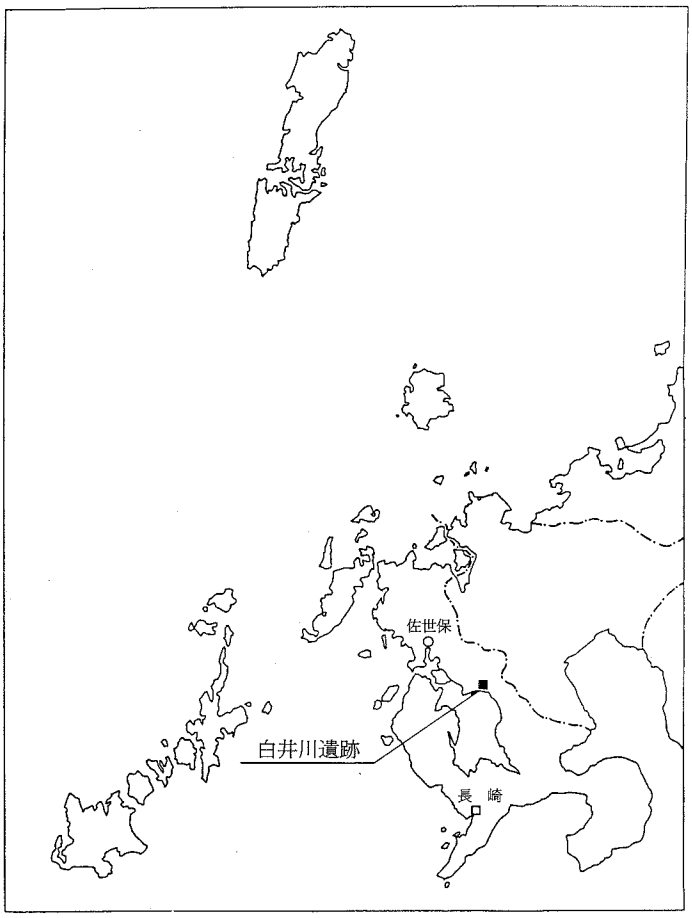
白井川遺跡（II）

1990

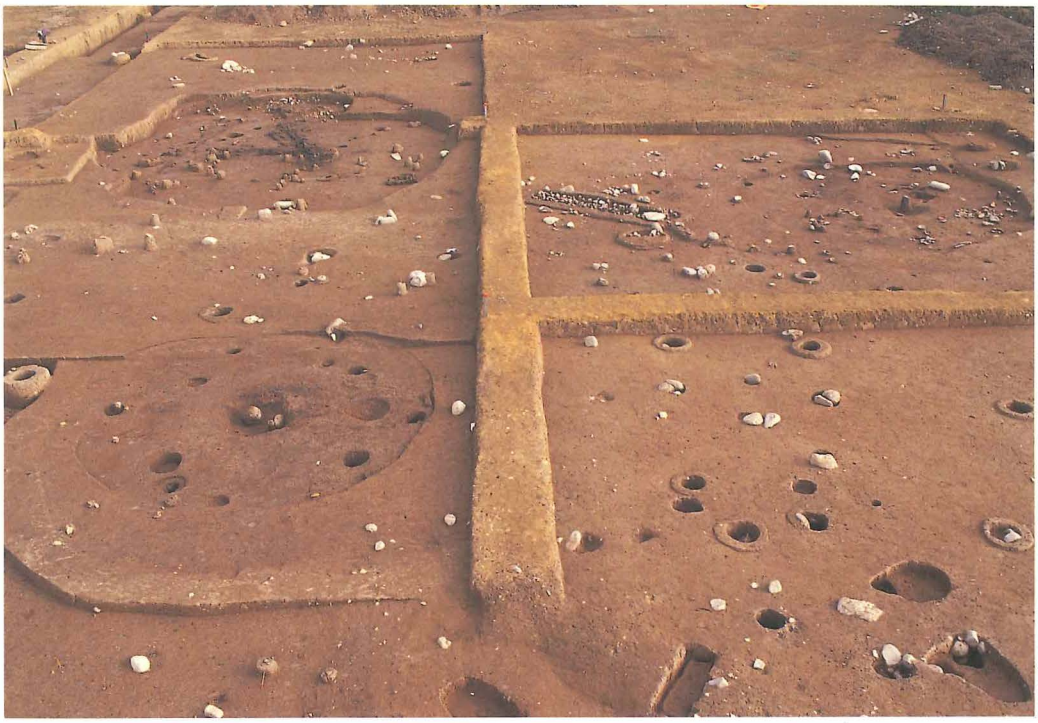
長崎県東彼杵町教育委員会

東彼杵町（ひがしそのき）文化財調査報告書第４集

白井川遺跡（II）



長崎県東彼杵町教育委員会



0
5
10 cm

発刊にあたって

ここに東彼杵町文化財調査報告書第４集、白井川遺跡をお届け致します。この調査報告書は、彼杵中央地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査として蔵本郷字白井川一帯について調査を行いました。

前回、同じ圃場整備事業に伴う調査を県補助事業により行いましたが、今回の調査目的は水田の表土剝ぎ作業のおり、その表面に数多くの土器片と箱式石棺、中世の中国輸入陶磁器類が発見されましたので、より広い範囲で調査区を設け、遺跡の性格を把握し記録する目的で町単独事業により実施したものです。

調査の結果、出土遺構、遺物からは種々の問題が提起されました。特に弥生時代後半から終末にかけての土器、方格規矩鏡片等の出土によって、弥生時代後期に北九州に成立した「クニ」の影響による勢力圏との関係がうかがえた事。更に広範囲に亘る弥生時代の住居跡等の検出によって県指定史跡の前方後円墳「ひさご塚」成立の背景に、貴重な手掛かりを与えてくれたことは特筆すべき発見であります。

さらに箱式石棺と町内出土の石塔類については、この機会に郷土学習の場として教育委員会敷地内に移転復原しておりますので、本報告書とあわせて今後の文化財研究と保護活用の一助となれば幸いと存じます。

今回の調査に当たり格別のご指導、ご協力をいただきました県文化課の諸先生方をはじめ、ご協力頂きました地元の皆様、関係各位に対し心より深く感謝申し上げます。

平成２年３月31日

東彼杵町教育長　喜々津　前　勝

例　　言

1．　本書は、東彼杵町教育委員会が町単独事業で実施した長崎県東彼杵町蔵本郷所在の、白井川遺跡発掘調査の報告書である。

2．　調査は、東彼杵町教育委員会が調査主体となり、県文化課が発掘調査および整理作業、報告書の刊行に至るまで担当した。

3．　調査は昭和62年11月13日～12月10日までの22日間実施した。

4．　本書の記録・編集は安楽が行い、縄文時代の石器を伴が執筆し、一部正林護の助力を得た。

5．　調査時および整理後の遺物写真は安楽による。

6．　出土遺物については先に実施された圃場整備に伴う調査の遺物も含めて国から一括譲与を受け、町教育委員会の施設で保管している。

調査関係者

東彼杵町教育委員会　喜々津前勝　教育長　　秋月清己　教育次長
波戸口利勝　社会教育主事　　山口　章　公民館主事
山口弘子　事務吏員　　開　正和　嘱託

長崎県教育庁文化課　田川　肇　調査係長
安楽　勉　主任文化財保護主事（調査担当）
川畑敏則　指導主事（現山手小学校教諭）　（〃）

調査外業者

佐伯　義春	長岡　宏	浜田　和七	石福　義男	金谷　秀一	田川　利一
川井　文子	二瀬ヨリ子	森山シゲノ	木場シズエ	大平キサ子	山下ヨシ子
前平アキエ	飯野トシヨ	前平ユキ子	前平タミヨ	野田ツキミ	上杉アヤ子
前平カズエ	上野ハツエ	横丁フクエ	酒井　美子	有川　悦子	松田マツ代
渡辺　ツネ	長岡ツルエ	川口シズエ	園　秋美	隅田キワ子	江頭ミツエ
三根ナツノ	田川アツ子	金谷ハツエ	山口　テル	島田タカ子	中岳キヌ子
川井美保子	島田　イソ	後瀬　良子	粒崎　クラ	山下　清子	松山シゲ子
松野　京子	山下マサ子	児玉　恭子	浪内キヨ子	海　ハルノ	川口富美子
松野希光子	大和　智子	山口シゲ子	佐藤美千子	岸本ハル子	満田スミヨ

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　周辺の地理的、歴史的環境……3

Ⅲ　調査……10

1　調査の概要……10
2　土層……12

Ⅳ　出土遺構、遺物……12

1　縄文時代の中期の土器……15
2　縄文時代晩期の土器……15
3　縄文時代の石器……25
4　弥生時代の遺構……37
埋葬遺構……38
大村湾沿岸に所在する石棺群について……51
住居跡……53
集石を伴う土壙……64
弥生土器……65
鏡……71
県下における晩期土器の編年について……72

Ⅴ　まとめ……77

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺の地形図……2
第２図　遺跡周辺の地形分類図……3
第３図　東彼杵町遺跡分布図……7
第４図　町内の遺跡および出土遺物……9
第５図　調査区域図(1/3000)……11
第６図　土層実測図(1/60)……13
第７図　縄文中期土器実測図(1/2)……15
第８図　縄文晩期土器実測図(１)(1/3)……17
第９図　縄文晩期土器実測図(２)(1/3)……18
第10図　縄文晩期土器実測図(３)(1/3)……20
第11図　縄文晩期土器実測図(４)(1/3)……22
第12図　縄文晩期土器実測図(５)(1/3)……24
第13図　縄文時代の石器実測図(１)(2/3)……26
第14図　縄文時代の石器実測図(２)(2/3)……27
第15図　縄文時代の石器実測図(３)(1/3)……29
第16図　縄文時代の石器実測図(４)(1/3)……30
第17図　縄文時代の石器実測図(５)(1/3)……31
第18図　縄文時代の石器実測図(６)(1/3)……32
第19図　縄文時代の石器実測図(７)(1/3)……33
第20図　縄文時代の石器実測図(８)(1/3)……34
第21図　縄文時代の石器実測図(９)(1/3)……35
第22図　扁平打製石斧欠損率グラフ……35
第23図　埋葬遺構位置図(1/3000)……37
第24図　第１号石棺墓実測図(1/20)……38
第25図　第２号石棺墓実測図(1/20)……39
第26図　第４号石棺墓実測図(1/20)……40
第27図　第５号石棺墓実測図(1/20)……41
第28図　第９号石棺墓実測図(1/20)……42
第29図　第10号石棺墓実測図(1/20)……42
第30図　第11号石棺墓実測図(1/20)……43
第31図　第12号石棺墓実測図(1/20)……44
第32図　第13号石棺墓実測図(1/20)……44

第33図　第14号石棺墓実測図(1/20)……45
第34図　第15号石棺墓実測図(1/20)……46
第35図　第16号石棺墓実測図(1/20)……47
第36図　第17号石棺墓実測図(1/20)……47
第37図　第18号石棺墓実測図(1/20)……48
第38図　第19号石棺墓実測図(1/20)……48
第39図　第22号甕棺墓実測図(1/20)……49
第40図　甕棺実測図(1/6)……49
第41図　石棺計測分布図……52
第42図　住居跡位置図……53
第43図　第1号住居跡実測図(1/80)……54
第44図　第1号住居跡出土の遺物実測図(1/3)……55
第45図　第2号住居跡実測図(1/40)……56
第46図　第2号住居跡土層実測図(1/20)……57
第47図　第2号住居跡出土の遺物実測図(1/3)……57
第48図　第3号住居跡実測図(1/20)……59
第49図　第3号住居跡出土の遺物実測図(1)(1/3)……61
第50図　第3号住居跡出土の遺物実測図(2)(1/3)……62
第51図　第3号住居跡出土の遺物実測図(3)(1/3)……63
第52図　集石を伴う土壙実測図(1/20)……64
第53図　弥生土器実測図(1)(1/3)……65
第54図　弥生土器実測図(2)(1/3)……66
第55図　弥生土器実測図(3)(1/3)……68
第56図　弥生土器および土師器実測図(4)(1/3)……70
第57図　鏡実測図　(1/2)……71
第58図　原の辻遺跡出土の鏡……71
第59図　県下における縄文後期終末から晩期土器編年図……73

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景……79
図版２　遺跡遠景および近景……80
図版３　調査風景……81
図版４　土層……82
図版５　埋葬遺構出土状況（１）……83
図版６　埋葬遺構出土状況（２）……84
図版７　埋葬遺構出土状況（３）……85
図版８　埋葬遺構出土状況（４）……86
図版９　埋葬遺構出土状況（５）……87
図版10　第１号住居跡出土状況……88
図版11　第２号住居跡および住居跡全景……89
図版12　第３号住居跡出土状況……90
図版13　縄文晩期土器出土状況……91
図版14　縄文時代の石器および鏡出土状況……92
図版15　弥生土器出土状況……93
図版16　縄文中期および晩期の土器（１）……94
図版17　縄文晩期の土器（２）……95
図版18　縄文晩期の土器（３）……96
図版19　縄文晩期の土器（４）……97
図版20　縄文晩期の土器（５）……98
図版21　縄文時代の石器（１）……99
図版22　縄文時代の石器（２）……100
図版23　縄文時代の石器（３）……101
図版24　縄文時代の石器（４）……102
図版25　住居跡出土の弥生土器（１）……103
図版26　住居跡出土の弥生土器（２）……104
図版27　各調査区出土の弥生土器（１）……105
図版28　各調査区出土の弥生土器（２）……106
図版29　各調査区出土の弥生土器（３）……107
図版30　各調査区出土の弥生土器および土師質土器（４）……108
図版31　第22号遺構の甕棺……109
図版32　遺跡近接の玄武岩の露頭と町教育委員会に移転復原された遺構……110

図版33　東彼杵町内所在の古墳 ……111
図版34　東彼杵町内所在の遺跡 ……112

表　目　次

表 1　東彼杵町遺跡地名表……5
表 2　石器計測表……28
表 3　扁平打製石斧計測表……36
表 4　白井川遺跡埋葬遺構一覧……50

Ⅰ　調査に至る経緯

本県における農地は平地に乏しく急傾斜でかつ細分化分散し、地形は制約から農業基盤整備は遅れていたが、昭和62年度から第３次土地改良長期計画がたてられ水田農業確立対策が主な柱になっている。

なかでも「圃場整備」はいわゆる区画整理を中心に用水路、農道、暗渠排水等を総合的に一挙に整備する事業で、これらは農業基盤整備費の２割を占めているといわれる。

大村湾東岸に位置する東彼杵町においても、昭和58年度から彼杵川流域受益面積82haの彼杵中央地区県営圃場整備事業が着工された。この地区には彼杵川古墳群と上杉古墳群と呼ばれる円墳が点在していたが、設計変更により保存されている。また寺院跡が点在すると考えられる報音寺地区の川井川内遺跡においても一部計画変更で保存されている。

県営圃場整備事業は地元の要請もあり、さらにＪＲ彼杵駅から彼杵中学校北側にかけての103haが、昭和62年～63年度工事予定で追加採択された。

丁度そのころ、本町では九州横断自動車道工事に伴う発掘調査が行われており、調査事務所が設置されていた。この事務所に町教育委員会より、圃場整備予定地内の石垣に石塔があるので確認してほしいとの依頼があり、現地に県文化課職員が立ち会った。この石塔は地元の郷土史家田崎一郎氏（故人）が「大村郷村記」に言う「彼杵郡の地主として最大堂である彼杵山安全寺大御堂」跡と考えられていた所でもあった。石塔は西彼杵半島に産出する青温石を石材として使用しているため、その判別は容易であり、石垣を注意して見ると、さらに数箇所において確認され、その中には正平21年銘（1366）や宝徳３年銘（1455）などの中世史を考える上で貴重なものが含まれていた。

この地区は岡遺跡として登録され、圃場整備の設計変更不可能な部分約1,130㎡が調査された。この調査では平安時代後半から室町時代後半の資料が得られ、遺跡の広がりは東へのびている状況であった。その頃すでに東側の水田地域では表土剝ぎの工事が進行中で、地元の人から弥生土器片などが採集され調査担当者に届けられていた。この広い区域は水田であったこともあり昭和58年に実施された県下の遺跡周知事業では空白区になっていた。しかし現地では、剝がれた部分を注意深く観察すると、弥生土器片や須恵器片、扁平打製石斧が多く採集され、さらに驚いたことに石棺が８基確認され、縄文晩期から弥生、古墳時代にかけての集落や墓地の存在が推察されたのである。

緊急に関係者の協議が行われ、遺跡は最大限盛土によって保護することと、削平される排水路部分500㎡が調査されることで合意された。

しかし東彼杵町では折から町制施行30周年記念の町誌編纂計画などがあり、わずかな面積しか調査しない緊急調査に対し、町単独事業による面的な調査を実施して少しでも遺跡の全体像を把握しておきたいとの意向が強まり、さらに740㎡の面積を町独自の事業として実施した。調査は

圃場整備による調査と切り離し、昭和62年11月13日より12月10日までの22日間にわたり実施した。

なお、この遺跡ではその後設計変更に伴う調査を１回実施している。また出土した石棺４基と町内出土の石塔は町教育委員会南側に史跡公園として復原移築している。

第１図　遺跡周辺の地形図

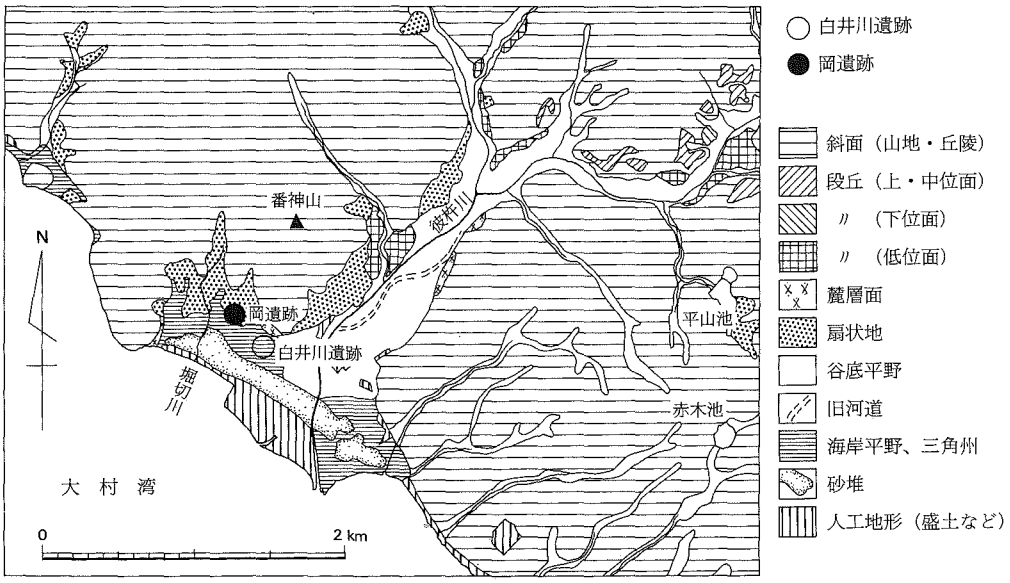
II　周辺の地理的・歴史的環境

大村湾の北東部に位置する東彼杵町は、海岸線約13kmを一長辺とする略平行四辺形の町域を持ち、総面積は74.2km²である。古くから交通の要衝でもあり、江戸時代の長崎街道（北九州・小倉間57里（224km））が通りぬけ、さらに平戸街道（彼杵・平戸口間14里（55km））の分岐点となっている。また海上交通は、大村湾を挟んで時津との航路が開かれていた。現在はさらに交通網が整備され、九州横断自動車道の開通により他県との交流が増々盛んになってきている。

地形的には北に聳える虚空蔵山（608.5m）が中起伏火山地として半径約４kmの円形の火山の座を保ち、著しく開析が進み壮年期の山容を呈している。東南部は彼杵川を隔てて台地が発達し、大野原の高位溶岩台地や赤木の中位溶岩台地を形成し、これらを刻む谷に岩屋川内の峡谷や千綿峡谷が見られる。これらの台地周辺には多くの溜池が点在し、旧石器時代の遺跡もよく見られる。また地形を利用してお茶の栽培も盛んで、県内の茶生産高の半数以上を占め、県内一のお茶どころとして知られている。

町内の地形は山地が多く平野部が少ない。後方を多良山系と虚空蔵山系に囲まれ、大村湾に向かって傾斜が進んでいる。従って分水嶺は佐賀県境になり、河足の一番長い彼杵川でも6.8kmにすぎず、次に大きい河川が千綿川である。両方の河口部には小規模な谷底平野と三角州が形成され、岸段丘を伴い水田が開かれている。

町内には現在70を越す遺跡が周知されている。平野部では彼杵川の流域に集中する。海岸線から約１km上流には彼杵川古墳群、上杉古墳群と呼ばれる円墳が点在する。さらに下流域には



第２図　遺跡周辺の地形分類図

全長51.8mの県指定の前方後円墳、「ひさご塚」が位置している。古墳時代の墳丘はこの他にも数箇所が所在していたといわれるが、鉄道敷設などによって壊されたようである。この平野部は縄文時代から利用され白井川遺跡の成立基盤となっている。しかし河川の氾濫も度々受けたようで土層にもその痕跡が見られた。

台地状の地形では溜池の周辺部や鞍部状になった所に旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多く見られる。遠目郷の遠目百貫石遺跡や蕪堤、綿打堤でも遺物を採集することが出来る。また昭和60年から62年にかけて実施された九州自動車道にかかる調査では、町内で10箇所の遺跡が対象となった。なかでも里遺跡や、松山A遺跡からはナイフ形石器、台形石器、尖頭器など旧石器時代の遺物が多く出土した。縄文時代の遺跡では野中遺跡や宮田A遺跡から晩期の良好な資料を出土している。組織痕土器や扁平打製石器などがそうであり、本遺跡とともに縄文農耕を考える上において重要である。

弥生時代の遺跡は晩期を伴う遺跡から見られているが、墳墓を伴うものとしては現在の所本遺跡が一番規模が大きいが、里郷串島遺跡からも十数基の石棺の出土があり弥生人骨も得られている。

古墳時代の遺跡は先に述べた彼杵川流域だけにとどまり、他の地区で確認されていないが、類例の増加に期待したいところである。

奈良時代から平安時代はこの地方でも空白部分が多い。肥前風土記に彼杵郡の名が見える程度である。また彼杵山大安全寺が創建されたのもこの頃と伝えられる。

平安時代の終わりから鎌倉時代になると文献にも登場し、この地方は仁和寺領であったことが窺え、彼杵氏や千綿氏、江串氏の在地領主の動きが活発になり、中世山城や寺院の存在が中心となる。昭和62年に実施された岡遺跡の調査とそれに続く白井川遺跡の調査では、この頃の遺構や遺物の出土が相次いだ。寺院跡を意識しての調査であったが、寺院の確認は出来なかったものの、中世の石塔類の確認は在地武士の所在を裏付け、木製品の出土や豊富な輸入陶磁器および国内産焼物の発見は、この地方の中世史に大きな裏付けを与えた。

大村藩「郷村記」によればこの地方には11寺が記載されている。しかしこれらの寺院は天正2年のキリシタンの打ちこわしに会い消滅してしまっている。わずかに残った大安寺、千寿寺、報恩寺、青心寺の地名と破壊された青温石製石塔の名残りが当時の面影を偲ばせてくれる。

報恩寺跡については、昭和60年の川井川内遺跡確認調査の際、15世紀を中心とする中国輸入陶磁器や国内産の土器が出土し、近接して文安2年（1447）銘の青温石製祈願塔やちょいのどう石塔群が位置していることに加えて、石垣遺構と建物遺構の存在から、地名に名残りを留める寺院跡とされた所以である。

山城は松岳城、重城、小薗城、串島城、小峰城の5箇所が知られる。この中で九州横断自動車建設に伴い、調査された小薗城がある。調査結果によれば、空濠と建物遺構、輸入陶磁器類が出土し、居館跡ではないかと推定されている。なお松岳城は、岡遺跡や本遺跡にかかわる山

城である。キリシタン関係の数少ない遺跡として瀬戸のキリシタン墓碑（県指定史跡）がある。高さ65cm、幅51cmの自然を利用し、花十字の下に元和７年（1621年）の銘が見える。これは大村純忠によるキリシタン政策の影響がこの時期まで存続していたことを窺う貴重な資料である。

近世になると彼杵は大村湾の統治下に置かれる。県境の俵坂峠を越え、彼杵川沿いに下る旧長崎街道の県内最初の宿場町が彼杵であった。大村郷村記によると、本陣や脇本陣等が置かれ、賑わっていたという。北へは平戸往還が分岐し、港は時津への就路があり長崎への道も開けていた。かつて豊臣秀吉の命によって捕えられた京都からながさきへ送られ処刑された26聖人もこの航路を利用している。

江戸時代の初期、九州で最初に鯨組を作り大きな財力を築いた深沢儀太夫は、彼杵を鯨の集産地として活気盛んにし九州各地に鯨産品を運んでいる。三百数十年続いた伝統も、世界の捕鯨禁止の波にのまれ、現在ではわずかに鯨問屋が１軒残るだけになり歴史の移ろいを感じさせる。

文　献

註　1　長崎県（1975）土地分類基本調査「早岐」

2　藤田　和裕　長崎県埋蔵文化財調査集報　III　―ひさご塚―
長崎県文化財調査報告書　第50集

3　鎌木　義昌　『日本の考古学』Ⅰ　九州地方の先土器時代　河出書房　1967

4　安楽　勉　『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
「松山Ａ遺跡」　長崎県文化財調査報告書　第93集

5　高野　晋司他　註６に同じ

6　津田　繁二　「我が長崎県の先史時代及び原史時代遺跡遺物の概略について」
長崎談叢第26輯　1940

7　安楽　勉他　『岡遺跡』　東彼杵町教育委員会　1988

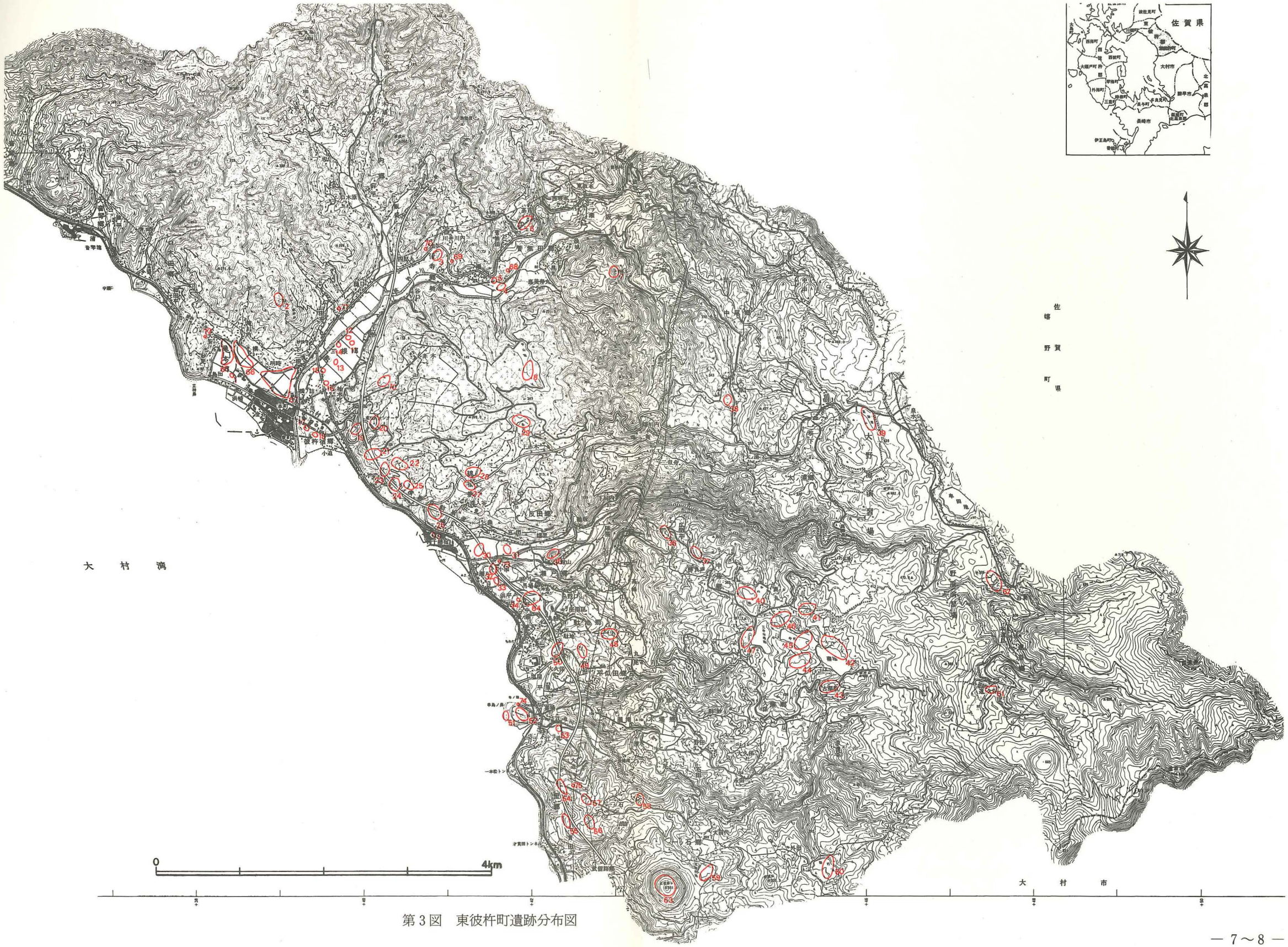
8　安楽　勉・町田　武彦　『川井川内遺跡』　東彼杵町教育委員会　1986

9　町内の各遺跡や史跡などについては東彼杵町30周年記念誌
ひがしそのぎ『ふるさと発見』東彼杵町教育委員会　1989を参考とした。

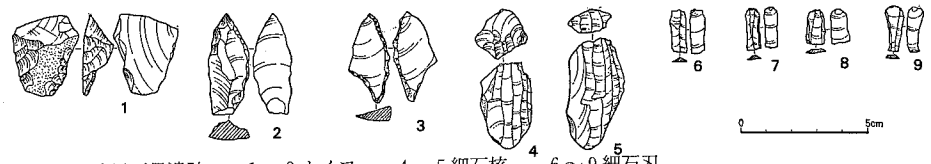
第１表　東彼杵町遺跡地名表

番号	遺　跡　名	遺跡所在地	立　　地	出　土　遺　物	時　　代	文献
1	島田五輪塔群	東彼杵町蔵本郷島田	平野　標高５m	五輪塔	中世	
2	松岳城	〃　三根郷	山　標高200m		〃	
3	川井川内遺跡	〃　法音寺郷字川井川内	台地　標高60m	黒曜石剝片、青磁	縄文、中世	8
4	菅無田Ｂ遺跡	〃　菅無田郷菅無田	〃　〃 90m	〃	〃	
5	菅無田Ａ遺跡	〃　〃　〃	〃　〃　〃	〃	〃	
6	高吉遺跡	〃　坂本郷	丘陵　〃 150m	黒曜石片	先土器・縄文	
7	重（かさね）の城	〃　〃	山　標高250m		中世	
8	平山池遺跡	〃　菅無田郷平山	池・平地　標高３m		縄文	
9	牛の頭（うしのと）	〃　千綿郷	丘陵　標高150m	青温石製石塔	〃	8
10	赤木遺跡	〃　三根郷赤木	〃　〃 100m～120m	〃	〃	

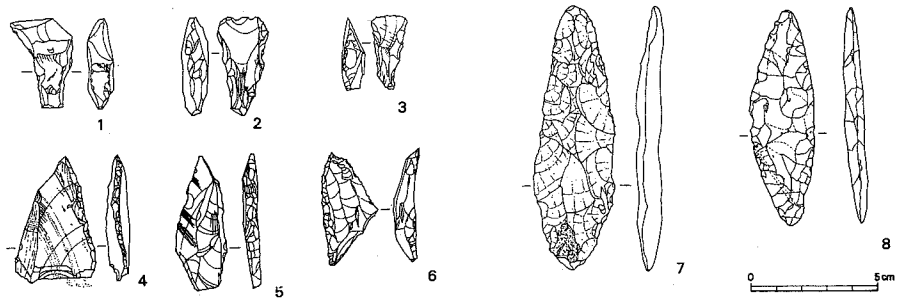
11	彼杵川古墳群第4号墳	〃　〃　字上杉	平野　〃　15m		古墳	
12	彼杵川古墳群第3号墳	〃　〃　〃	〃　〃　〃		〃	
13	彼杵川古墳群第2号墳	〃　〃　〃	〃　〃　〃		〃	
14	彼杵川古墳群第1号墳	〃　〃　〃	〃　〃　〃		〃	
15	上杉古墳群1号	〃　〃　〃	〃　〃　〃		〃	
16	上杉古墳群2号	〃　〃　〃	〃　標高5m		〃	
17	重棺(かさんがん)古墳	〃　宿郷古金谷	〃　〃　10m		〃	2
18	彼杵の古墳	〃　〃　古金屋道上	〃	鉄刀(2)、鉄鏃（多量）	〃	2
19	松山A遺跡	〃　彼杵宿郷松山	丘陵　標高50m～73m		先土器・縄文	4
20	松山B遺跡	〃　〃　〃	〃　〃　80m～90m		〃　〃	
21	名切E遺跡	〃　〃　名切	〃　〃　90m～100m	黒曜石片	縄文	
22	名切C遺跡	〃　〃　〃	〃　〃　80m～90m		先土器・縄文	
23	名切A遺跡	〃　〃　〃	〃　〃　50m		〃　〃	4
24	名切B遺跡	〃　〃　〃	台地先端部附近　標高30m～40m	石核、石鏃、スクイレバー、黒曜石剝片	〃　〃	4
25	名切D遺跡	〃　〃　〃	台地　標高70m～80m	黒曜石片	〃　〃	
26	外園遺跡	〃　千綿宿郷	丘陵　〃　〃	〃	縄文	
27	平（ダイラ）A遺跡	〃　〃　県立女子農学園	〃　〃　110m		先土器・縄文	
28	平B遺跡	〃　〃　〃	〃　〃　130m～140m		〃　〃	
29	赤木池遺跡	〃　〃　二木赤木池	〃　〃　180m	黒曜石片、縄文晩期、弥生、古墳	縄文	
30	宮田A遺跡	〃　〃　宮田	平野　〃　10m	〃	〃	4
31	宮田B遺跡	〃　〃　〃	〃　〃　〃		〃	
32	小薗城	〃　宿郷	丘陵　〃　30m		中世	
33	瀬戸古墳	〃　瀬戸郷瀬戸	台地　〃　30m		古墳	
34	東彼杵町のキリシタン墓碑	〃　〃　1413	丘陵　〃　50m		近世	
35	小峰城	〃　〃	山　〃　60m～70m		中世	
36	広間平遺跡	〃　中岳郷広間平	丘陵　〃　250m		縄文	
37	三井木場遺跡	〃　〃　三井木場	〃　〃　300m		〃	
38	太ノ原遺跡	〃　太ノ浦郷太ノ原	台地　〃　330m	黒曜石剝片	先土器・縄文	
39	足形遺跡	〃　遠目郷足形	〃　〃　430m	黒曜石片、石鏃	〃　〃	
40	かのまる池遺跡	〃　中岳郷かのまる池	丘陵　〃　360m		〃　〃	
41	幸十遺跡	〃　〃　幸十山	台地　〃　410m	黒曜石片	縄文	
42	蕪堤遺跡	〃　蕪郷蕪堤	丘陵　〃　370m	黒曜石剝片	先土器・縄文	
43	蕪郷遺跡	〃　〃	台地　〃　380m	黒曜石	〃　〃	
44	倉谷遺跡	〃　〃　倉谷	〃　〃　390m		縄文	
45	中池遺跡	〃　中岳郷中池	〃　〃　380m		先土器・縄文	
46	四ツ池遺跡	〃　蕪郷大久保、中岳郷四ツ池	〃　〃　370m		縄文	
47	三井木場池遺跡	〃　中岳郷三井木場	丘陵　〃　350m		先土器・縄文	
48	八幡遺跡	〃　駄地郷駄地	〃　〃　150m～160m	黒曜石片	〃　〃	
49	野田遺跡	〃　〃	〃		〃　〃	
50	大久保遺跡	〃　〃	〃　標高60m	黒曜石片	〃　〃	
51	串島古墳	〃　里郷串の島	岬　〃　15m		古墳	6
52	串島遺跡	〃　〃　〃	台地　〃　20m	黒曜石片	先土器・縄文・中世	
53	里郷積石塚	〃　〃　平	平野　〃　10m		平安	
54	里遺跡	〃　〃	台地　〃　110m	黒曜石片	先土器・縄文	
55	千綿才貫田古墳群	〃　〃　才貫田	丘陵　〃　50m		古墳	
56	鋒ノ久保	〃　一ツ石郷鋒ノ久保	〃　〃　90m	黒曜石片	縄文	
57	平見高野	〃　〃　平見高野	〃　〃　150m	黒曜石剝片	先土器・縄文	
58	一ツ石台地遺跡	〃　〃　台地	台地　〃　150m	〃	縄文	
59	太田代池遺跡	〃　〃　太田代池	丘陵　〃　200m	〃	先土器・縄文	
60	綿打池遺跡	〃　〃　綿打池	〃　〃　280m	マイクロコア	〃　〃	
61	久保遺跡	〃　遠目郷字下遠目久保	山麓　〃　560m	黒曜石片	縄文	
62	百貫遺跡	〃　〃　大野原	台地　〃　510m		先土器	
63	武留路山城	〃　武留路郷	山頂　〃　300m～341m		中世	
64	野中遺跡	〃　瀬戸郷瀬戸	丘陵　〃　50m～70m	磨製石斧、黒曜石片	縄文	
65	島田遺跡	〃　蔵本郷字島田	〃　〃　5m～10m	青・白磁、須恵器、弥生式土器	弥生～中世	
66	岡遺跡	〃　〃　字岡	〃　〃　〃　〃	弥生式土器 須恵器 土師器 青 白磁 他	中世	7
67	白井川遺跡	〃　〃　字白井川	平野・微高地　標高5m～10m	縄文式土器、扁平打製石斧、石皿、石鏃、他	縄文～中世	
68	平原石塔群	〃　菅無田郷平原		青温石製石塔	中世	7
69	法音寺石塔群	〃　法音寺郷法音寺平		〃	〃	〃
70	ちょいのどう	〃　〃　四郎丸		〃	〃	〃
71	せきょう庵	〃　川内郷松葉		〃	〃	〃
72	大安寺跡	〃　蔵本郷大安寺(だいじ)		〃	〃	〃
73	清心寺跡	〃　瀬戸郷片山		〃	〃	〃
74	江串三郎入道塚	〃　里郷江串浦		〃	〃	〃
75	辻墓	〃　〃　辻		〃	〃	〃



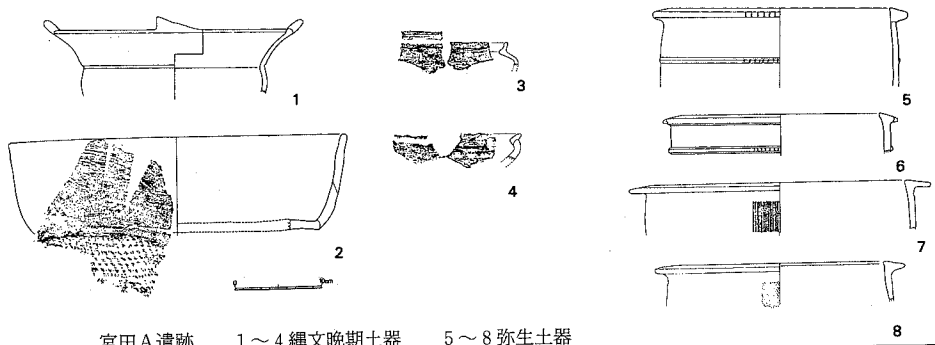
第３図　東彼杵町遺跡分布図



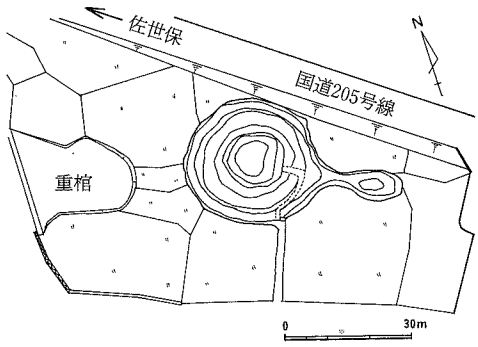
遠目百貫遺跡　1～3ナイフ　4・5細石核　6～9細石刃



松山A遺跡　1～3台形石器　4～6ナイフ　7～8石槍

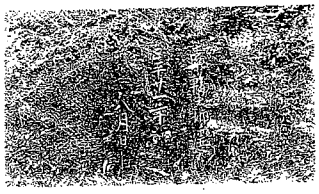


宮田A遺跡　1～4縄文晩期土器　5～8弥生土器



ひさご塚

五輪塔地輪



宝篋印塔基礎
岡遺跡出土の青温石製石塔

第4図　町内の遺跡および出土遺物

Ⅲ 調　　査

1．調査の概要

県営圃場整備事業に端を発した遺跡の調査は、彼杵中学校北側の岡遺跡に始まり、東側の白井川地区にまで及んだ。

白井川遺跡は広い範囲に及ぶが、同じ遺跡を仕事の性質上、県営事業と町単独事業の２つに区別して行われなければならないというやや複雑な調査でもあった。そのため報告書も分冊する結果になったが、理解を深める上で県営事業分と一部重複する面もある。

遺跡は標高約３ｍから約７ｍに至る、北から南にかけて緩やかに傾斜する水田で、過去にも小規模な改田工事を受けている。

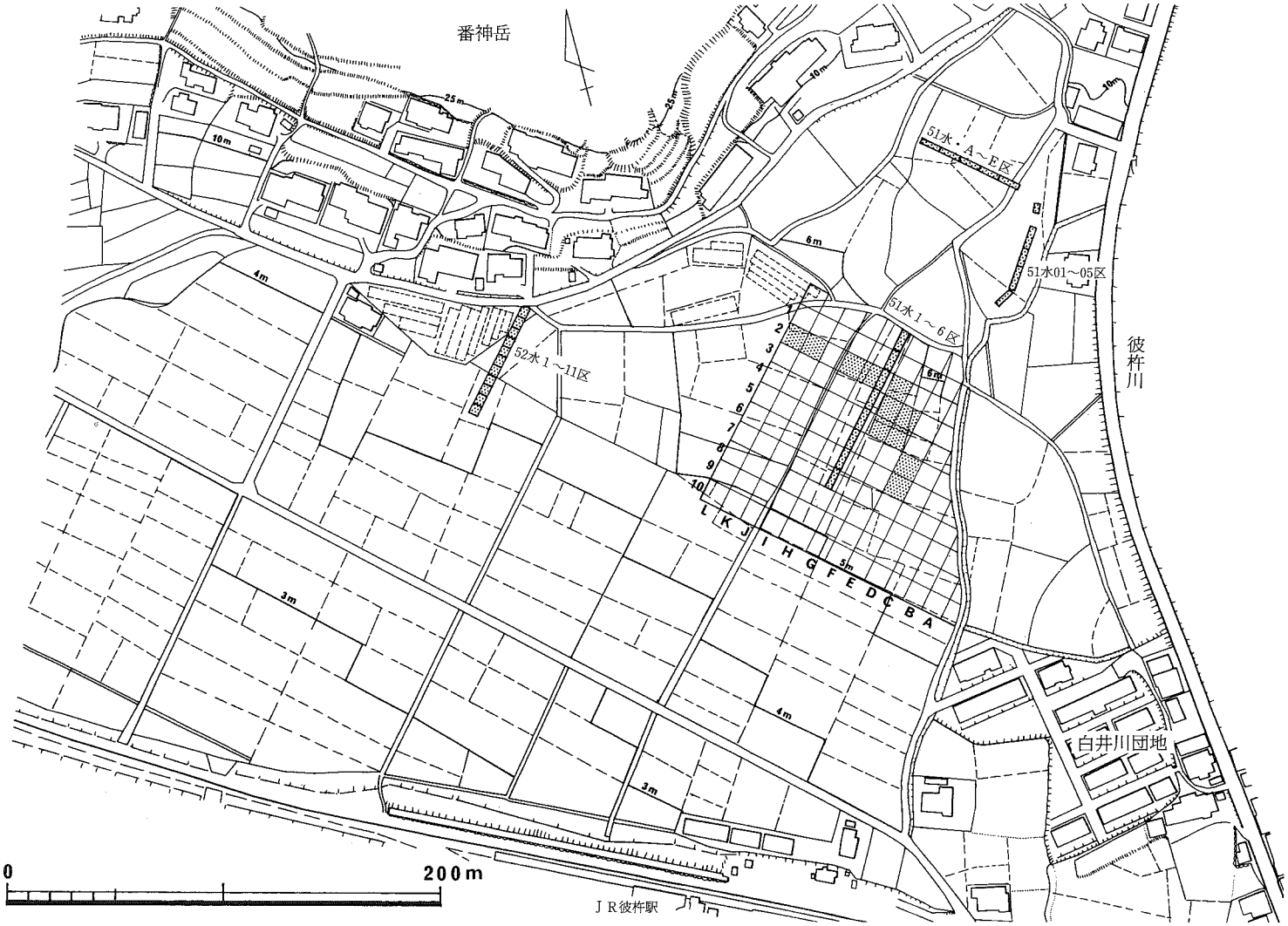
県営圃場整備事業にかかる調査区は51号・52号排水路であり、前者は北側に古墳時代、南側に縄文、弥生時代の遺物が主に出土し、後者には中世の良好な資料が得られている。

今次の調査区は墓域が広範囲に及んでいるため、51号排水路を基準として東西120m、南北120mの範囲に10m×10mのグリッドを組んだ。北から南へ１・２・３…、東から西へＡ・Ｂ・Ｃ…と記号を付した。調査区は工事によってすでに表土層の削平を受けており、遺物は広い範囲から出土することは先に述べたが、特に広範に採集されたのは縄文晩期の扁平打製石斧である。さらに第11グリッドからさらに南側へ約200m離れた52号排水路と23号用水路の交差する付近から数点ではあるが、縄文中期の土器が採集されている。現在のところ、この土器が遺跡の古い上限である。なお後期の鐘崎式土器は１個体分ではあるが、51水７区５層から出土している。

今回の調査では縄文晩期と弥生終末期の遺物が全体的に出土しており、Ｅ－３・Ｆ－３・４区において弥生終末期の竪穴式住居跡が３棟検出され、周辺にも集落が広く存在することが推察された。

埋葬遺構は箱式石棺墓、石蓋土壙墓、甕棺墓合わせて22基を検出したが、今回の調査分としては11基を対象とした。この埋葬遺構は表土が剝がれていて確認されたものが多くを占め、まだ周囲には群集墓としてかなり残っていると思われる。

また圃場整備地区内に所在する遺跡については、盛土工法で設計を変更し、住居跡については埋め戻して保全している。



第５図　調査区域図(1/3000)

2．土　　層

土層については51号支線排水路部分を一番深く掘ったことと、調査区のほぼ中央部にあたることから１区～６区およびＦ－４区について観察してみる。

この部分は80mの長さで調査を行い、他の区域と比較して土質の最も安定して堆積した地区である。なお表土層は失われているが、当時の標高は9.5m、さらに50m南に下った６区の旧表土面は5.6mの高さを示す。

２層は灰白色の砂質の層に黄色の粘質土が斑状に混じり、小指大のこげ茶色の粒子を全体に含む。弥生末から古墳時代の遺物が混じる。

３層は黄灰褐色の粘質土に小礫が混じる。こげ茶色の粒子はさらに小さくなり、しみ状に全体に入る。弥生包含層。

４層は暗褐色粘質砂土できめの細かい砂質土が混じり、ややしまる。縄文時代晩期の包含層で、他の遺物は認められない。

５層は暗褐色粘質土で約40cmの厚さ。上10cm程ぐらいまでは縄文晩期の遺物が出土する。また７区５層下部では渦巻文と沈線の組み合わせによる後期鐘崎式土器がひとかたまりに出土している。

６層は褐色粘質土で４層に似ている。無遺物層である。８区から下方の標高４m付近では礫ばかりになる。

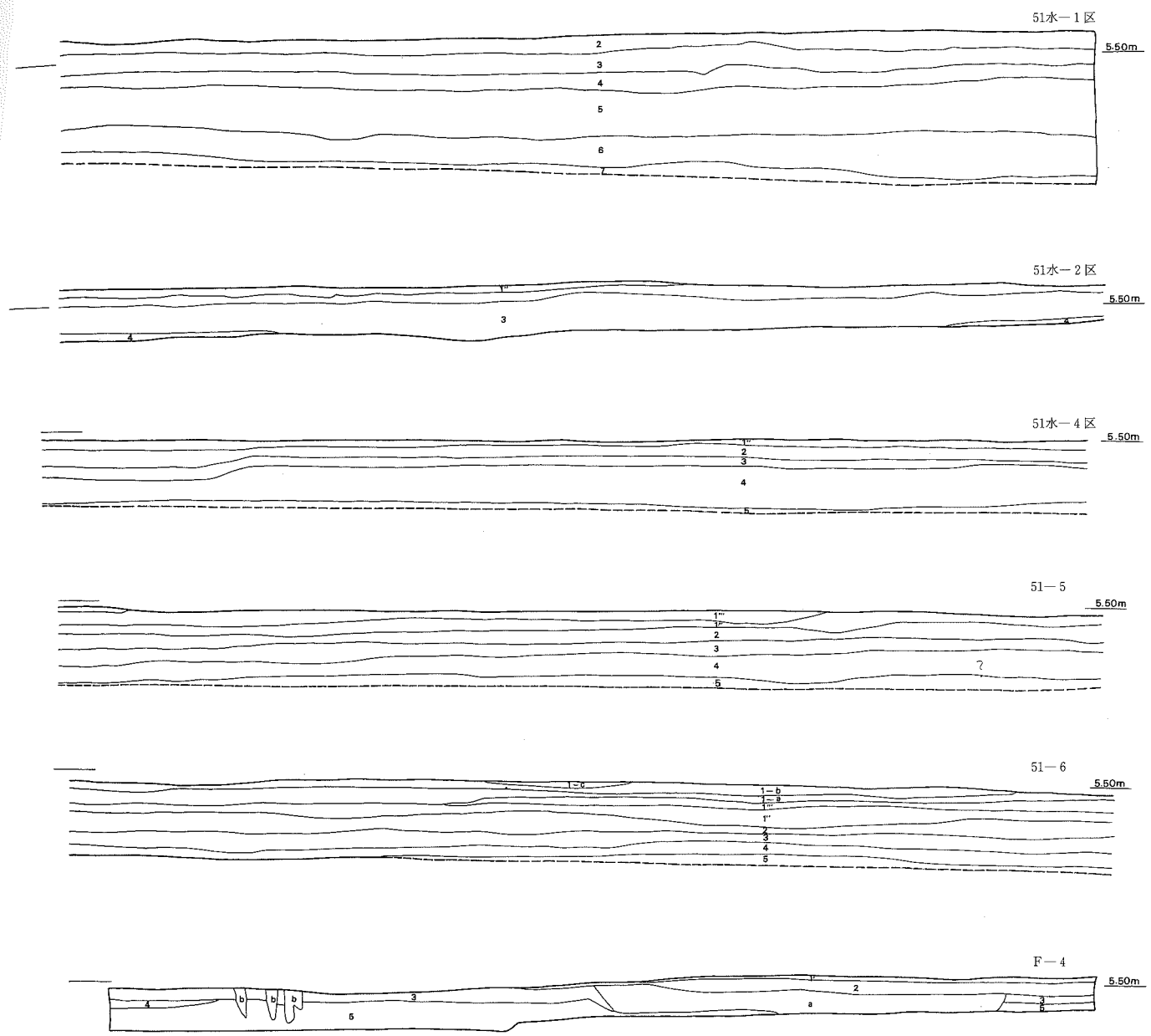
全体的に層の傾斜は北から南へ彼杵川の流域に沿った形である。３・４層は遺跡全域に認められるが、部分的に河川の氾濫の影響を受けている部分もある。Ｆ－４区北壁も前述の層位と基本的には変化しないが、ここでは２号住居跡の断面がII層からIII層IV層を掘り込み、炭化物片や焼土、土器片などを全体に含み暗褐色を呈している。

IV　出土遺構・遺物

白井川遺跡全体における遺物の出土は、縄文時代から中世に至るまで相当数に達している。すでに51・52号支線排水路においては数万点を数えている。今回の主な調査区であるＥ－３・４、Ｆ－３・４・５についても30,000点を越え、全体では40,000点に達している。

圧倒的に多いのは弥生時代終末の土器であり、一部古式土師に入るものもある。弥生土器の上限は刻目突帯である板付II式および亀の甲式であるが、量的には少量である。縄文時代の遺物がそれに続く。この時期の黒曜石片も多く得られているが概して不純物を含み質が悪い。古墳時代の遺物は少量の出土があるが、51号排水路01～05区の河川の氾濫の影響を受けているものである。

遺構は弥生時代に属する埋葬遺構と、終末期に属する住居跡がＦ－３・４、Ｅ－３区から３



51水1～5区土層
表土層は剝がれている
2．灰褐色粘質土層
3．黄灰褐色粘質土層
4．暗褐色粘質土層
5．暗褐色粘質砂質土層
6．褐色粘質土層
7．礫層

1″客土

1″～1′は客土

1b～1″は客土

F－4区土層
1．黄色土層
2．黄褐色土層
3．暗褐色粘質土層
4．暗黄色土層
5．明褐色粘質土層
b．杭列

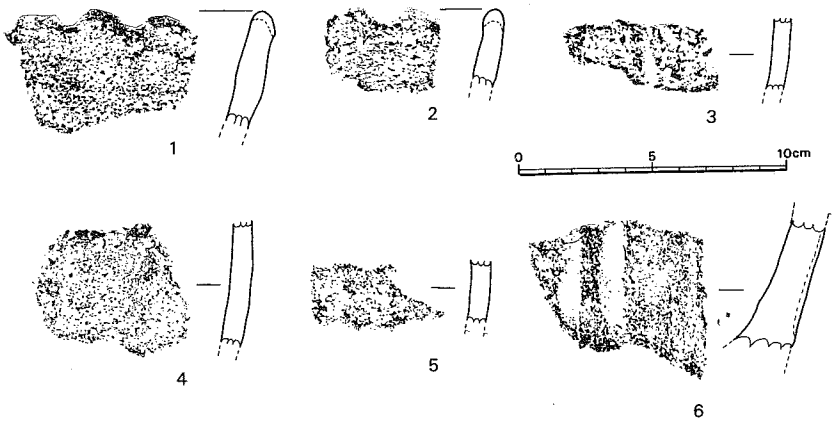
第6図　土層実測図(1/60)

棟検出された。D－6区では縄文晩期の層から柱穴と思われる遺構が検出されている。

以下年代順に遺物を概観する。

1．縄文時代中期の土器（第7図1～6）

中期の土器は52号支線排水路と51号支線道路が交差する南側付近で採集された。わずか7点である。かなり入念に周辺を観察したが、出土地点は局所的に限られていた。**1**は口縁部である。口唇部は指状のもので割合小さく凹み波状を呈する。胎土には滑石粉末を含みよくしまっている。焼成も良好で、内外とも赤褐色。**2**は**1**と同様で同一個体かも知れないが、やや摩耗を受けている。**3**はわずかに縦に浅い沈線が見られる。胎土にはやや粗い滑石粉を含み、胎土焼成ともに良好。**4**は滑石粉を多く含む無文の土器、器面は指押さえの痕が残る。色調は暗褐色。**5**は無文で胴部の小破片、外面は褐色、内面は黒色である。**6**は底部から立ち上がりの部分で、粘土接合面からはずれている。太形の沈線が縦に入っておりこの土器が中期の特徴をよく出している。胎土には滑石粉末を含みよくしまっている。内面は灰褐色、外面は茶褐色。縄文中期土器の出土地は、大村湾東部沿岸では所々に点在している。最近の九州横断自動車道にかかる調査では大村市葛城遺跡、町内千綿に位置する外園遺跡・宮田遺跡があげられるが、量的には非常に少ない。またやや内陸部に入るが、波佐見町山角遺跡においても出土している。以上のように中期阿高式土器系統の土器はまだ実態が不明である点が多いが、今後の類例の増加に期待したい。



第7図　縄文中期の土器実測図(1/2)

2．縄文晩期の土器（第8～12図1～67）

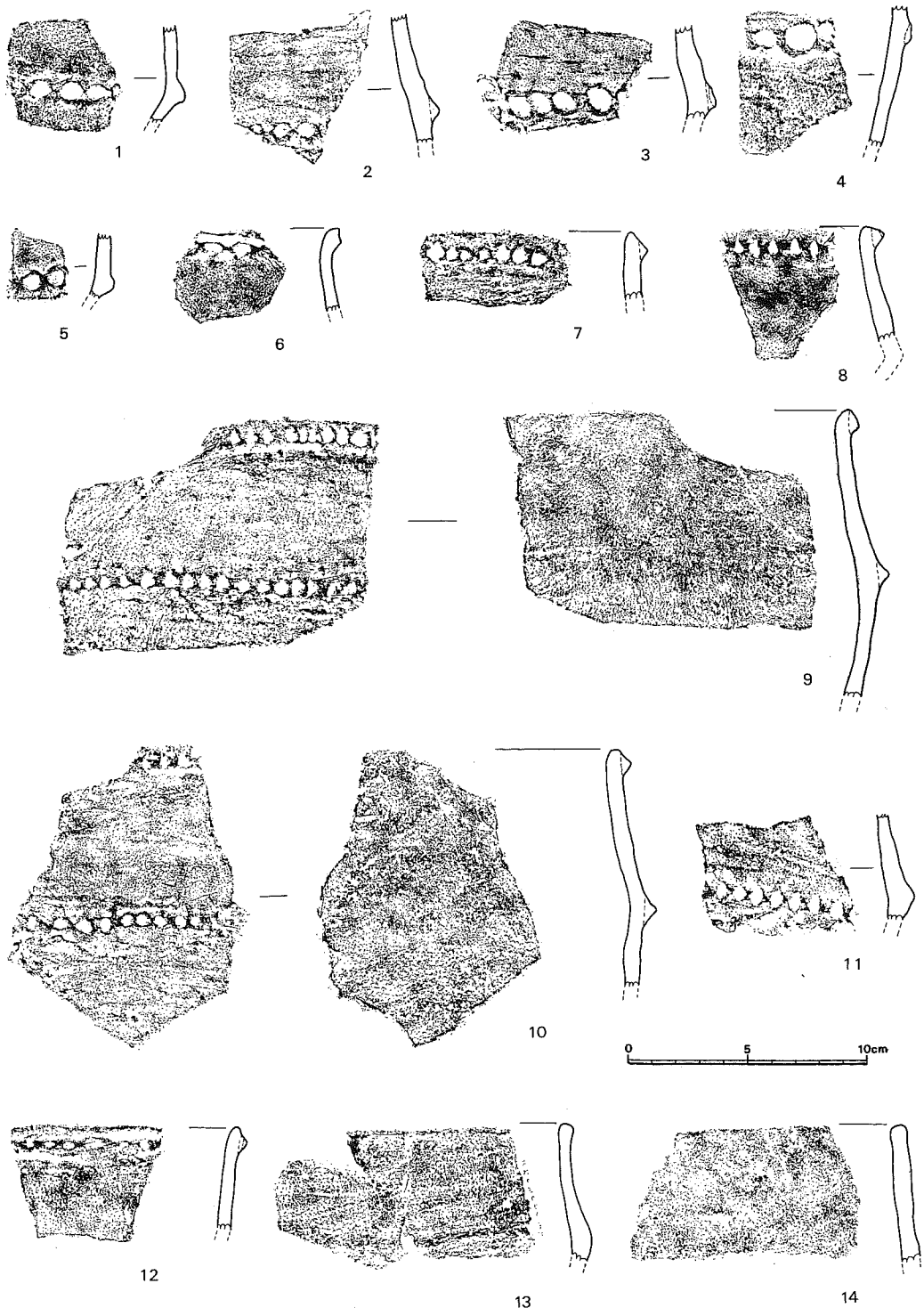
晩期の土器は第4層を主体にまとまって出土している。粗製土器精製土器と扁平打製石斧をセット関係としている。

①粗製土器（第8図1～12・第9図15～32）

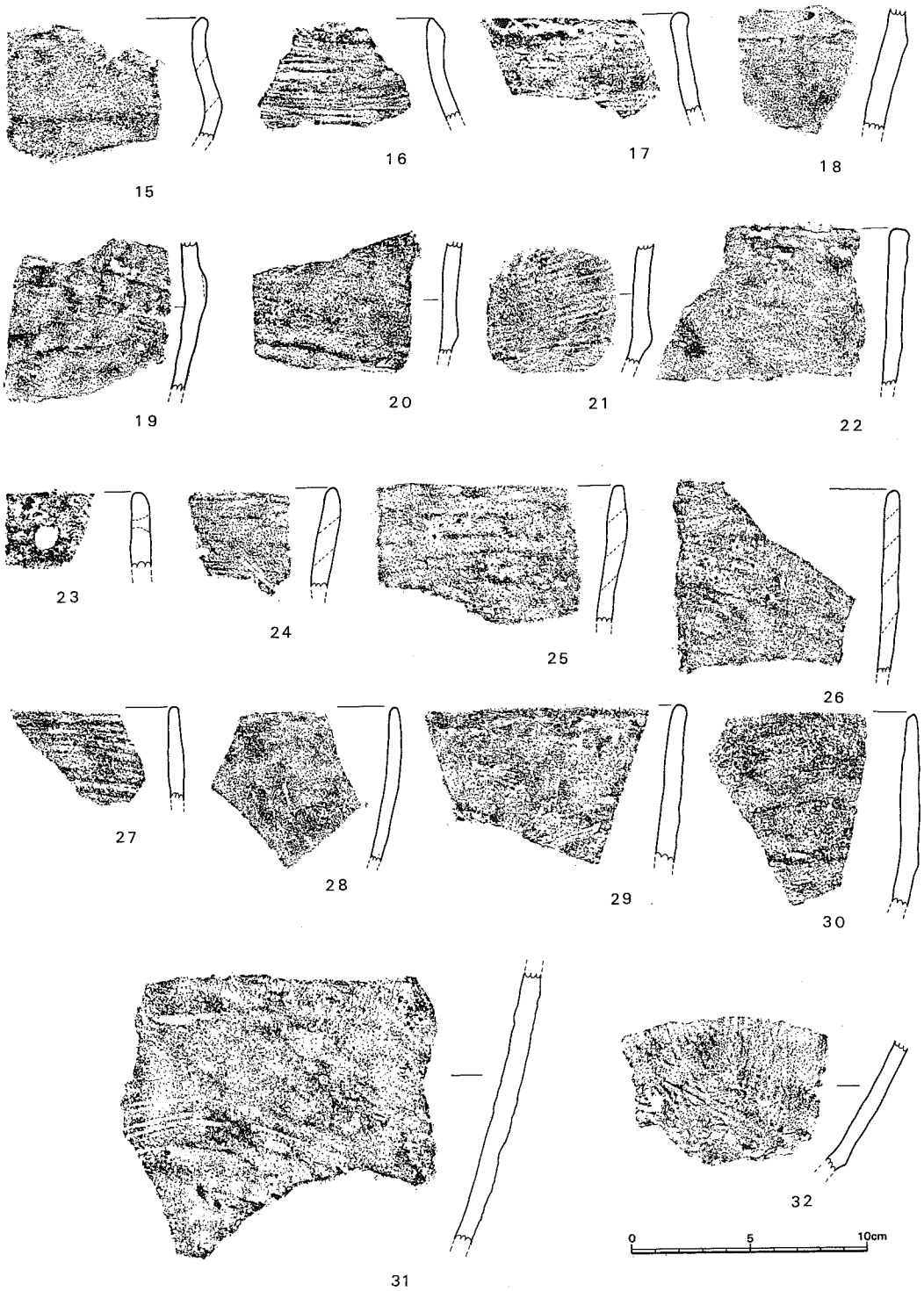
粗製土器は甕形と深鉢形の土器に区別される。前者は刻目突帯文の土器や胴部が屈曲する土器を指し、後者は胴部がゆるくふくらんだものが多い。また胎土については表面がザラザラした感じのものを砂質胎土、表面がよくしまりザラつきのないものを粘質胎土とした。

1～5は刻目突帯文土器の中でも指頭押しつけに近いもので、断面が丸く凹むものである。1は胴部がゆるく屈曲し砂質胎土には石英粒や長石および白い砂粒を含み焼成は良好。内外とも暗褐色を呈する2は外面がヘラ状のものでヨコナデされ暗褐色を呈している。内面は条痕が一部に施され黄褐色である。3は屈曲部で下部が失われているが、刻目は残っている。この文様は刻まれているというより指で押している感じである。砂質胎土には長石、雲母、石英粒などが多く含まれ焼成がしっかりしている。内外面とも条痕調整が認められ、色調は灰褐色に近い。5は小破片であるが1に近い形状を有し、胎土・焼成ともしっかりしている。以上の土器群は刻目突帯の技法から見ると山の寺式土器の特徴をもつものである。

6は口縁部が外反し胴部は屈曲するものであるが、口唇はナデられ外側に引き出されている刻みは棒状のもので上下に押さえられており通常の文様とは違っている。砂質胎土は長石、雲母、石英粒を含み焼成もよくしまっている。7は口縁部に刻目突帯を巡らすもので外面にはススが付着している。器形は胴部がやや張ると思われる。砂質胎土には長石、石器、白い砂粒を含み焼成も良い。8は口唇部外側に貼り付けられた突帯浅く幅が狭い刻目が施されている。内外面はヘラによるナデが施され、暗褐色を呈している。9は口縁と胴部に両面から切り込みを入れた刻目を持つ大形の破片で、内外面は棒状のものでヨコナデされている。胴部下半は時に顕著である。またススも多く付着している。胎土には長石や白い砂粒が目立ち焼成は良い。10は胎土焼成、器形と刻目突帯の手法も9に類似しているが、上下の刻目突帯の間隔は10の方が幅が広い。11は胴部の突帯は両刻みで長石、白い砂粒が目立つ。内外とも暗灰褐色を呈する。12はうす手の本体口縁にミミズバレ状の粘土を貼り付け浅い刻目を入れている。内外面はナデ調整で、色調は暗褐色を呈する。13は口縁が外反し胴部がゆるく張る。内外面とも板状のもので、ヨコナデされ、色調は外面暗灰褐色、内面は黒色を呈している。14は無文口縁で端部はやや平坦である。胴部にかけてはやや張ると思われる。砂質胎土には長石、雲母、石英粒などを含み焼成は良好。器表面には指頭による押さえの痕が残る。色調は内面は暗褐色、外面は明黄褐色を呈する。15は口縁が外反し胴部が張る無文の土器である。外面は摩耗を受けているが、内面胴部は研磨の痕跡を留める。内外面とも暗褐色で胎土焼成は良好。16は口縁部が尖り気味におさめられ外反するが、形状は胴部が強く屈曲すると思われる。胎土はこれまでの土器がザラザラと砂質が強かったのに対し粘土質が強くしまった土器である。外面には条痕がよく残り暗褐色、内面はナデされほぼ黒色。17は口縁部が外側からつまみ出され平坦である。形状はゆるく屈曲すると思われ、内外に条痕が残る。砂質胎土には長石、石英、白い砂粒が多く含まれる。焼成良好で暗灰褐色を呈する。18は器壁厚く器表に隆起した一条の線が見られるが、これを境にわずかに屈曲する。内面は黒色で条痕が認められるが、外面はやや摩耗を受け、わずかに痕跡を留めるだけで、褐橙色である。19は胴部にわずかな粘土帯を貼り付け、張り出し部を強調している。外面は条痕と棒状工具によるナデが施され暗褐色。内面には同工具による仕上げが施され、灰褐色を呈している。砂質胎土で長石、石英、白い砂粒を含み焼成は良好。



第８図　晩期土器実測図(1)(1/3)



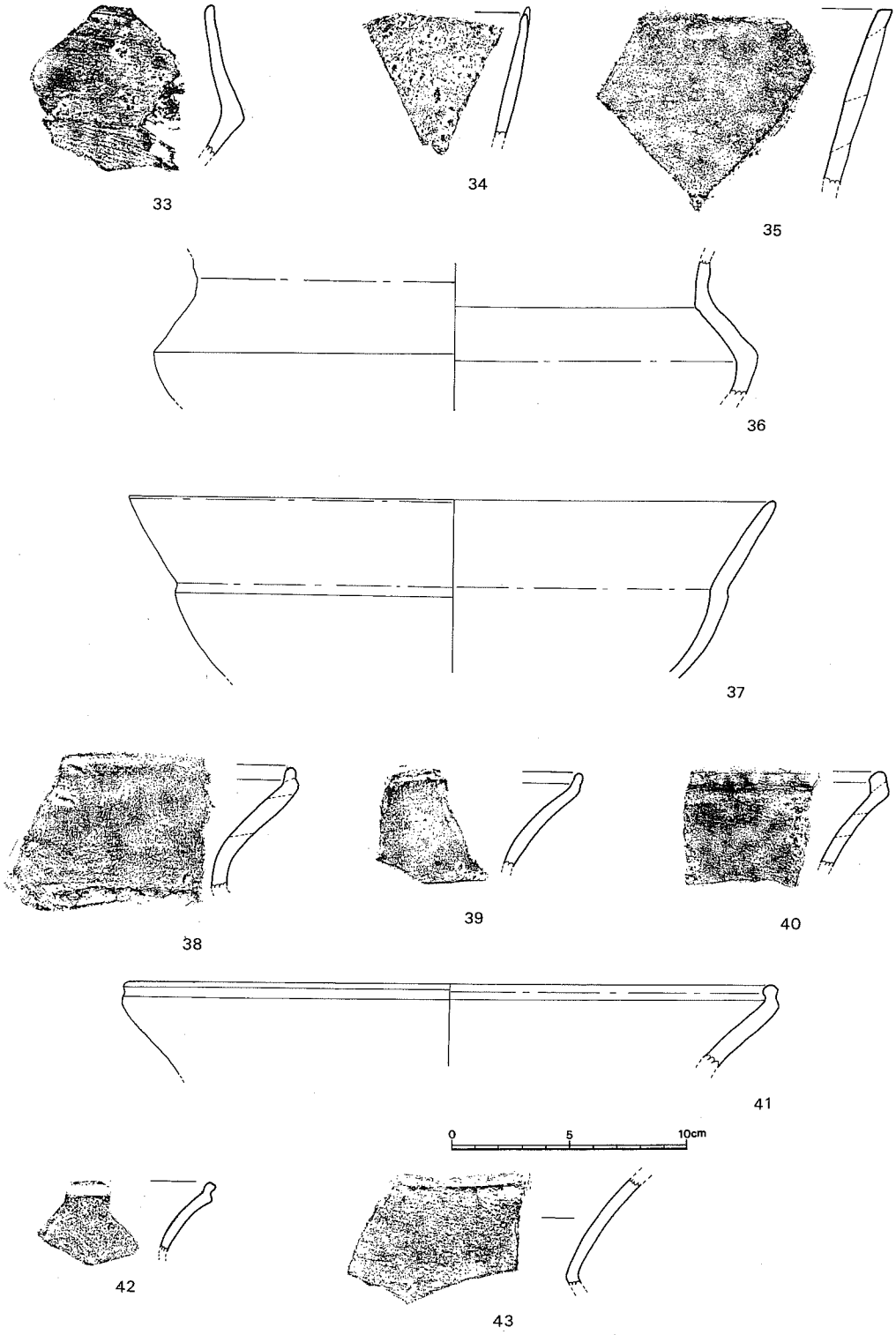
第９図　晩期土器実測図(2)(1/3)

20胴部の張りだしは、つまみ出してわずかな稜線をつけ、口縁部は外反させ18と類似している。砂質胎土で長石、石英、雲母粒を含む。焼成は良好で内面黒色、外面暗褐色を呈する。**21**はゆるく屈曲する胴部で外面には条痕調整が見られる。砂質胎土には長石、白い砂粒を含み焼成も良好。内面は灰黒色で外面は暗褐色を呈する。**22**は直行する口縁部で、口唇はやや丸くおさめられている。内外面とも棒状工具によるナデが施され、表面には凹凸が見られる。砂質胎土で長石、石英、白い砂粒を多く含む。内面褐色、外面暗褐色である。**23**は丸くおさめられた口縁部下に１つの穿孔が見られる。焼成後のもので補修孔かも知れない。砂質胎土で焼成は良好。内外面とも黒色に近い。**24**はわずかに内湾する口縁で、端部はやや尖り気味である。頸部にかけては若干しまると思われる。粘質胎土で片岩を多く含み特徴的である。**25**は口縁部でわずかに内湾し頸部がしまっている。口唇部は平坦である。内外とも棒状のものでナデ調整され器表には凹凸が見られる。砂質胎土で長石、石英、雲母、白い砂粒を含み、焼成は良好。内面は灰褐色で器形は大形の鉢になると思われる。**26**は口縁部でわずかにふくらみをもち底部に移行すると思われる。砂質胎土で雲母が目立つ。内面は黒褐色、外面は灰褐色。**27**は直行する口縁で、端部はやや平坦である。内外面とも丁寧な条痕が施されている。粘質胎土でよくしまり、内外とも褐色を呈している。**28**は、口縁直下がゆるくふくらみ器壁うすく、胎土はやや粘質が強く半精製されている。形状は深鉢形で、器表は内外ともナデ調整されている。内面は褐色、外面はスス状のものが付き黒褐色。**29**は口縁部で大形の鉢になる。胎土は粘質が強くよくしまっている。板状のものでヨコナデされ、口唇部は外側に斜行している。焼成は良く内外とも灰褐色を呈する。**30**は口縁部で下部にわずかに稜線が見られるが、これは板状の工具で調整されたものである。砂質胎土で長石、石英、雲母粒を含み、内外とも黒褐色でスス状の付着物が見られる。**31**は大形深鉢の破片である。外面は条痕調整の上をさらに板状の工具でナデている。胎土は粘質が強く石英や白い砂粒が含まれ、焼成良好で赤褐色を呈する。**32**は底部から立ち上がりの部分で、内外とも条痕が粗く付けられている。胎土はやや粘質が強い程度で長石、石英粒が目立つ。

②精製土器（第10図33～43、第11図44～50）

精製土器は浅鉢がほとんどを占め、しかも口縁部か胴部である。底部は認められていない。

33は口唇部が尖り外反している。頸部もやや外反し、胴部の張り出しはシャープである。内外面とも磨きがかけられ、胴部から下は細い条痕が見られる。胎土には長石や白い砂粒が目立ち焼成は良好である。色調は灰褐色。**34**は口縁部で端部がうすく引き伸ばされ尖る。形状は波状になるもので、わずかに内湾する。胎土は精緻で焼成も良好。内外とも暗褐色を呈する。**35**は鉢形に近い大きな形状を示す。器表は荒れ研磨の跡は見られない。口縁端部は平坦である。内外面とも灰白色。**36**は粗製に近い胎土である。口縁部を欠失するが、頸部から上は外反する。胴部は張り出し底部へ向かって丸くなっている。内外面はヘラ状のものでナデられ、稜線は鮮明に出ている。形状は頸部のしまった壺に近い形になると思われる。焼成は良好で内外面にか



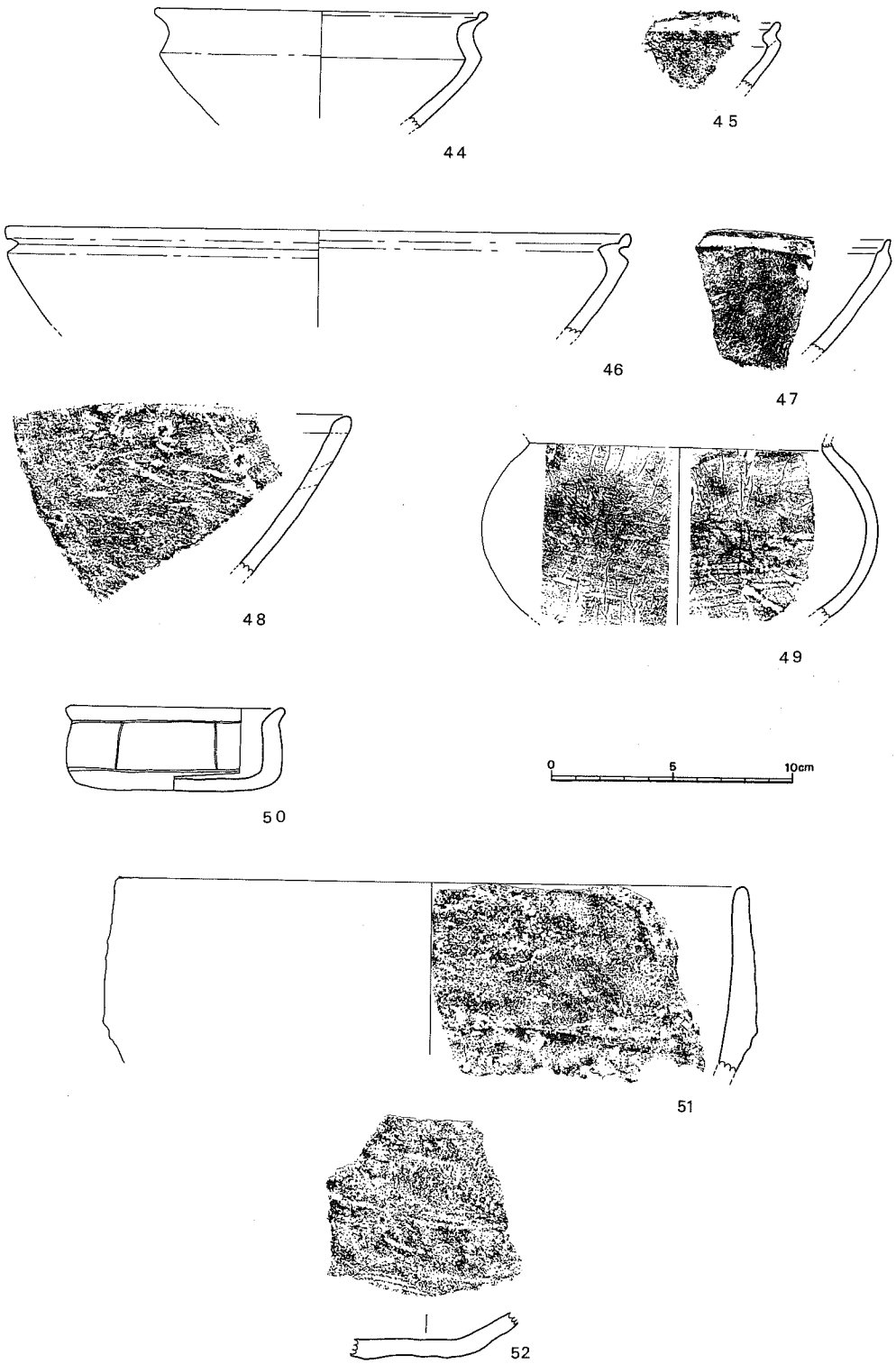
第10図　晩期土器実測図(3)(1/3)

けては丸くふくらむ。研磨は受けているが全体的に摩耗を受けその痕跡を留めない。色調は内外とも暗褐色。**37**の口は広く開き頸は低い段を有しくびれている。胴部にかけてはゆるくふくらむが底部を欠く。内外とも暗褐色で復原口径26.3cmを測る。**38**は外側の口縁直下に一条の沈線を入れ立ち上がり、口唇部は丸くおさめられている。頸部は割合長く外反している。内外とも丁寧に研磨され、黒色を呈している。**39・40**とも基本的には**38**と同様であるが、**39**は器壁がうすい。**41**は口縁部の形成は前者と同じであるが、稜線から直下が少し丸みをおび器壁も厚くなっている。**42**は**39**と同様の特徴を持つ。**43**は頸部から胴部にかけての屈曲部で折れており、口縁端部も欠失している。器表はやや摩耗しているが、黒色研磨の土器である。**44**は復原口径14cmの浅鉢である。口縁部と頸部の間隔が狭く、口縁と胴張り出し部の割合が同じである。胎土は長石、石英、白い砂粒を多く含み摩耗しているため粗製土器同様であるが、最初は研磨を受けていたと思われるが焼成は良好で黒褐色を呈する。**45**は小形の土器で口縁部がわずかに引き出され、内側に沈線が巡る。口縁と頸部はさらに間隔が狭くなっている。内側とも研磨を受け黒色。**46**は口縁部がわずかに立ち上がり頸部は内側に張りだし、外側はその分だけ鋭角に内湾している。頸部の張り出し部は口縁に近接し、胴部に丸みをもたせながら底部に連なる。胎土は若干ザラついた感じであるが、研磨は受けている。焼成は良好で、内外とも暗褐色を呈する。**47**は黒色研磨である。口縁はわずかにつまみ出されるだけで、頸部の張り出しは退化している。**48**は頸部から口縁の形状は一体化し、さらに退化現象が著しい。若干器壁は摩耗しているものの、研磨は受けている。内外とも暗褐色である。**49**は胴部が丸く、頸部から口縁を欠失しているが、胎土は精選され堅徴である。器壁内外は最初細かいハケ状のもので調整され、その上から細い棒状工具でヨコナデされ、研磨を受けた状況になっている。**50**は口径9cm、深さ3.5cmの小鉢である。口縁部分はわずかに外反し、小さくくびれ、この部分には一条の浅い線が巡る。底部はほぼ平坦で、立ち上がりの部分は丸く、上に向かって狭くなる。立ち上がり部分には浅い沈線が巡り、さらに胴部を縦に沈線を描き6分割に区切っている。内面はヨコナデ調整され灰黄褐色。胎土は長石、雲母などを含み精選されている。

③組織痕土器（第11図51・52）

組織痕土器として取り上げたのは2点だけである。

51は厚みのある口縁部で、外面には胴部と区別されるところに段を有する。丁度のところで下部が欠失しているが、おそらくこの下には組織痕が見られたはずであるので一応図示した。形状は鉢状になると思われる。砂質胎土で長石、石英、雲母粒などを含み内外面は黒褐色を呈する。なお外面にはスス状の付着物がある。**52**は底部で底から立ち上がり部分である。組織痕のなかでも編布圧痕と呼ばれるものであろう。ヨコ糸の痕跡をわずかに留めているのみで、タテ糸はよくわからない。器表は凹凸が若干見られる。内面は黒色で条痕が施されている。スス状のものが全面に付着している。



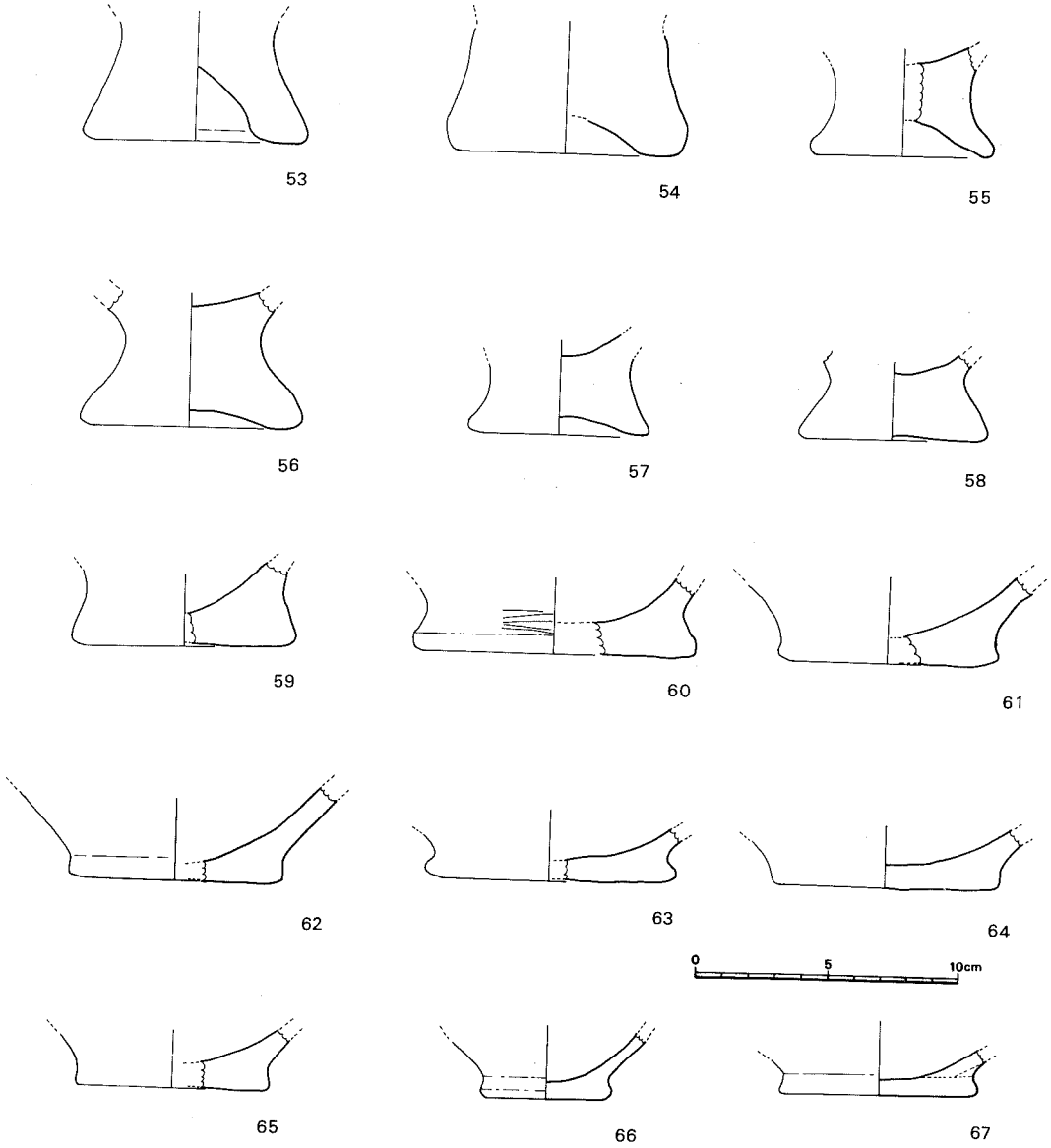
第11図　晩期土器実測図(4)(1/3)

底部（第12図　53～67）

底部は全部で20点あまり出土したが、すべて粗製土器である。**53**～**58**はあげ底で高台になる一群である。**53**は幅1.5cmの平坦面が付き、大きくあげ底になっている。胎土には長石や石英、白い砂粒を多く含む。立ちあがり部はよくくびれ台形状を呈する。**54**は大きなあげ底ではないが、立ちあがりのくびれが弱く全体に厚味を持つ。胎土は長石や石英粒、白い砂粒が多く砂質が強い。色調は暗褐色を呈する。**54**は底は凹凸がありあげ底で平坦面がなく粗い作りである。胎土には白い砂粒が目立つ。黒色の内面が残り外面は茶褐色。立ちあがり部はよくしまっている。**56**はたちあがり部がよくくびれ下に広がる安定した底である。幅1.5cm程の平坦部をもち、わずかにあげ底となる。底部内面には有機質のこびりついたものが残る。やや砂質胎土であるが焼成は良好で褐色を呈する。**57**は指頭による整形で若干いびつで、底は工具でカキ取られあげ底を呈し、平坦面が若干残る。底部内面には有機質の物が付着している。胎土は粘質が強くよくしまり焼成もよい。**58**はかすかにあげ底になるもので平坦面が大きい。立ち上がり部はよくくびれている。胎土・焼成はこれまでの底部とかわらないが色調が灰色である。

59～67はいわゆる平底の一群である。**58**・**60**は立ちあがりの部分が条痕調整されている。胎土は砂質が強く、長石、白い砂粒を多く含む。色調は全体的に灰褐色である。**61**は底尻の部分が若干尖り気味で、平坦部は凹凸がある。胎土はやや粘質で、焼成甘い。**62**は立ちあがりが短く胴部が大きく開くタイプである。胎土は粘質が強く、焼成も良好である。底内面にはスス状の付着物を見る。**63**は比較的小形の底部で、立ちあがりが短く外に開く形をとる。内底の傾斜はゆるやかで胎土には片岩粉を混入する。焼成は良く内外とも褐色を呈する。**64**は底尻からの立ちあがりがほぼ直角に近い。内底の傾斜もゆるやかで壺に近い形態を成す。胎土もよく精製され、器表はヘラ磨きされている。焼成も良好で内外とも褐色を呈する。**65**～**67**は円盤貼り付けの底部に近い。底尻が丸く角がとられ、立ち上がりがほぼ垂直である。しかも大きなものではなく小形の器になるものである。**66**は胎土に片岩粉が混入され、棒状の工具で調整されている。**67**は胎土がキメ細かく壺形土器ではないかと思われる。

底部の観察では**53**～**58**のいわゆる高台であげ底の土器は胎土・焼成とも類似しており、本遺跡の晩期土器でも山の寺式土器に併行すると考えられる。それ以外の土器は刻目突帯文土器の新しい方に考えられるのではないだろうか。壺らしい底部については、口縁と考えられるものは確認出来ていない。



第12図　晩期土器実測図(5)(1/3)

3．縄文時代の石器　（第13～21図）

第４・５層の縄文時代晩期の遺物包合層を中心に、石鏃・スクレイパー・使用痕ある剝片・打製石斧などが出土した。各石器については、出土区・出土層位・規模・重量等を計測し表にしてまとめた。

石　鏃　（第13図　1～11）

11点が出土、全て図化記載した。１～７は基部の抉りがなく、平基もしくは多少張り出すものである。１は若干不均整な感じで、裏面は主要剝離面が大きく残る。２・３・４は全体にやや大まかな二次加工を表裏に施す。４は唯一灰白色の黒曜石製のものである。５・６・７は平面形が二等辺三角形状に近いもので比較的に丁寧な二次加工を施す。８は一見大型の石鏃に見られたが観察の結果、石鏃の未製品である可能性が最も考えられよう。９は深さ５㎜程の抉りをもつもので、平面形はやや肩が張り五角形に近い形状をなす。10は裏面はほとんど主要剝離面の状況である。11は特異な平面形をなす。大形の脚部の長い石鏃の片脚である可能性も考えられる。

スクレイパー　（第13図　12）

12は調整された打面部より剝片剝離された縦長剝片で、一側縁に刃状の二次加工が認められる背面には大きく自然面が残り、断面形は低い三角形状をなす。

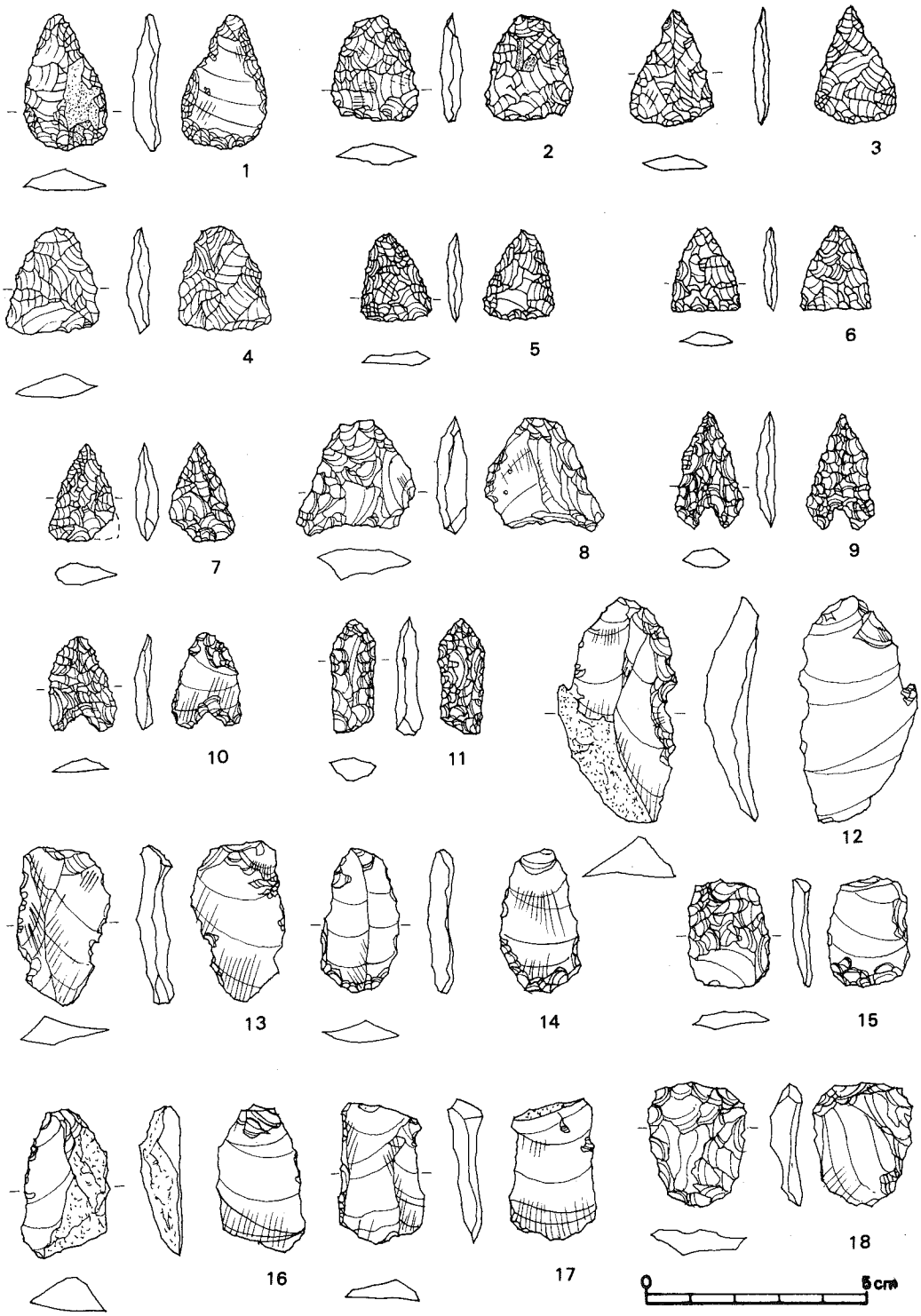
使用痕ある剝片　（第13・14図　13～23）

縦長剝片を基本としているものが多く、その側縁を利用しているものと考えられる。13・16・17・19・20・22は自然面の打面から、14は平坦な打面から、18・21は調整された打面からそれぞれ剝片剝離されたものである。特に、14・17・18・19・21には部分的に著しい使用痕が認められ、使用頻度を示唆していると考えられる。

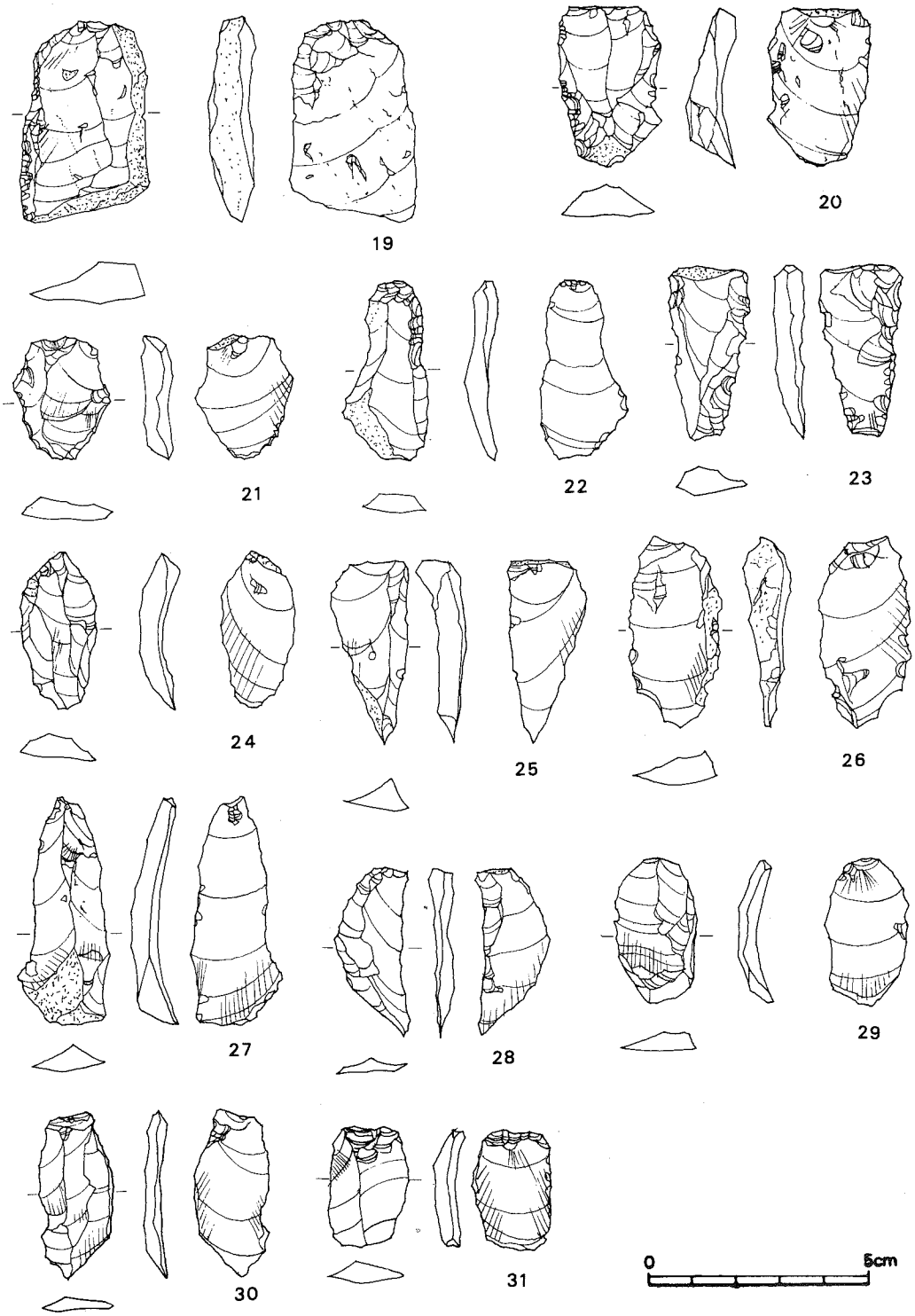
剝　片　（第14図　24～31）

２点を抜粋し図化記載した。４～26は自然面の打面から、27～29は平坦面の打面から、30・31は調整された打面から剝片剝離されたものである。

本遺跡出土の黒曜石における石器および剝片の状況をみてみると、打面部や一部に自然面の残るものが多くみられる。このことは原石の規模から生じてくるもので、全体的に小形の原石を使用した結果からと考えられる。ただし、漆黒の黒曜石のうち乳白色の不純物の混入する方はかなり大きい原石の出土もある。また、記載しなかったが剝片類に対して、石核は貧弱で残核が多く認められる。



第13図　縄文時代の石器実測図(1)(2/3)



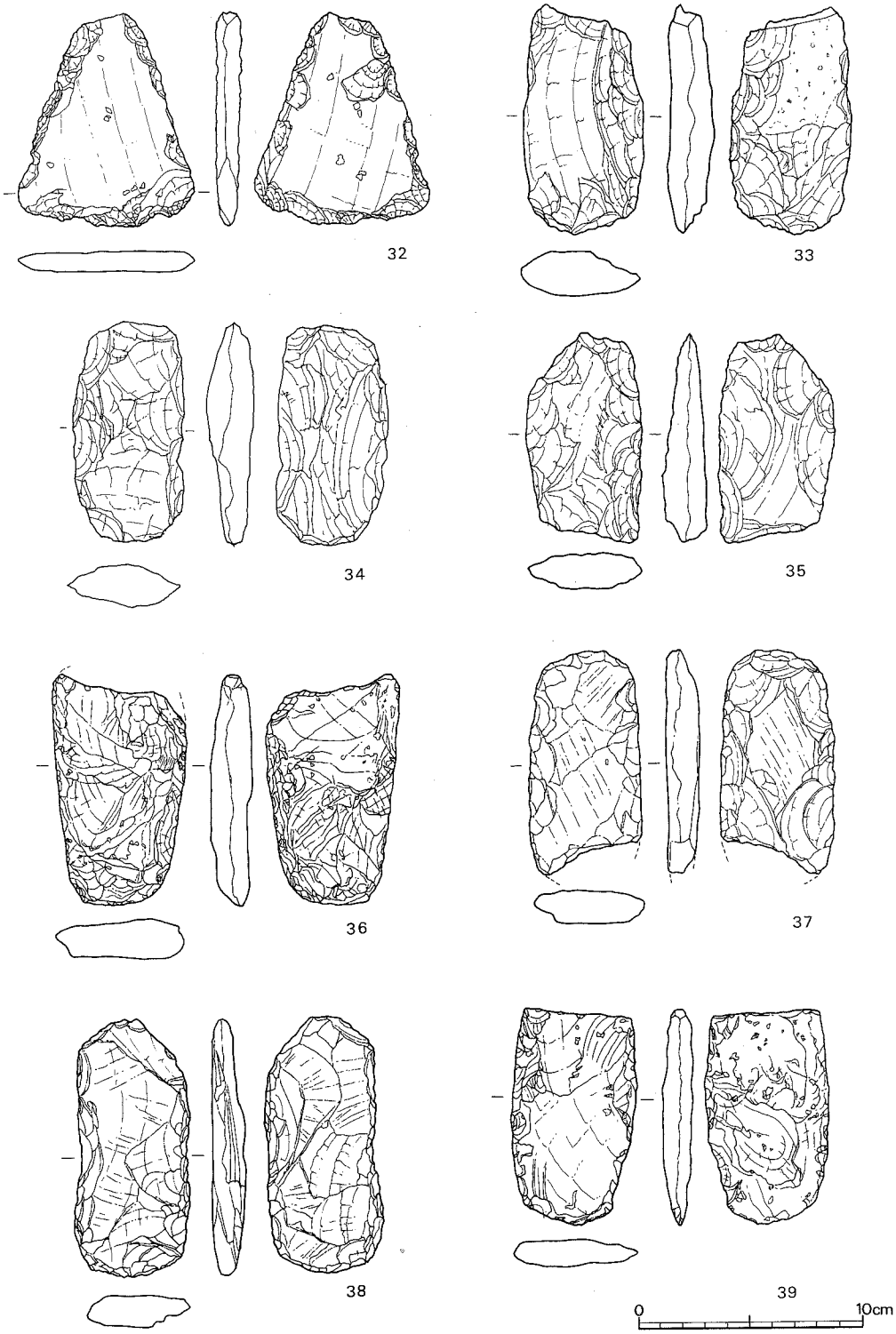
第14図　縄文時代の石器実測図(2)(2/3)

番号	出土区	石　質	器　　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考・その他
1	D－6	漆黒B	石　鏃	3.1	1.9	0.5	2.5	完形・基部は丸く張り出す
2	D－6	漆黒A	〃	(2.3)	2.0	0.6	1.9	先端部欠損・基部は若干張り出す
3	F－4	〃	〃	2.5	1.9	0.3	1.0	完形・基部は若干張り出す
4	D－6	灰　白	〃	2.3	2.0	0.5	1.6	完形・粗雑な二次加工
5	E－3	漆黒B	〃	2.0	1.6	0.3	1.0	完形・比較的丁寧な二次加工
6	D－6	灰　青	〃	1.8	1.6	0.3	0.8	完形・二等辺三角形状
7	D－6	漆黒A	〃	2.2	(1.5)	0.4	1.2	一部欠損・二等辺三角形状
8	F－2	〃	〃	(2.6)	(2.8)	0.8	3.8	先端と片脚を欠損・未製品か
9	E－3	〃	〃	2.6	1.5	0.4	1.3	完形・やや深く抉りが入る
10	F－2	〃	〃	2.2	1.5	0.4	0.9	完形・剝片鏃
11	表　採	〃	〃	(2.6)	(1.0)	(0.6)	1.6	大形の石鏃の脚の可能性もある
12	D－6	〃	スクレイパー	5.1	2.8	1.0	8.9	表面の一側縁に刃部加工
13	D－6	〃	使用痕ある剝片	3.5	2.2	0.7	3.8	自然打面・二側縁に使用痕
14	D－6	〃	〃	3.3	1.7	0.5	2.6	平坦打面・二側縁に使用痕
15	F－4	漆黒B	〃	(2.4)	1.7	0.3	1.8	上は折れか・二側縁に使用痕
16	表　採	漆黒A	〃	3.3	1.8	0.8	4.2	自然打面・一側縁に使用痕
17	F－3	〃	〃	3.2	1.8	0.8	3.1	自然打面・二側縁に使用痕
18	D－6	灰　青	〃	2.7	2.2	0.5	3.8	調整打面・部分的に使用痕
19	E－3	漆黒B	〃	4.5	2.8	0.9	12.7	自然打面・一側縁に使用痕
20	F－4	〃	〃	3.5	2.3	0.8	6.1	自然打面・二側縁に多少の使用痕
21	表　採	漆黒A	〃	2.7	2.1	0.5	3.4	調整打面・部分的に著しい使用痕
22	表　採	〃	〃	4.0	1.8	0.6	3.2	自然打面・一側縁に使用痕
23	表　採	〃	〃	4.0	1.8	0.7	4.4	平坦打面・二側縁に使用痕
24	G－2	〃	剝　　片	3.5	1.7	0.7	3.2	自然打面
25	G－2	漆黒B	〃	4.1	1.8	0.7	3.7	自然打面
26	G－2	〃	〃	4.2	2.0	0.9	5.8	自然打面
27	G－2	〃	〃	5.2	2.1	0.6	5.5	平坦打面
28	G－2	漆黒A	〃	3.6	1.6	0.3	1.9	平坦打面
29	表　採	〃	〃	3.3	1.8	0.4	2.6	平坦打面
30	D－6	漆黒B	〃	3.7	1.7	0.3	2.2	調整打面
31	表　採	〃	〃	(2.7)	1.8	0.5	2.1	調整打面

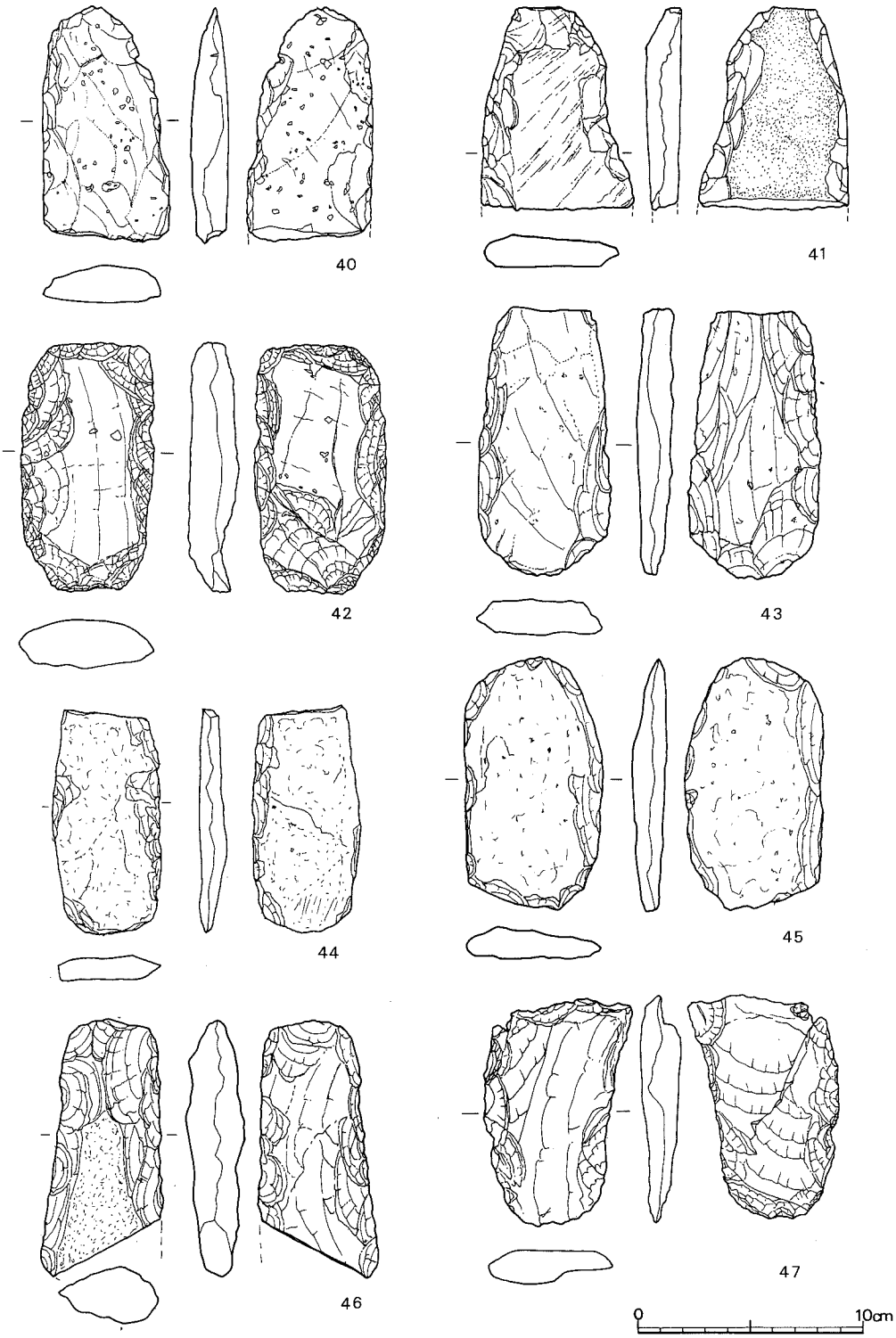
第２表　石器計測表

扁平打製石斧　（第15～21図　32～75）

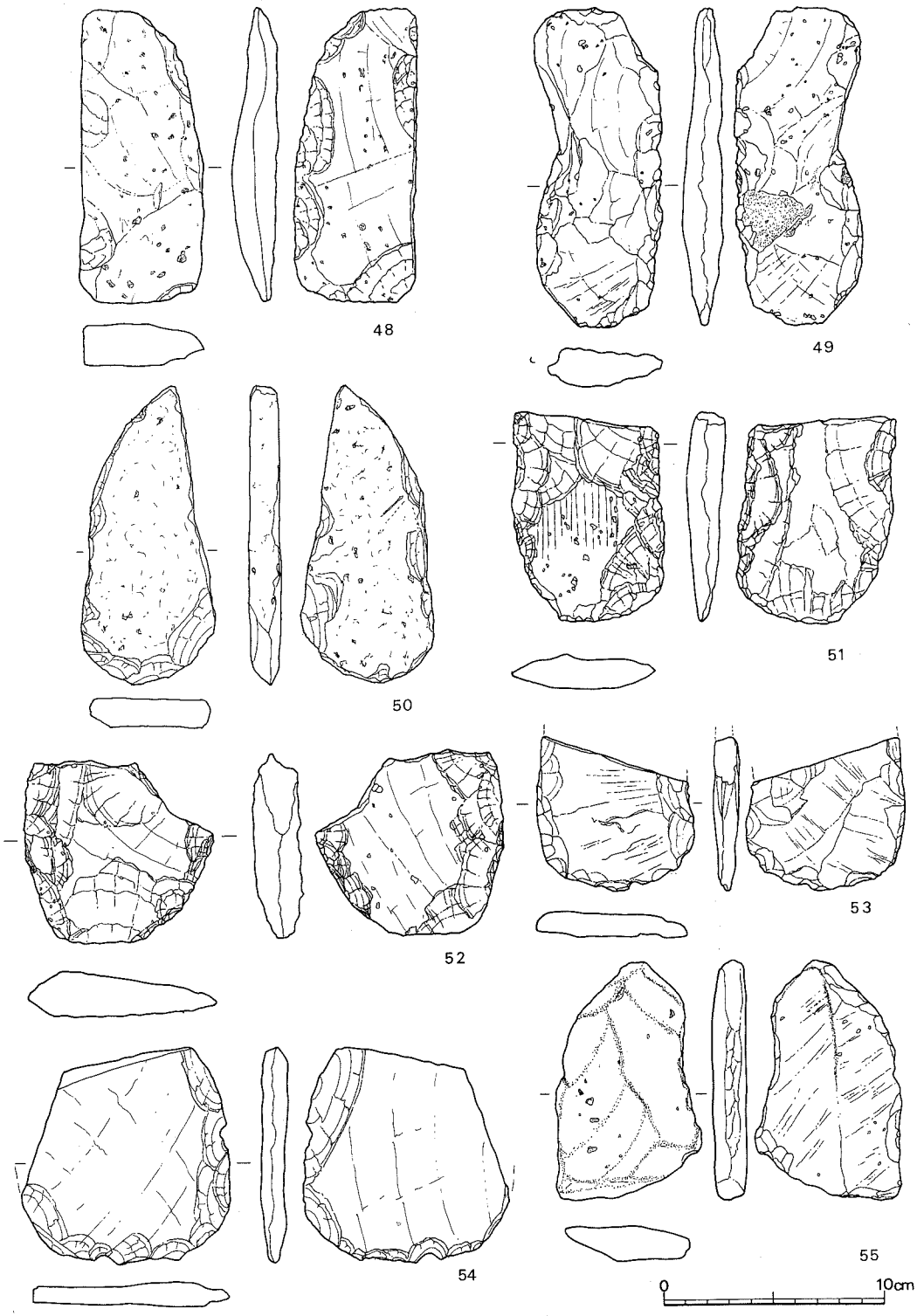
44点を図化記載した。**32**は唯一撥形のもので均整とれた台形状の平面形をなす。二次加工は周縁に多少施した程度で、しかも非常に薄い。**33**～**66**は長方形に近い形状をなしいちおう短冊形としてあつかった。中でも、**33**～**50**までは比較的に小さく長さ・幅・厚さともほぼ近似した規模をもつ。また、同じ短冊形でも**51**～**66**は規模がやや大きくなり、次に挙げる大形長方形のものとの中間程となる。**67**～**73**は大形の長方形を基本形とする、かなり重量のある石斧である小形の短冊形の石斧は手にもって使用する時などには手頃と考えられるが、この大形のものはやや困難を要すると考えられ、何等かの装着を施した可能性が強くここでは強いて短冊形としての言葉の使用はさけた。**74**は刃部に磨製面をもった小形の石斧である。刃部磨製面は丁寧で鋭く形成されている。**75**は全面に著しい風化を受けているが、全磨製状であったと考えられる。



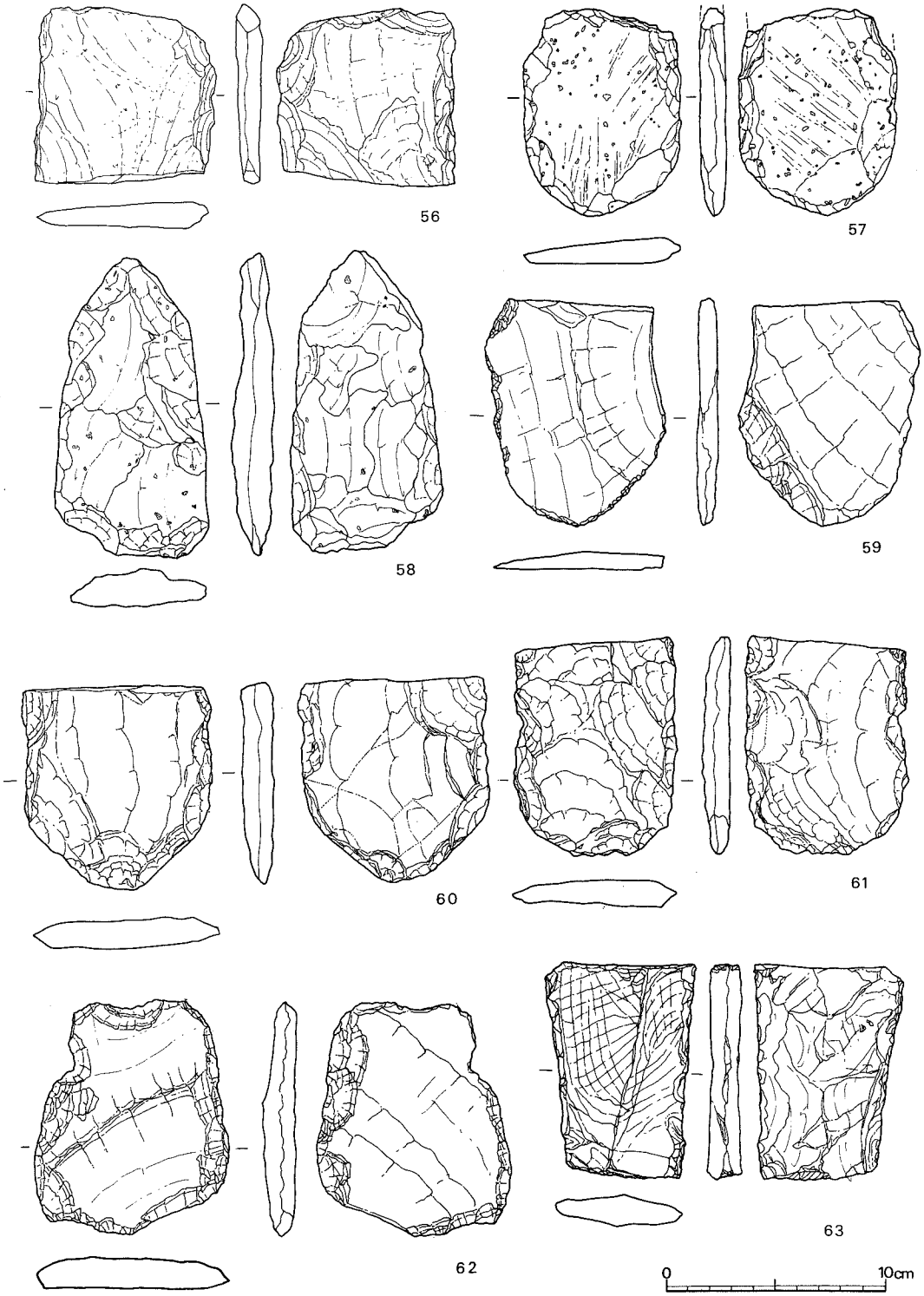
第15図　縄文時代の石器実測図(3)(1/3)



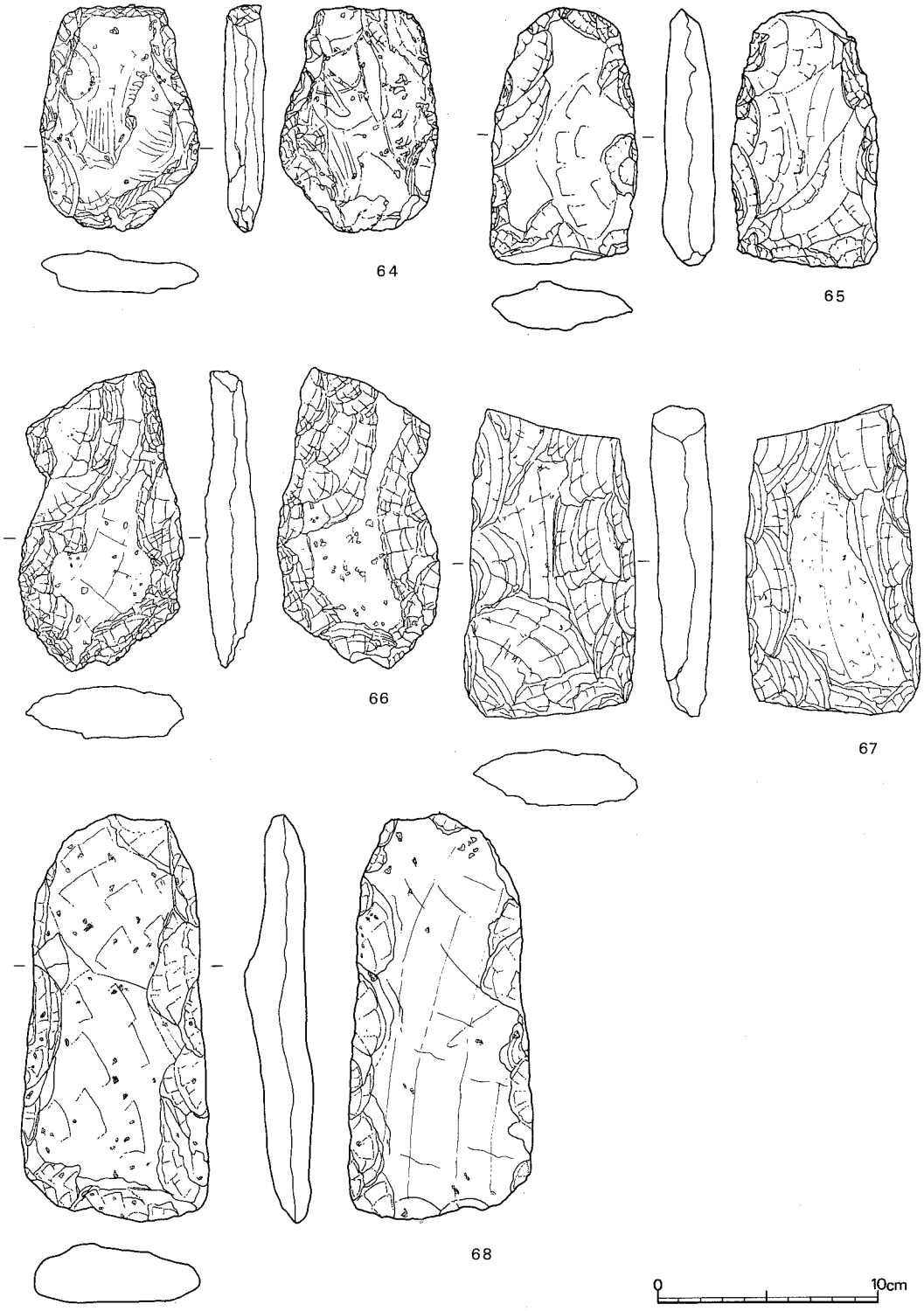
第16図　縄文時代の石器実測図(4)(1/3)



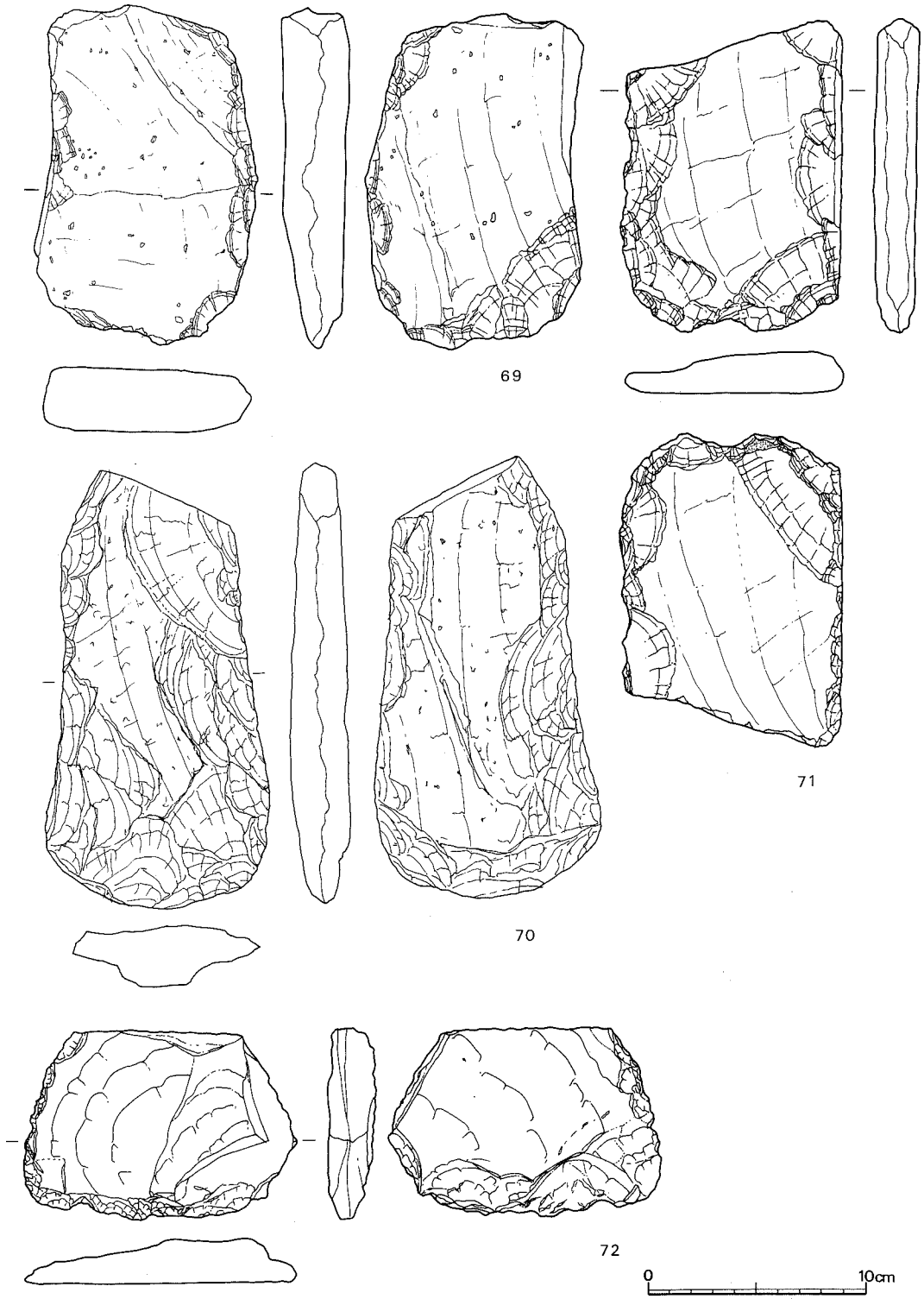
第17図　縄文時代の石器実測図(5)(1/3)



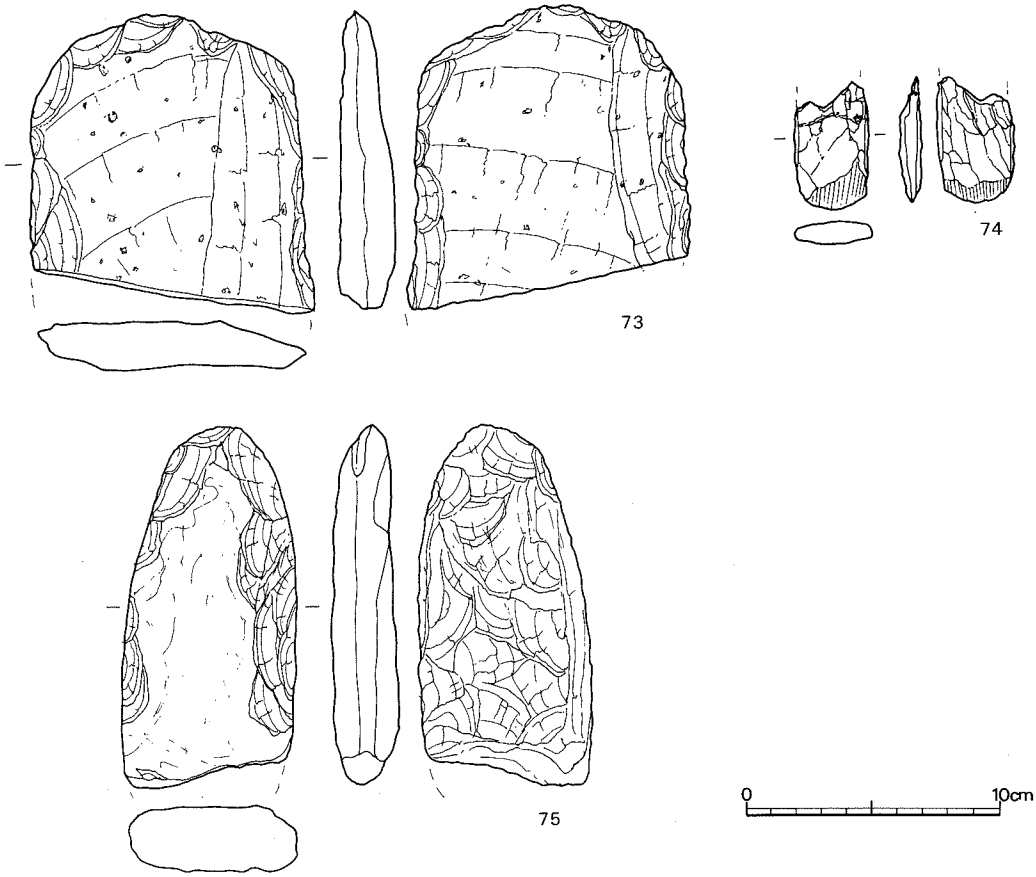
第18図　縄文時代の石器実測図(6)(1/3)



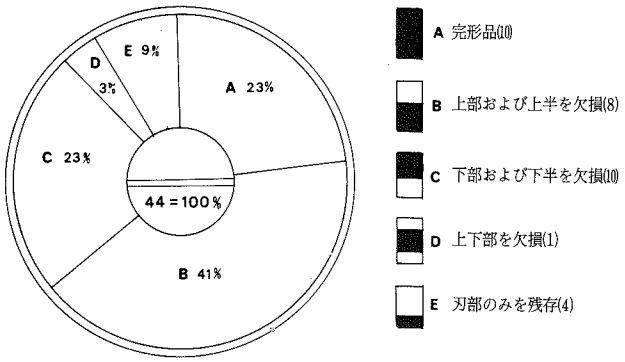
第19図　縄文時代の石器実測図(7)(1/3)



第20図　縄文時代の石器(8)(1/3)



第21図　縄文時代の石器(9)(1/3)



第22図　扁平打製石斧欠損率グラフ

番号	出土区	石　質	形　　態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考・その他
32	表　採	安山岩	撥　　形	9.1	7.5	1.0	94	完形・均整のとれた台形状
33	D－6	〃	短　冊　形	(9.7)	5.3	2.1	(128)	上部欠損
34	F－4	〃	〃	9.6	4.8	1.9	102	完　　形
35	D－6	〃	〃	(8.7)	5.1	1.8	(102)	下部欠損
36	F－3	〃	〃	(9.5)	5.9	1.6	(128)	上部欠損
37	F－3	〃	〃	(9.2)	5.0	1.4	(96)	下部欠損
38	F－3	〃	〃	11.0	5.0	1.8	110	完　　形
39	D－6	〃	〃	(9.3)	5.4	1.2	(75)	上部欠損
40	F－3	〃	〃	(10.2)	5.6	1.3	(114)	下部欠損
41	G－2	〃	〃	(8.8)	6.6	1.5	(120)	下半欠損
42	表　採	〃	〃	(10.8)	5.7	2.1	(190)	上部欠損
43	F－3	〃	〃	(11.6)	5.8	1.5	(142)	上部欠損
44	E－2	〃	〃	(9.7)	4.8	1.3	(77)	上部欠損
45	D－6	〃	〃	10.9	6.0	1.2	108	完　　形
46	D－6	〃	〃	(10.8)	4.8	2.3	(146)	下部を斜めに欠損
47	表　採	〃	〃	(9.9)	5.6	1.6	(98)	上部欠損
48	D－6	〃	〃	13.2	5.4	1.9	172	完　　形
49	D－6	〃	〃	14.2	5.6	1.7	150	完形・かなり粗雑な感じ
50	G－2	〃	〃	13.3	6.0	1.3	(162)	上部欠損
51	G－2	〃	〃	(9.5)	6.6	2.0	(164)	上半欠損
52	表　採	〃	〃	(8.0)	8.5	2.0	(159)	下部のみ残存
53	F－3	〃	〃	(5.7)	7.0	1.0	(66)	下部のみ残存
54	表　採	〃	〃	(9.5)	9.3	1.3	(150)	下部のみ残存
55	F－3	〃	〃	(10.4)	6.5	1.7	(124)	下半欠損・石材のそのままに近い
56	G－2	〃	〃	(8.0)	8.1	1.1	(102)	下半欠損
57	D－6	〃	〃	(9.1)	7.0	1.3	(117)	上半欠損
58	D－6	〃	〃	13.4	6.7	2.0	194	完　　形
59	表　採	〃	〃	(10.0)	7.8	1.0	(92)	上半欠損・周縁にわずかな加工
60	壺　棺	〃	〃	(8.9)	8.4	1.5	(175)	上半欠損
61	表　採	〃	〃	(9.7)	7.2	1.3	(124)	上半欠損
62	表　採	〃	〃	10.3	8.7	1.3	176	完形・四角状になる
63	D－6	〃	〃	(9.5)	6.6	1.7	(123)	上下部欠損
64	D－6	〃	〃	(10.1)	6.9	1.8	(174)	上部欠損
65	D－6	〃	〃	(11.5)	6.6	2.4	(214)	下部欠損
66	表　採	〃	〃	(11.8)	7.0	1.9	(246)	上部欠損
67	G－2	〃	大形長方形	(13.9)	7.7	2.8	(404)	上部欠損
68	不　明	〃	〃	18.1	8.4	2.7	460	完　　形
69	F－2	〃	〃	(14.8)	9.4	3.0	(700)	上部欠損
70	G－2	〃	〃	19.7	10.1	2.5	670	完　　形
71	表　採	〃	〃	(13.5)	10.0	1.9	(443)	下部のみ残存
72	表　採	〃	〃	(8.5)	12.0	2.4	(300)	下部欠損
73	表　採	〃	〃	(10.7)	11.2	2.1	(330)	下半欠損
74	表　採	蛇紋岩	小形磨製	(4.9)	2.9	0.7	(18)	上半欠損
75	D－6	〃	磨　　製	(13.5)	6.7	2.8	(422)	下部欠損・風化が著しい

第3表　扁平打製石斧計測表

4．弥生時代の遺構

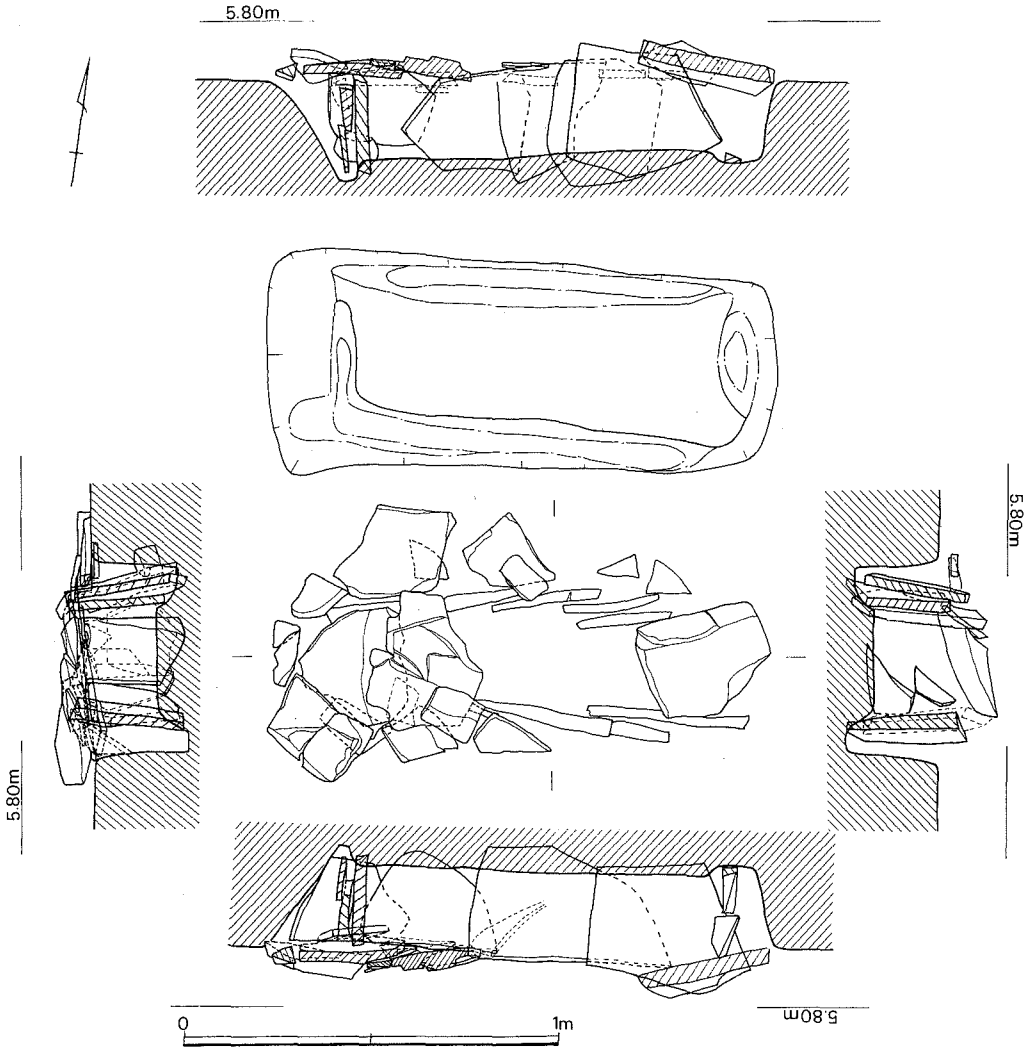
弥生時代の遺構は遺跡全体に広がる埋葬遺構とF－2、3、4、E－3区に広がる住居跡3棟が検出された。墓地と住居跡の関係は墓地の方が時期的に古く遡る。住居跡についても広い範囲で調査すれば類例は増加していたと思われ、また墓地との関係も鮮明になったと考えられる。

第23図　埋葬遺構位置図(1/3000)

(1) 埋葬遺構

白井川遺跡では、標高４ｍから12ｍに位置する広い範囲に箱式石棺墓、石蓋土壙墓、甕棺墓の計22基が検出された。この基数は工事における表土剝ぎで発見されたものと、発掘作業によって検出されたもので、遺跡の範囲内にはまだ相当数の埋葬遺構があると考えられる。地元の人の話では以前に小規模な土地改良を行った際にも棺材と考えられる板石がかなり出土したという。

1989年度圃場整備事業分として報告したのは10基である。今回は12基の遺構について報告するものであるが、先にした１・２・４・５号分については再度収録し総括する。なお番号は遺構の通し番号であり種類別ではない。



第24図　第１号石棺墓実測図(1/20)

第１号・石棺墓　（第24図）

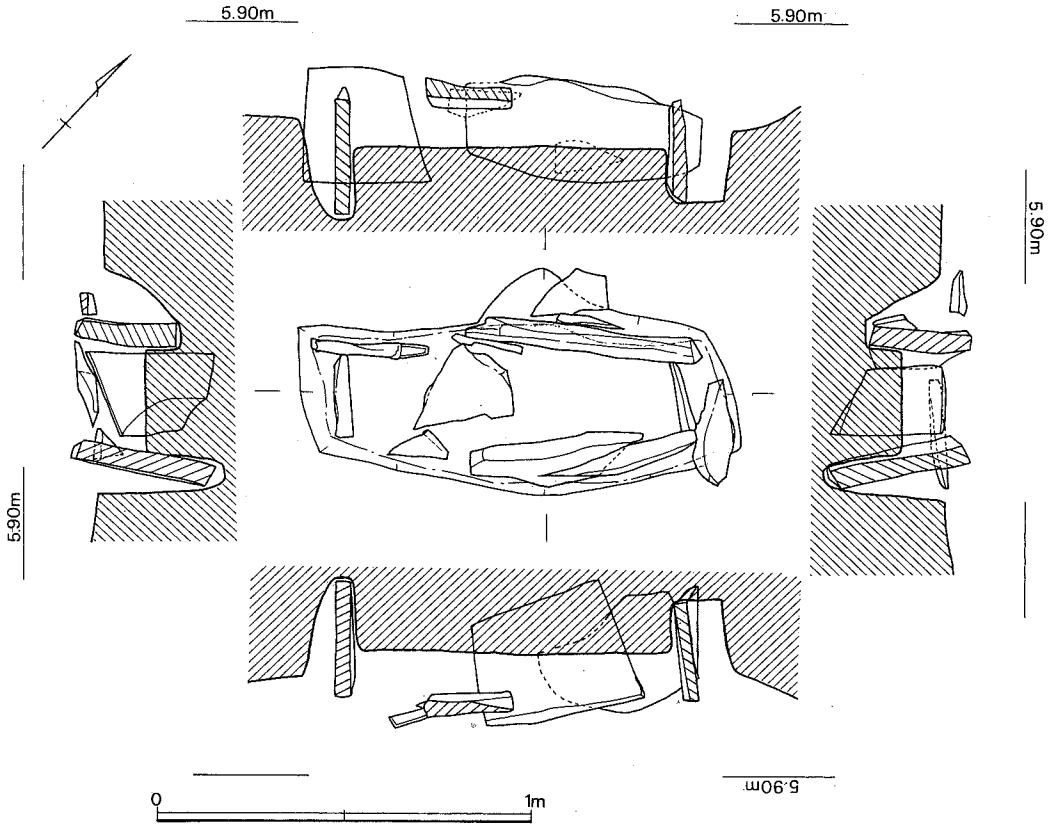
表面観察で最初に発見された、一番大きな遺構である。蓋石は⅓程残存し、その他は工事によって失われている。側板は５枚の板石を重ねながら立て、北側を広く、南側を狭くした長方形の末広がりである。小口側板は北側が残り、南側は抜かれ床石は敷かれていない。副葬品はガラス玉１個、碧玉製管玉１個。

第２号・石棺墓　（第25図）

１号石棺墓のすぐ北側に位置する。蓋石は殆ど失われている。側板は両側とも一枚抜かれ、小口板は残るが、片方が狭くなっている。床石、副葬品は認められていない。

第４号・石棺墓　（第26図）

検出石棺墓の中では一番西側に位置しほぼ完形で残る。蓋石はよろい蓋状に、北から南へ重ねられている。蓋石を取ると側板は２枚組、小口板は１枚で組み合わされている。掘り込みの残りもよいが、側板の間には東側に２個、北側に１個の拳大の裏込め石が置かれている。床石は認められないが、副葬品は碧玉製管玉２個。



第25図　第２号石棺墓実測図(1/20)

第５号・石棺墓　（第27図）

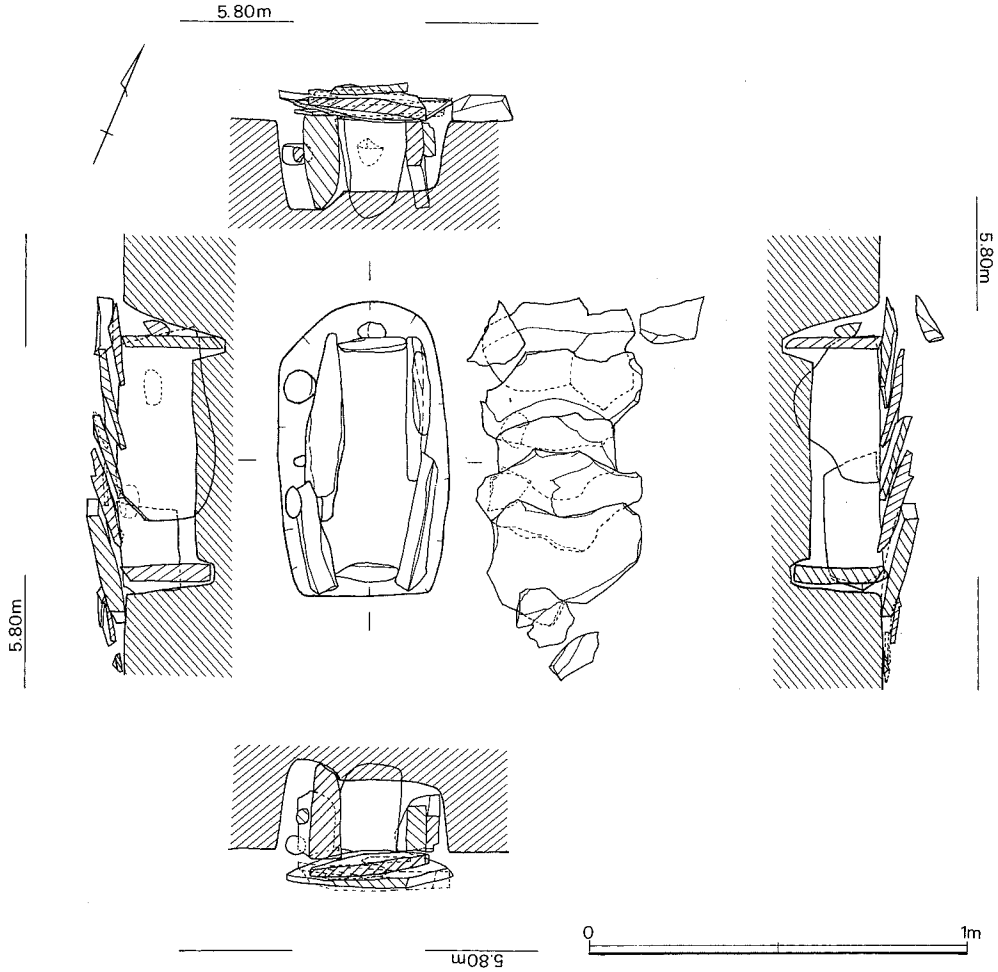
４号石棺に隣接する。蓋石は大きなものが４枚残り、側板は両側とも半分の２枚だけ残る。形状は末広がりで、狭い方の小口板が１枚立てられ、角に拳大の礫が一個支えに置かれている。床石なく副葬品も見られない。

第９号・石棺墓　（第28図）

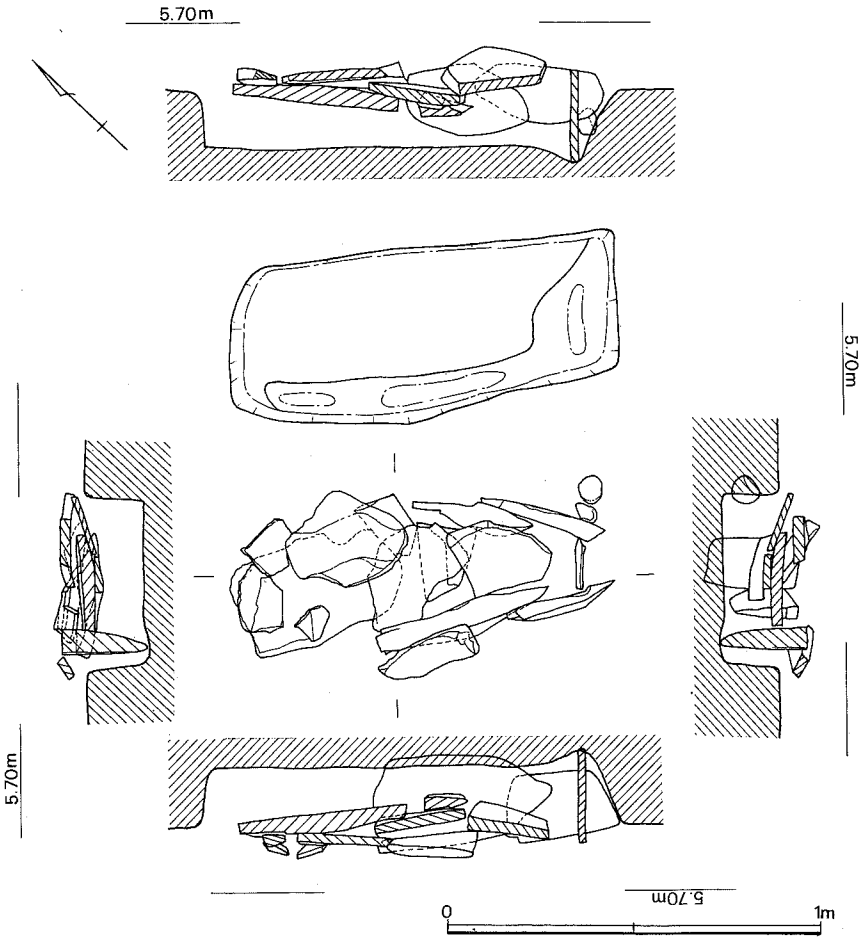
蓋石と約半分の側板は失われている。この棺の周囲は礫がゴロゴロしており河川の氾濫の影響を受けている。側板と小口板の対比は正方形に近いと思われる。副葬品は認められない。

第10号・石棺墓　（第29図）

蓋石が失われた小さな石棺である。小口板を外側に側板をその中に組み込み、掘り方もしっ



第26図　第４号石棺墓実測図(1/20)



第27図　第５号石棺墓実測図(1/20)

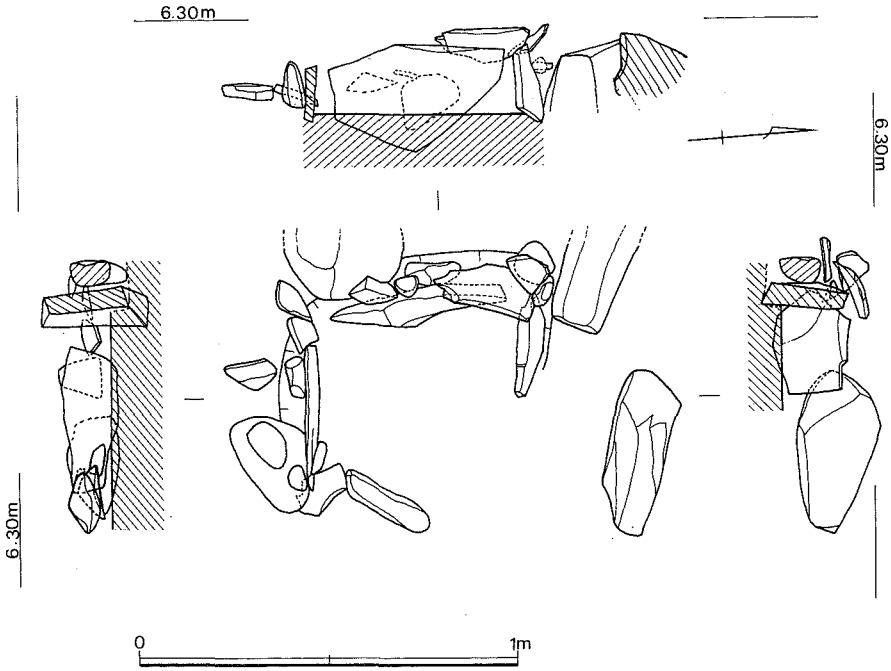
かりしている。床石、副葬品は認められない。

第11号・石棺墓　(第30図)

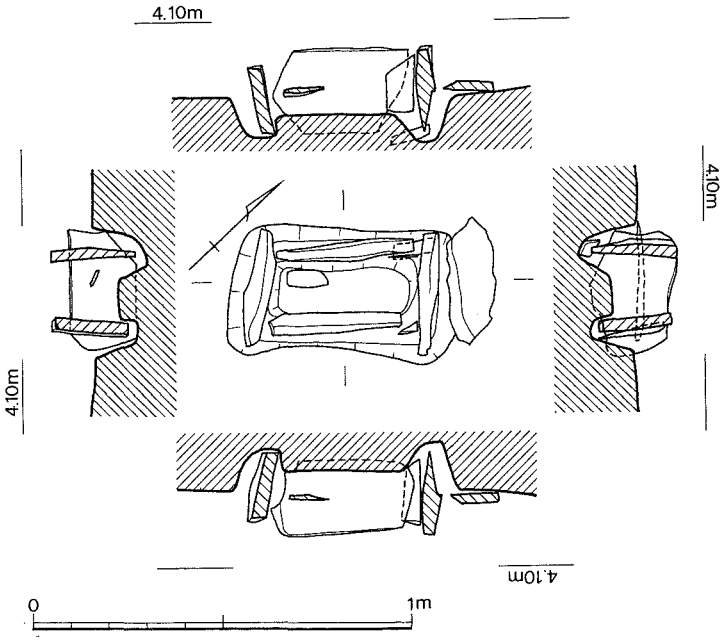
壺棺墓のすぐ北側に位置する。蓋石は１枚だけ残る。側板は残るものの、片面は内側に倒れている。小口板は片方が狭くなり、広い方は抜かれている。側板の掘り方はしっかりしている。床石、副葬品は認められない。

第12号・石棺墓　(第31図)

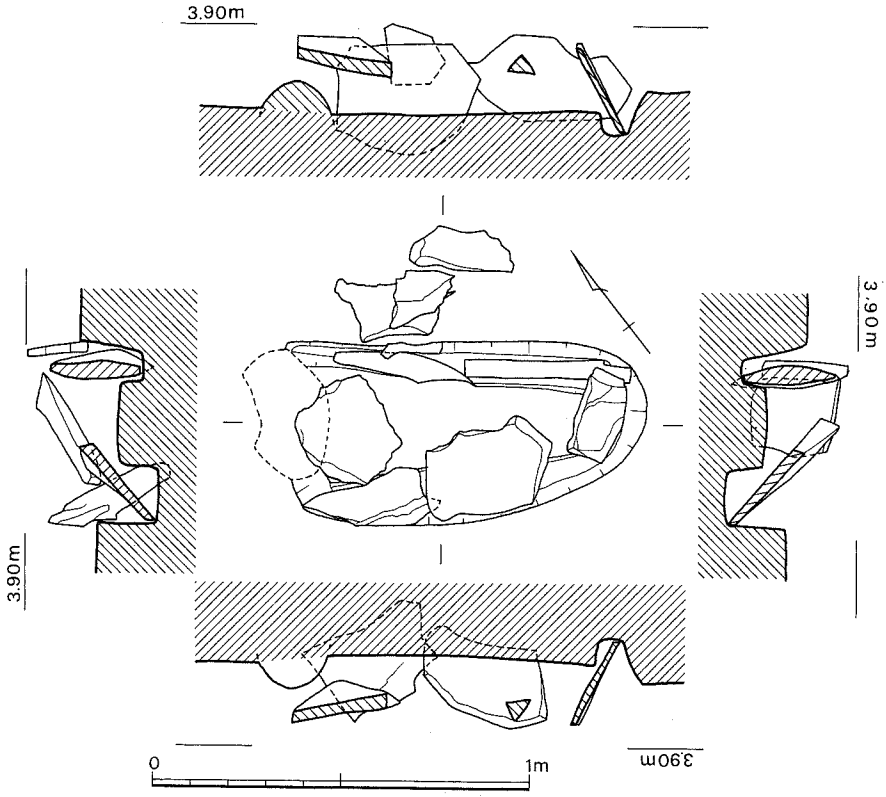
蓋石と側板が抜かれ、南側の側板と東側の小口板が残るだけである。床石らしきものが１枚残る。副葬品はガラス小玉が40個認められた。



第28図　第９号石棺墓実測図(1/20)



第29図　第10号石棺墓(1/20)



第30図　第11号石棺墓実測図(1/20)

第13号・石蓋土壙墓　(第32図)

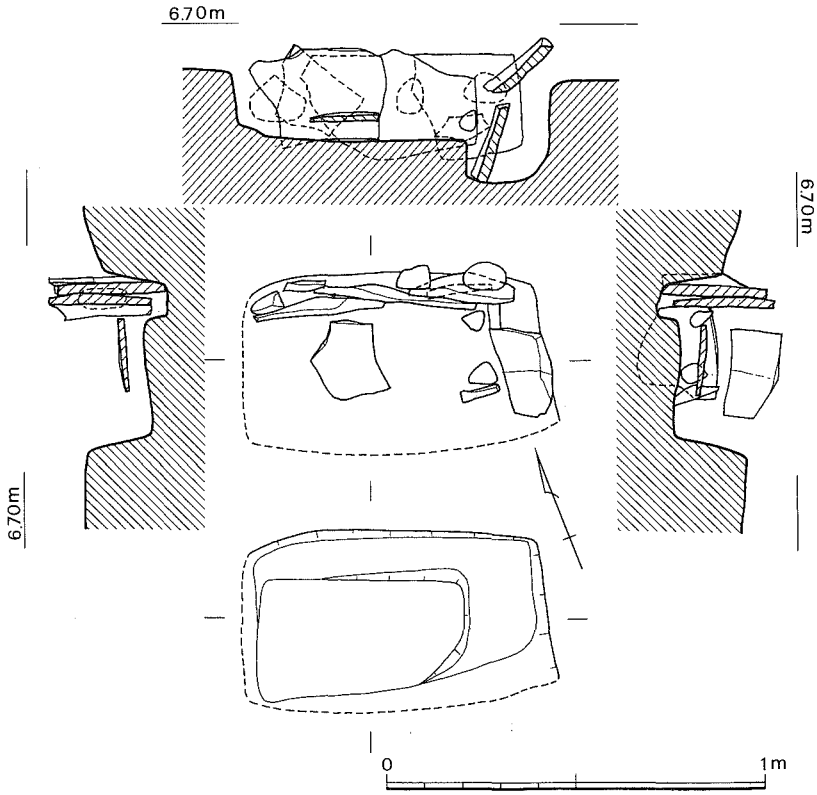
20cm×30cmあまりの板石を4枚、よろい蓋式に乗せた、石蓋土壙墓である。土壙の上場は蓋石よりもひと回り大きいが土壙の深さは約15cmと浅い。副葬品は認められない。

第14号・石棺墓　(第33図)

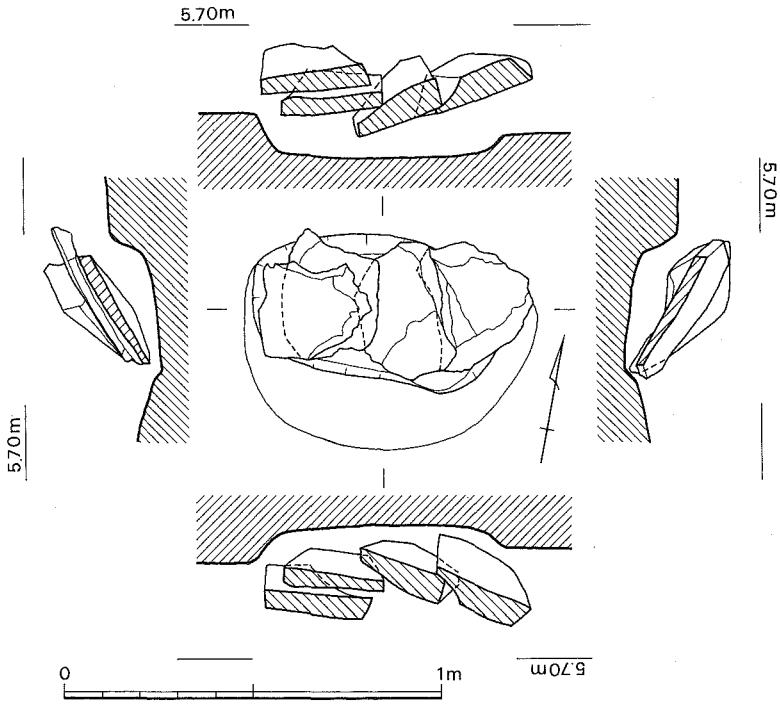
一番北側に位置する比較的大形の石棺である。蓋石はわずかに1枚残り他は失われている。両側板は2枚組で残りが良く、西に傾斜している。また西側の小口板は無く拳大の礫が5個置かれている。片方の小口板は側板の内側に組まれ、小さな石でクサビ状に補充している。床は板石が1枚敷かれている。副葬品は碧玉製管玉1個出土。

第15号・石蓋土壙墓　(第34図)

大小5枚の蓋石をもつ小形の土壙墓である。深さ15cmと浅く、副葬品も認めない。



第31図　第12号石棺墓実測図(1/20)



第32図　第13号石棺墓実測図(1/20)

第16号・石蓋土壙墓　（第35図）

5枚の蓋石がよろい蓋状に整然と並べられる。土壙の深さは約20cm、副葬品は認められない。

第17号・石蓋土壙墓　（第36図）

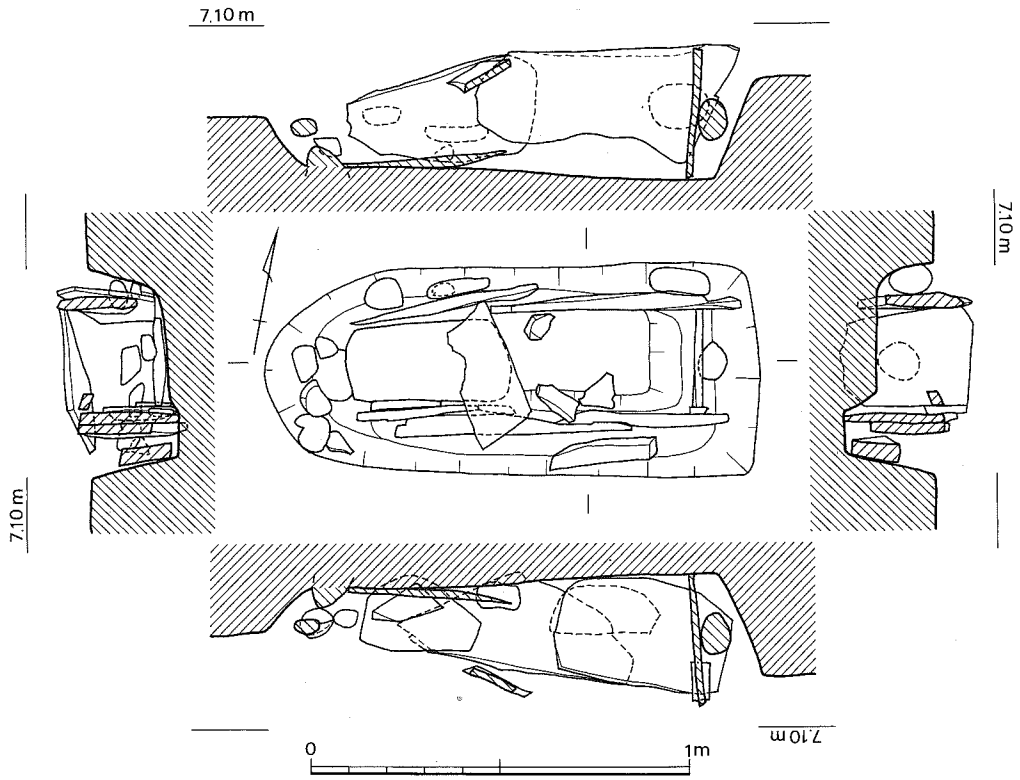
3枚の石蓋が乗り、その下には直径約15cm、深さ12cm余りのピットがメガネ状に独立した形で2個並ぶ。柱穴状になっている点が他の遺構と違う。副葬品は認められない。

第18号・石蓋土壙墓　（第37図）

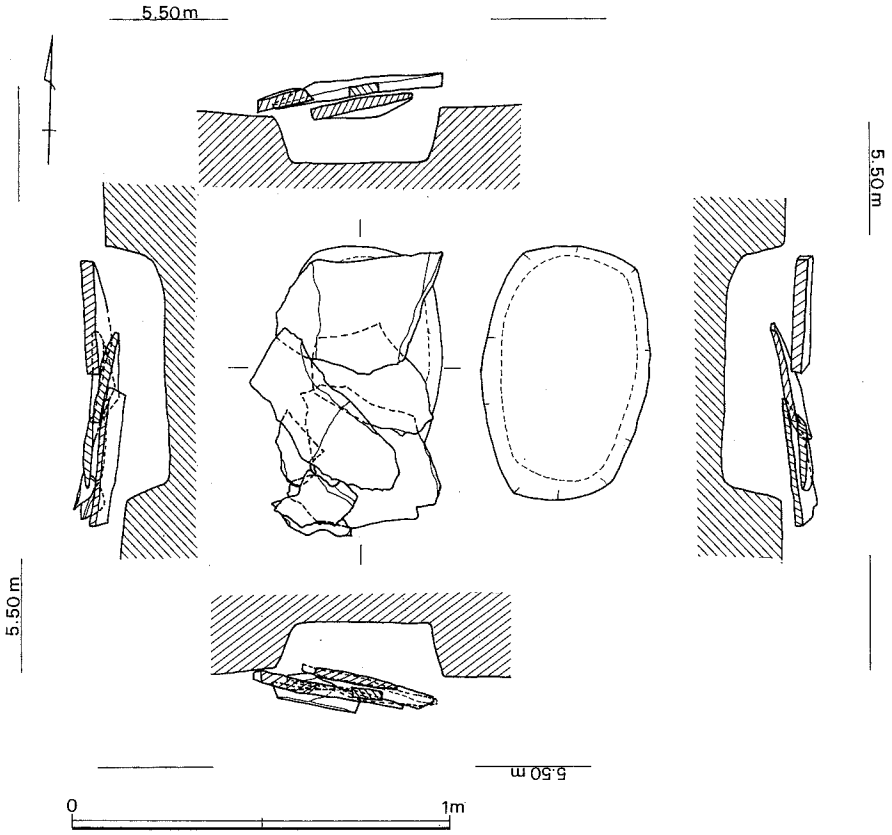
5枚の蓋石が重なり合って土壙に乗る。蓋石よりも土壙の広さがわずかに大きい。深さは約20cmで副葬品は認められない。

第19号・石棺墓　（第38図）

蓋石が抜かれたほぼ長方形を呈する箱式石棺墓である。側板は3枚組である。小口板は側板の内側にはめ込まれている。床石は無いが碧玉製管玉1個が出土している。



第33図　第14号石棺墓実測図(1/20)

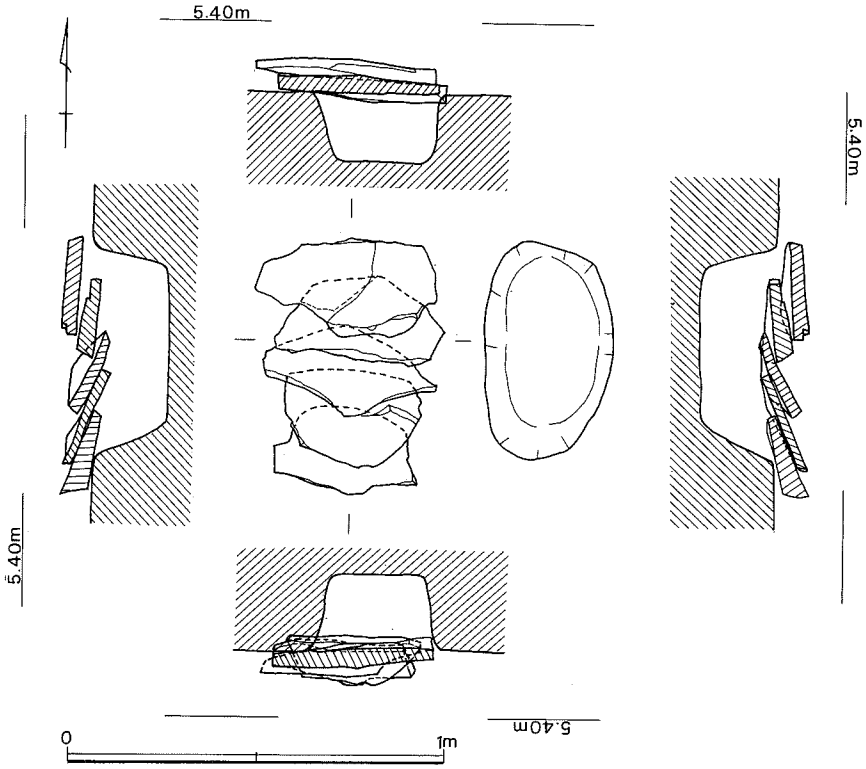


第34図　第15号石棺墓実測図(1/20)

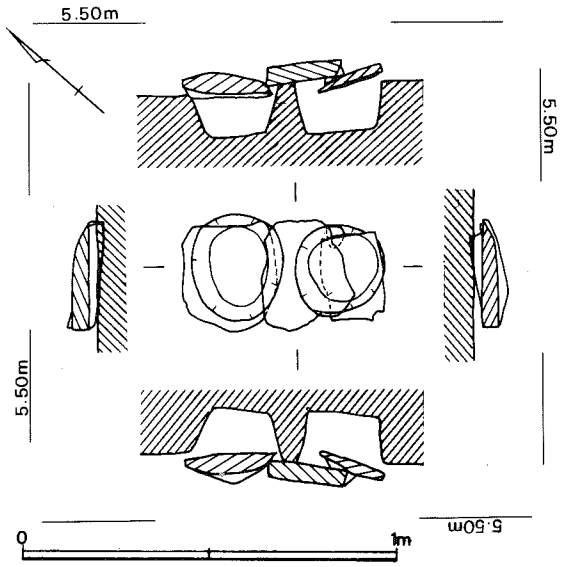
第22号・甕棺墓　(第39・40図)

11号石棺の南側に位置し、甕棺はこの1基だけである。出土状況は斜めに埋置され、穿孔部を下にしてある。工事により口縁部を一部欠失するが完全に復原される。口縁部は壺状によくしまり頸部に1条の断面三角形の貼り付け突帯を有する。器表の全体にほぼ縦にハケ目調整痕が残る。胴部のほぼ中央には断面台形状の貼り付け突帯が1条めぐる。底部真上には孔が穿たれている。法量は高さ62.6cm、胴回り50cm、口径30.6cmを測る。なお副葬品は認めない。時期的には後期初頭に比定できよう。

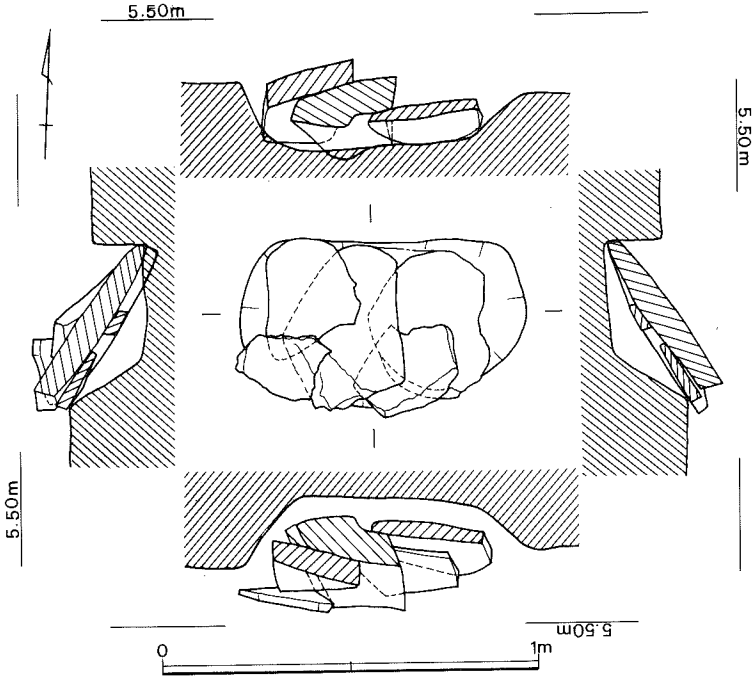
今回検出の埋葬遺構は標高3mから6mにかけて広範囲にわたり点在しているのが特徴的である。内容は箱式石棺墓16基、石蓋土壙墓5基、甕棺墓1基である。一番北側に位置する第14号箱式石棺墓と一番南側に位置する第20号箱式石棺墓の距離は約250mに達する。E－4・F－4区に集中しているのは深く掘り下げた結果である。住居跡で全く検出されなかったのは埋葬遺構が時期的に古い結果であり、住居跡築造時に破壊された可能性も強い。



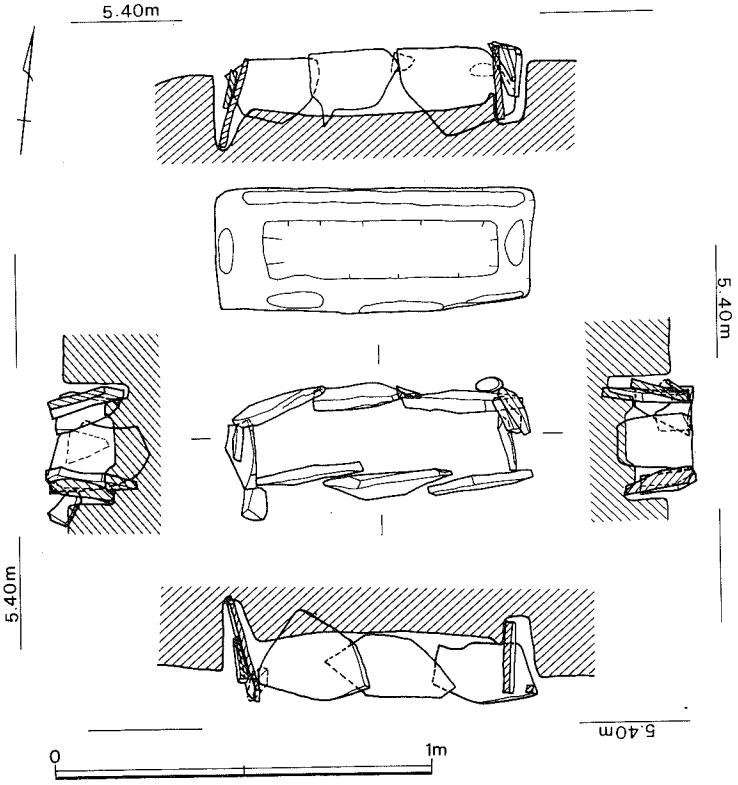
第35図　第16号石棺墓実測図(1/20)



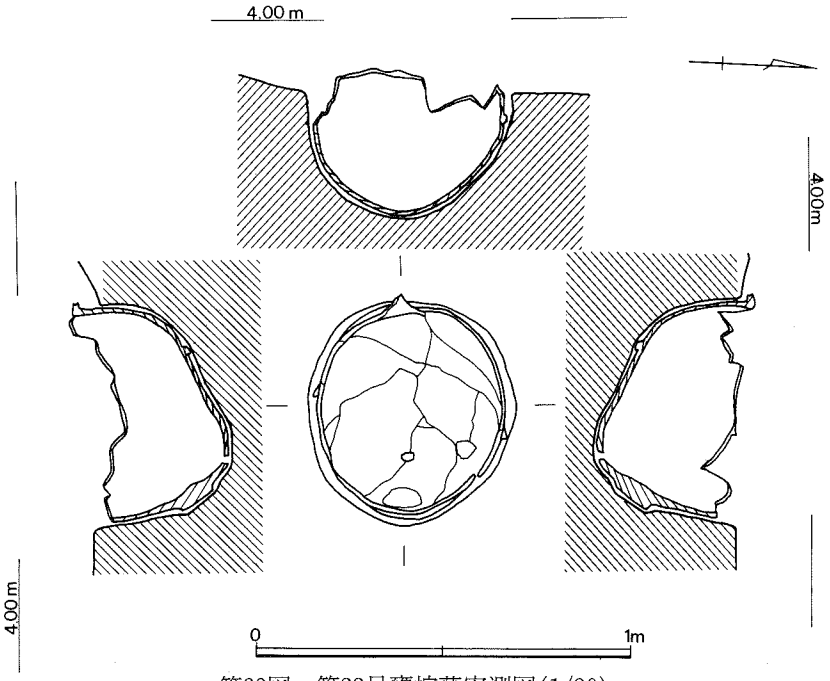
第36図　第17号石棺墓実測図(1/20)



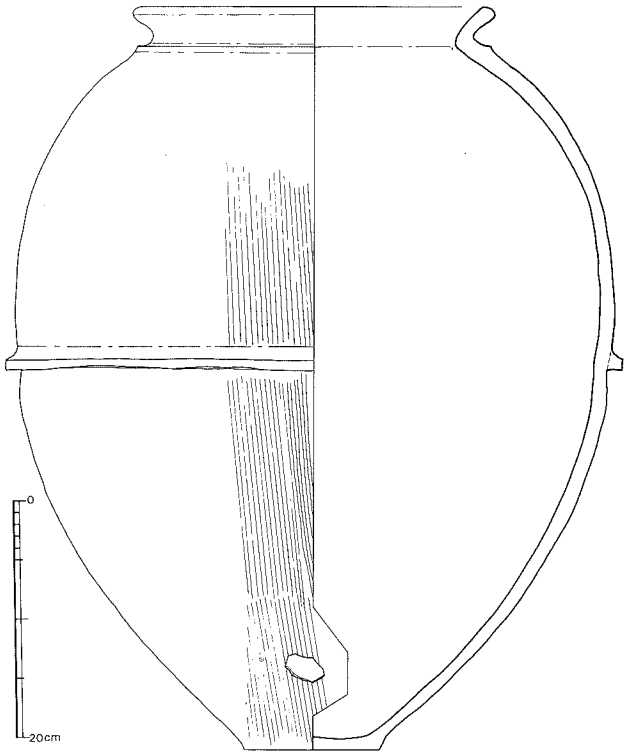
第37図　第18号石棺墓実測図(1/20)



第38図　第19号石棺墓実測図(1/20)



第39図　第22号甕棺墓実測図(1/20)



第40図　甕棺実測図(1/6)

白井川遺跡埋葬遺構一覧

遺構No.	種　別	主軸方位	法　量（m） 長さ×幅×深さ	副　葬　品	土壙上場標高(m)	備　考
1	箱式石棺墓	N84°E	1.35×0.6×0.18	ガラス玉、管玉1	5.641	前回報告
2	〃	N46°E	1.17×0.6×0.13		5.731	〃
3	〃	N38°W	0.82×0.43×0.12		5.720	〃
4	〃	N23°W	0.77×0.45×0.19	管玉2	5.542	〃
5	〃	N43°W	1.03×0.47×0.15		5.512	〃
6	〃	N69°W	0.67×0.44×0.12		5.400	〃
7	〃	N49°E	?			下部構造検出されず、〃
8	石蓋土壙墓	N42°W	0.76×0.59×0.25		5.450	前回報告
9	箱式石棺墓	N4°E	?×?×0.05		6.050	
10	〃	N46°E	0.62×0.35×0.05		3.910	
11	〃	N53°W	0.96×0.49×0.05		3.830	
12	〃	N67°W	0.84×0.48×0.17	ガラス玉40	6.550	
13	石蓋土壙墓	N80°E	0.67×0.38×0.11		5.480	
14	箱式石棺墓	N80°E	1.32×0.57×0.15	管玉1	6.940	
15	石蓋土壙墓	N2°W	0.68×0.44×0.15		5.280	
16	箱式石棺墓	N0°S	0.57×0.34×0.20		5.280	
17	石蓋土壙墓	N41°W	0.28×0.25×0.14		5.410	
18	〃	N86°E	0.76×0.44×0.19		5.390	
19	箱式石棺墓	N82°E	0.84×0.33×0.13	管玉1	5.390	
20	〃	N65°E	0.62×0.55×0.17		4.590	前回報告
21	〃	N87°E	0.58×0.35×0.10		4.490	〃
22	甕　棺　墓					

時期を決定するものは副葬品以外に何もないが、少なくとも一番土器の多い後期終わり頃までと、上限は中期頃が考えられる。遺構の規模からすると、あまり新しくはならないと思われる。遺構の集中する箇所で特徴的なことは小形の石蓋土壙墓があることや、長軸が1m未満の遺構が15基に達していることである。この傾向は弥生中期を主体にした大村市富の原遺跡においても見ることが出来る。

大村湾沿岸に所在する石棺群について

埋葬遺構を概観したが、各遺構について形態や法量の面からも大変バラツキがあり本遺跡だけの特徴的な傾向か否かの問題は、他の遺跡と比較しなければ不明な点が多い。

石棺墓の出現は縄文晩期からである。支石墓の普及とともに、その下部構造に見られる。北有馬町所在の原山支石墓群[註1]はその代表であり、開拓作業によりかなり壊されたとはいえ現在でも3群60基余りが残っている。また諫早市の風観岳支石墓群[註2]も20基余りが確認されている。これらいわば縄文晩期に位置ずけられる支石墓の下部構造である石棺は、棺身長と棺身幅の比率が少ないものが多く、正方形に近くなる程、時代が遡る現象が捉えられている。このような現象は弥生時代前期の遺跡においても見られ、佐世保市宮の本遺跡[註3]や宇久町松原遺跡[註4]でもその傾向が確認されている。

中期以降になると前期の遺跡に比較して遺跡数が増える。ここでは主に大村湾沿岸を中心に概観してみよう。

大村湾の一番南の奥まった多良見町に化屋大島遺跡[註5]があり昭和48年の調査で7基の石棺が確認され、前期末から中期初頭と考えられている。副葬品は鉢、および壺形土器を伴うものがある。棺身長は105cmから120cmまで、棺幅は34cmから45cmの間になっている。

湾の東奥部からさらに東の内陸部には昭和43年調査された、弥生終末から古墳時代前期にかけての本明石棺群および林ノ辻石棺墓[註6]が位置する。この石棺群は2m前後の規模のものが検出されている。

大村市の西方、標高6mから8mの微高地に位置する富の原遺跡[註7]からは昭和55年から60年にかけてのA・B両地点の調査で、中期前半から後期初頭にかけての甕棺墓30基、石棺57基が検出され、成人用甕棺墓からは3本の鉄戈が出土している。また墓域に祭祀用遺構も確認されている。この遺跡は白井川遺跡と同様微高地に営まれている点では共通性がある。

この他にも大村市では古墳時代に属する小佐古石棺群[註8]や、久津石棺群[註9]が所在し、共に150cm以上の棺身長が見られる。

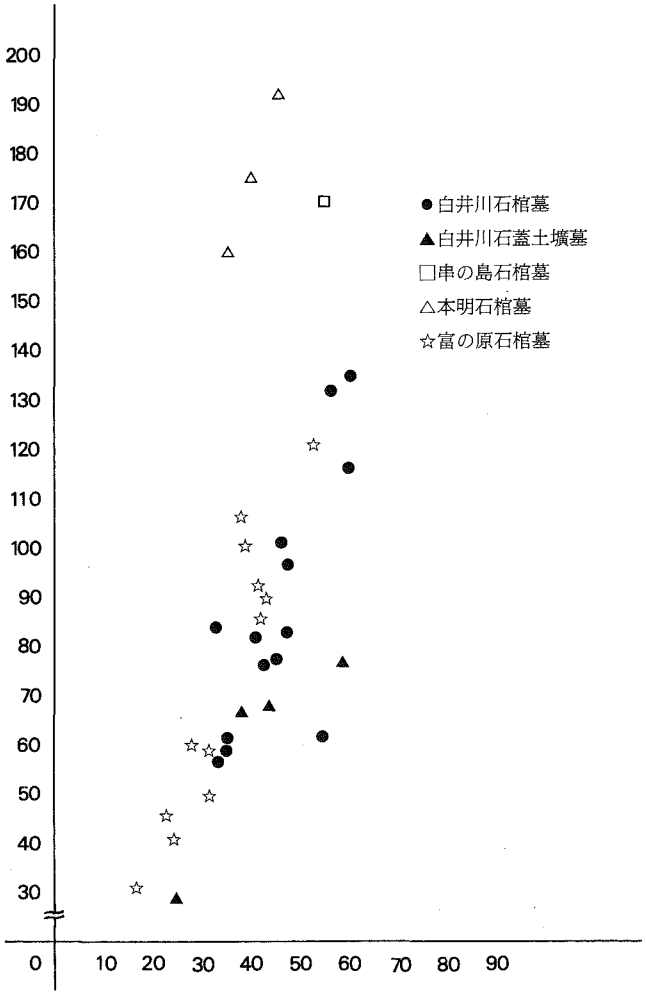
本町の北側に位置する川棚町五反田遺跡[註10]は標高10mにあり、昭和47年堤防欠壊による川棚川河川改修に先立って調査され、6基の石棺墓が検出されている。棺身長は150cmから180cmであり、古墳時代の所産とも考えられている。

さて本遺跡の所在する周辺における埋葬跡の所在についてであるが、地元の古老の話によると、現在国道251号線が走る彼杵中学校の前の海岸線近くの畑では、戦前砂利採集が盛んに行われたという。その際、板石で囲った墓から人骨などが出土したのを記憶しているということで、数基あったらしい。時期は不明だがおそらく礫丘に営まれていた弥生時代の石棺墓群であったと推察される。また里郷串の島の串島からも石棺墓と人骨の出土が記録されている人骨は弥生人骨ではないかと推定されている。近接する才貫田からも石棺出土の話があるが時期は確認さ

れていない。

大村湾沿岸の石棺および甕棺の出土地は、この他にもかなり確認されている。それによると遺跡の数では古墳時代に属する方が多いようである。棺の法量も棺身長が150cm以上と長大化が目につく。また立地で見る限りにおいても標高の高い地点に立地する傾向が見られる。

本遺跡の場合は標高が4mから7mの地点であり、富の原遺跡と同様の立地を示す。石棺の計測値を見ると富の原遺跡の場合棺身長が40cmから100cm内外が殆どを占め、棺幅は30～40cm内外である。白井川遺跡の場合は棺身長が130cm強の2例を除いて殆ど同様値を示す。富の原遺跡では棺身長が50cm未満で小児石棺と考えられる一群も多くを占める。白井川では幼児石棺墓は1例だけであるが、富の原遺跡で報告されていない石蓋土壙は小形のものが5基確認されている。



第41図　石棺計測分布図

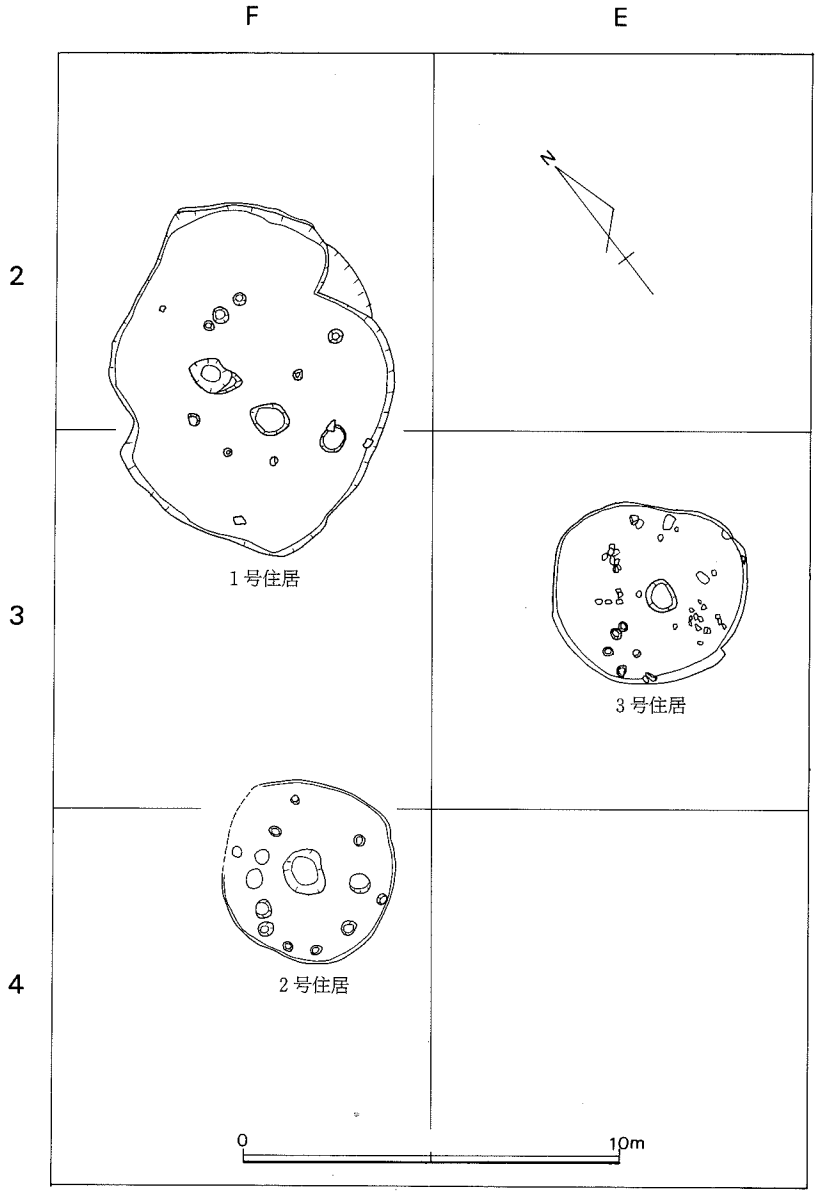
本遺跡の場合は石棺墓内に土器の副葬はなく玉類のみであり明確な時期の決定に欠けるが、甕棺の存在からも弥生後期を中心とした前期の時期が考えられよう。

住居跡

3棟の住居がそれぞれ独立して検出された。内部からは土器や鉄器が検出され、弥生後期後葉から終末頃と判断された。

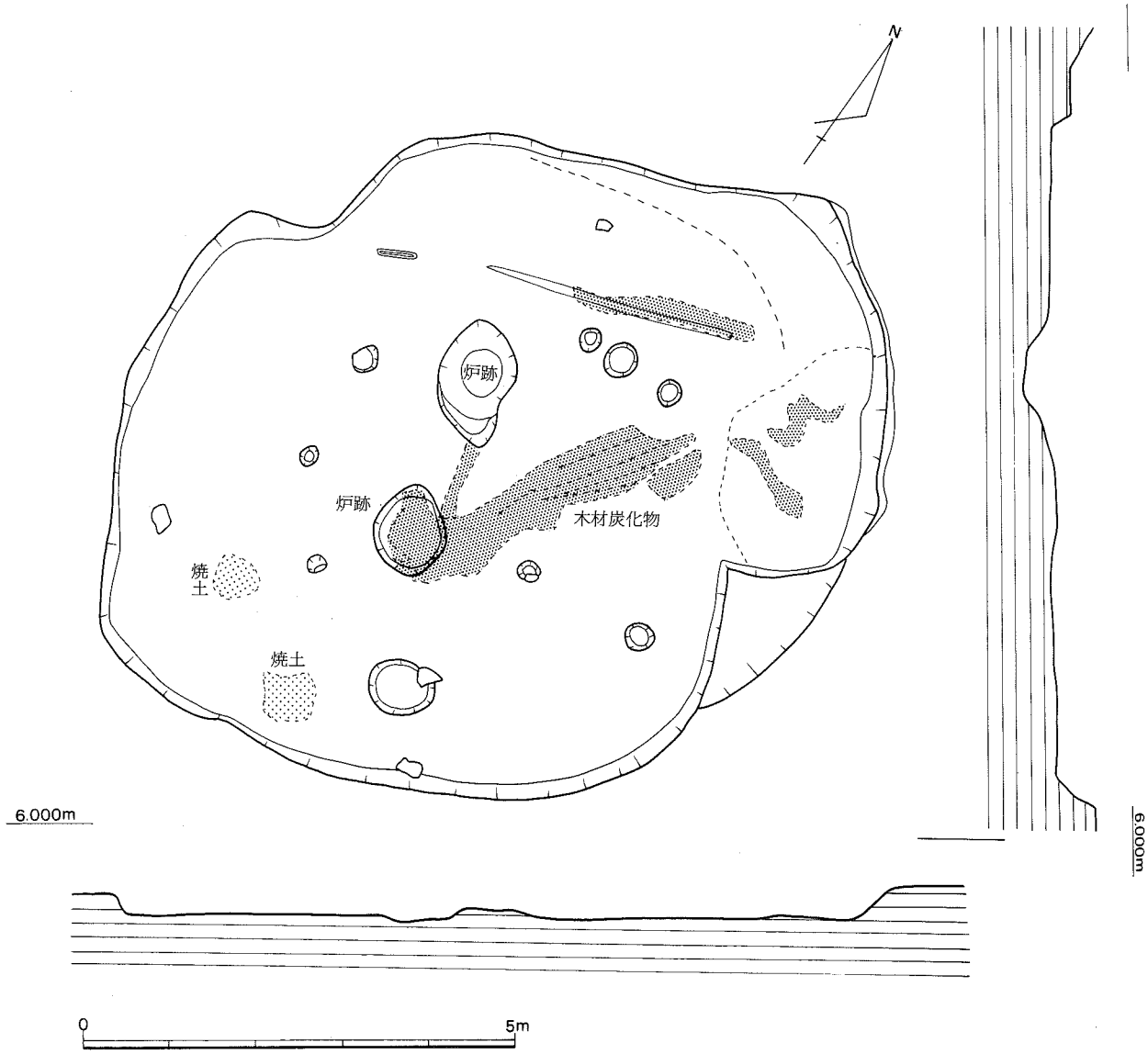
第1号住居跡　第43図

F－2区と3区にまたがって検出された。やや楕円形でいびつである。プランは南北約7.7



第42図　住居跡位置図

m、東西約９m、深さ約0.4mを測る。中央からわずかにずれたところに２基の炉址が残る。南東側の壁に直角に近い切り込みが見られ、段差があることから建物が重複する可能性もある。遺物は中程から床面にかけて小破片が多く、鉄鏃も出土した。さらに大小合わせて９個のピットが確認されている。この住居跡のほぼ中央から放射状に多量の炭化物が見られ、火災に遭った状況を示している。

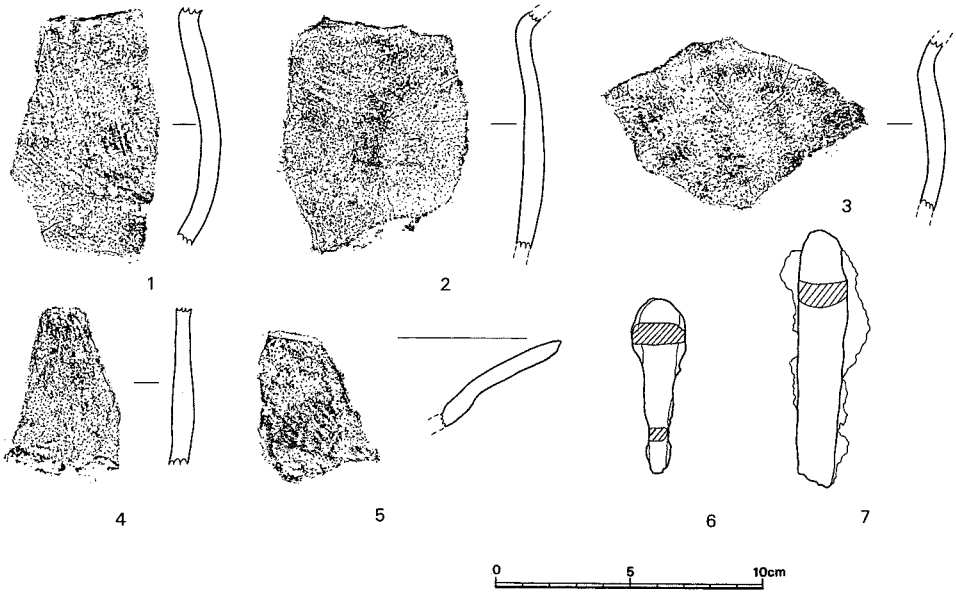


第43図　第１号住居跡実測図(1/80)

第１号住居跡出土の遺物　第44図　１－７

1 は口縁部を欠き形状が不明であるが、頸部がよくしまり胴部が丸く張り出す。頸部は粗いハケ目の上に横ナデされ、胴部は細いハケ目が斜行している。胎土には砂粒や雲母片が見られ、内面灰色、外面黄褐色を呈し焼成は良好。**2** は胴部がわずかに張るだけの甕である。胎土はよく精選され、焼成もよい。内外とも若干摩耗しており調整痕は不明である。**3** は口縁を欠く甕破片で内面にはわずかにハケ目を付けその上をナデた痕が見える。外面は摩耗を受け、胎土に含まれる砂粒が出ている。**4** は甕片で胴は直線的である。胎土はきめ細かいが焼成が甘い。**5** は口縁から肩にかけて反りがある高坏片である。口唇はやや尖り気味に丸くおさまり、浅い沈線が１本めぐる。**6** は長さ4.6cm、鉄鏃である。頭部は尖っていたと考えられるが、丸みをおびている。頸部はやや先細りで断面方形である。**7** は錆が全体に付着し、実態がよくつかめないが、上端はやや尖り気味に丸くおさまり、下端は折れている。断面は両端とも湾曲しており鑓鉋に似る。

土器の特徴はよく摑めないが弥生後期終末に属すると思われ、住居跡もこの時期と見てよいだろう。



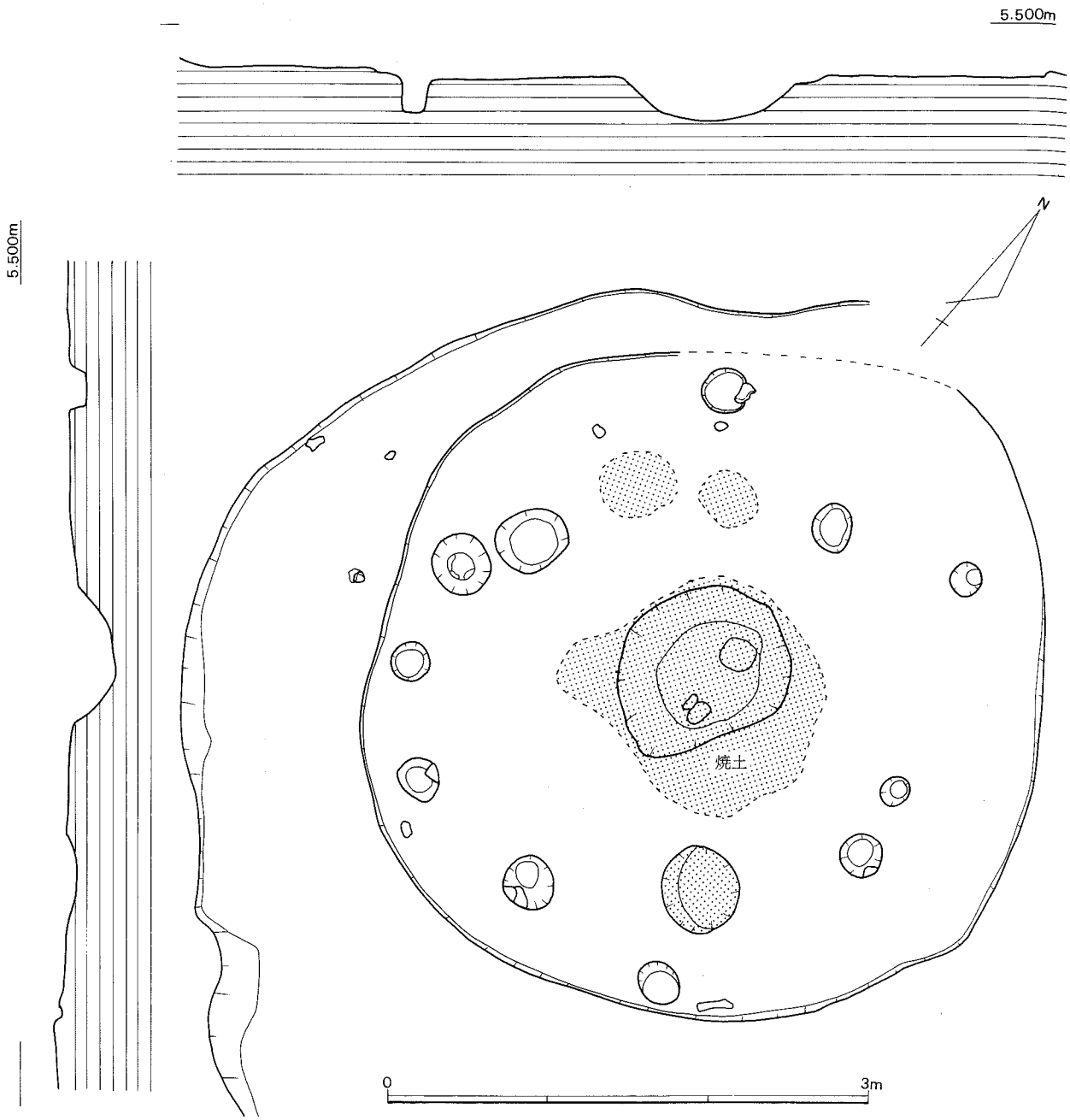
第44図　第１号住居跡出土の遺物実測図(1/3)

第２号住居跡　第45図

Ｆ－３・４区にまたがり検出、径４ｍのほぼ円形で、３住居の中では一番小さい。中央に径約１ｍのいびつな素堀りの炉を持つ。炉および周辺ともよく焼け、中には３個の拳大の礫が入っている。柱穴は12個認められるが、その中６個については築造時のものと思われ、炉の東にある柱穴１個については焼土が入っている。床面は堅く区別は容易である。住居内には黒色土層

が堆積し遺物は小破片の土器を多く含んでいるが床真上には数点だけである。壁の立ち上がりは低く削られ一部切れている。さらに外側には0.4m×1.4mの幅で西側半分に低い段が付く。

この住居跡では土層との関係を見てみよう。(第46図)



第45図　第2号住居跡実測図(1/40)

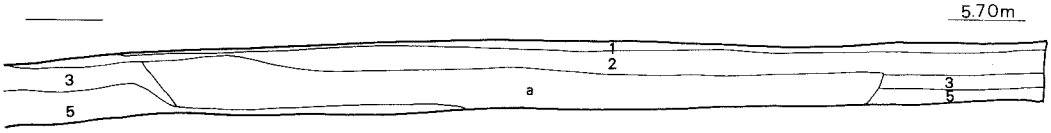
1層　黄色土層　現在の水田床土にあたりわずかに残っている。

2層　黄褐色土層　砂質土でよくしまっている。I'土層が斑状に入る。この面は水田として使用された時期がある。

3層　暗褐色粘質土層　粘着力があり1cm程の黒色粒子や微細な白色粒子をまばらに含む。弥生終末から古墳時代初頭にかけての遺物を含む。

4層　暗黄色土層　砂質でよくしまった土で弥生包含層の鏡片もこの層からであるが、西側にのぞく。

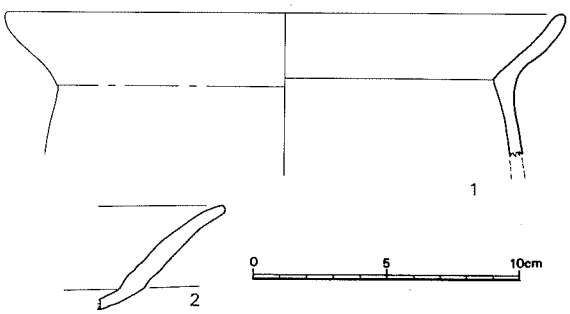
5層　明褐色粘質土層　やや砂が混じる粘質土層。1cm大の黒色粒子を全体に含む。縄文晩期包含層。



第46図　第2号住居跡土層実測図(1/20)

第2号住居跡出土の遺物　第47図

図化できたのは2点である。**1**は復元口径21cmの甕口縁部である。口縁はわずかに内湾し、頸部内面は尖がっている。器壁はうすくやや摩耗を受け、胎土焼成をも良好である。**2**は段を持つ高杯の杯口縁部でわずかに外反している。胎土には石英粒を多く含みかなりの摩耗を受けている。焼成は甘く内外とも茶褐色を呈する。時期的には後期後葉から終末に近い段階と考えられる。



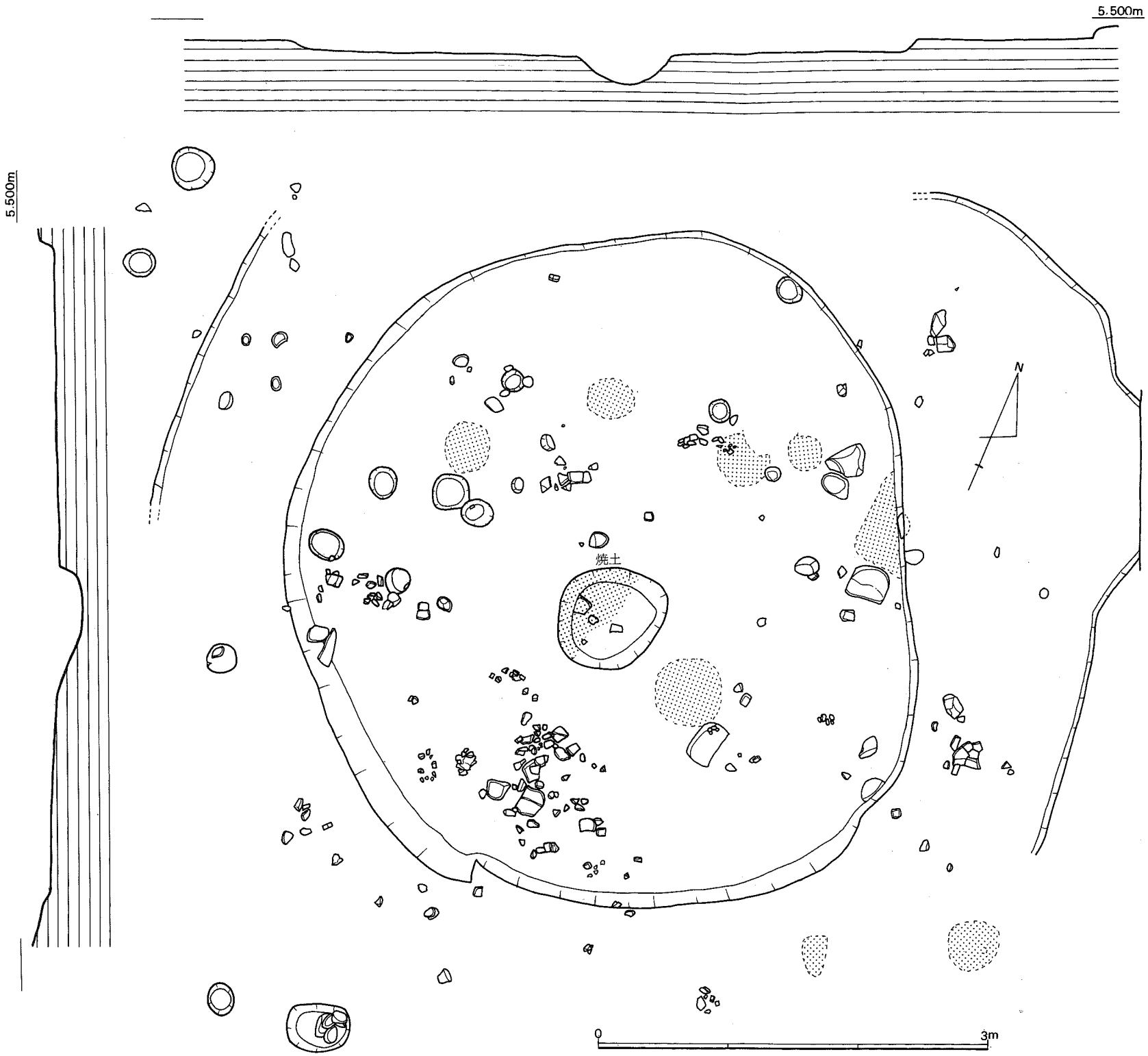
第47図　第2号住居跡出土の遺物実測図(1/3)

第3号住居跡　第48図

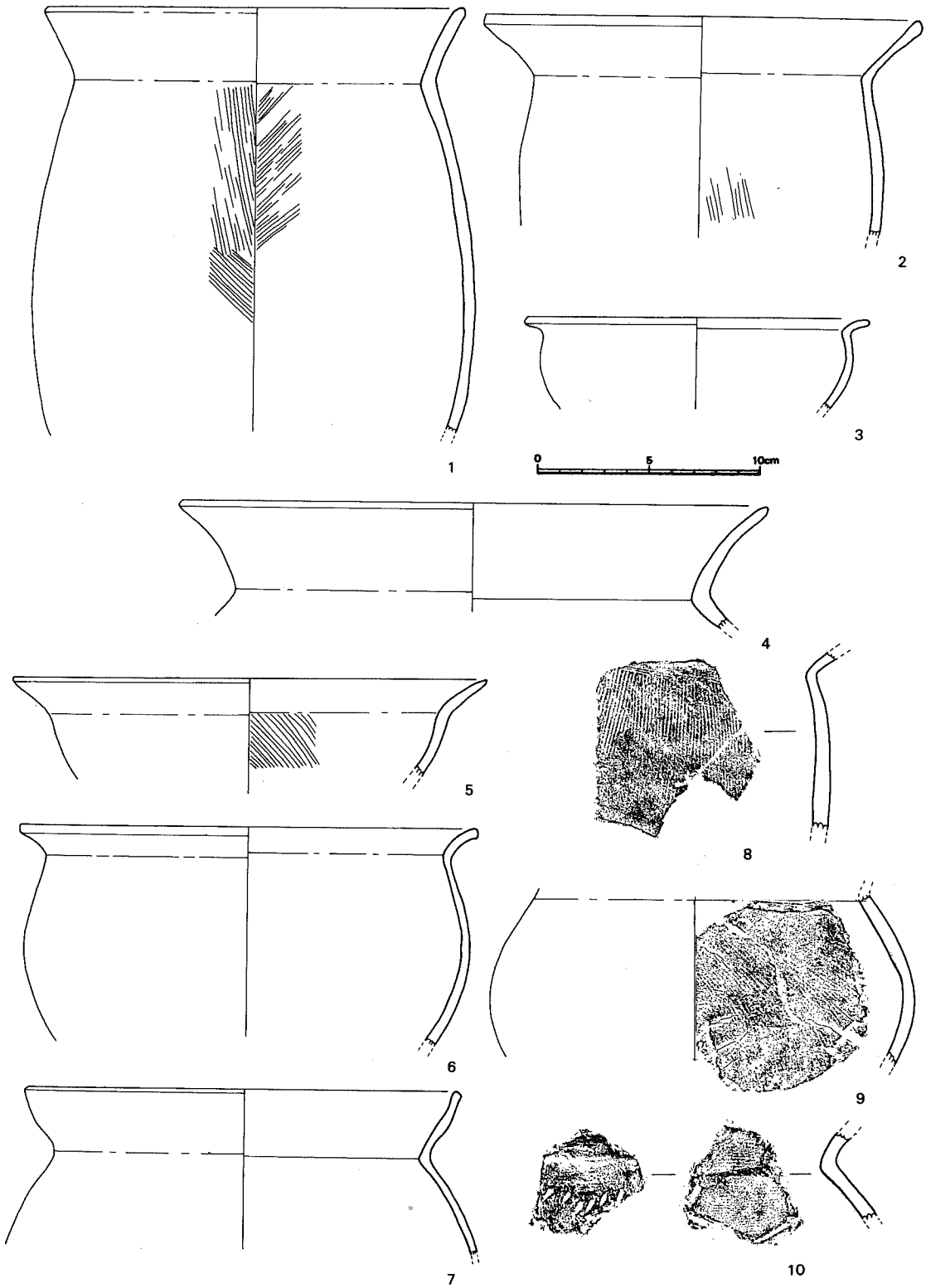
E－3区から検出。約5m×4.7mの円形に近いプランでほぼ中央部に径0.9m深さ20cmの楕円状の素掘りの炉を有する。柱穴は西半分に8個見られ住居に付属するものか不明。焼土は炉跡はもちろんであるが、その他にも7個所に点在する。床面は固くしまり見分けも容易である。遺物はこの遺構より多く出土する。床面直上からのものも多い。壁の立ちあがりは浅く削平を受けているが南側にくびれている部分が見られる。さらに壁から1m外側に浅い段を有することが確認されているが部分的にしか残っていない。住居の東側はやや直線的になっているが、その外側の低い段はさらに外に向って開いている。

第3住居跡出土の遺物　第49・51図

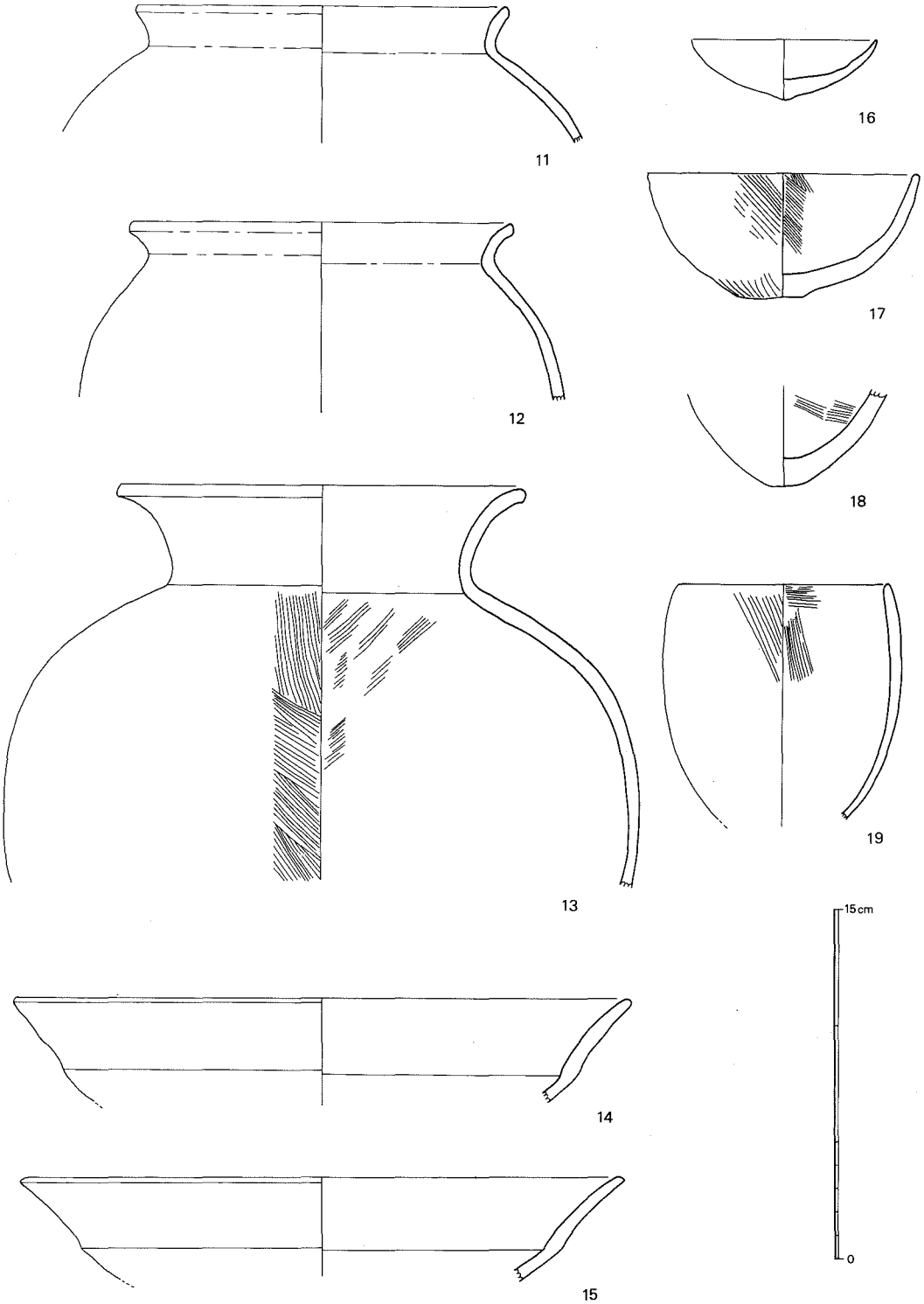
1は口径18.5cmの甕で外側に開き頸部はしまり内側は稜線がよく張り出す縁はナデ調整、胴部はゆるく張り出し内外とも丁寧なハケ目調整が残る。胎土には石英や白い砂粒が多く、焼成はやや甘い。外壁は赤褐色や黒褐色などが混じる。内壁は灰暗褐色。**2**は口縁がやや外に開き復原径19.6cmを測る。口唇部は斜行し一条の浅い線が弱く入る。内外とも摩耗著しくわずかにハケ目痕が見られる。器壁はうすく、胎土焼成とも良好。色調は褐色及び暗褐色。**3**は復原径15.5cmの小鉢になる。口縁は短く端部は丸くおさまり胴部が丸く張る。胎土には雲母、石英、白い砂粒を多く含む。器壁はうすく、焼成も良好で、内外とも褐色を呈する。**4**は口縁から頸部にかけての礫片で復原径26.4cmを測る。全体に摩耗著しく、石英や白い砂粒がうき出ている。焼成甘く、内外とも暗灰色を呈する。**5**は口縁端部が丸くおさめられ全体が外に開き復原径21.1cmの鉢状を呈する。内面はハケ目による調整が行われ、その上は化粧土を塗った感じに仕上げられている。外面は暗灰色で胎土は精選されており白い砂粒が目立つ。**6**は口縁が短く外反し復原径20.5cmを測る。胴部は丸くふくらみ器壁はうすい。調整痕は摩耗のため観察できないが、胎土には石英粒や雲母、白い砂粒を含み内外とも黄褐色を呈する。**7**は外反する口縁がゆるく内湾し、中央がふくらみ段を有する甕で復原径19.5cmを測る。頸部はよくしまり、胴部は外側に丸く張り出す。胎土は精選され、器壁はうすく仕上げられている。調整痕は不明であるが、古式土師器に近い形態である。**8**甕胴部で外面はタテにハケ目が施され頸部はヨコナデされハケ目が消え暗褐色で内面は灰色。胎土、焼成は良好。**9**は口縁底部を欠く比較的小形の壺で胴部の復原径は19cmを測る。胎土は精選され、良好で内面は細かいハケ目調整が斜めに施されている。外面は細かいハケ目調整が行われた後で研磨されさらにその上をタテに細い暗文が付されている。焼成は良好で内外とも暗褐色を呈する。**10**は壺頸部である。内面はハケ目調整が施され、外面はハケ目の上をナデ調整されている。さらに刺突された文様がやや不規則に施されている。胎土は精選され緻密で、内外とも黄褐色を呈する。**11**は口縁径16cmを測る壺形の土器で口縁はやや外に開き端部は丸くおさめられている。器壁はうすく仕上げられ、胎土には石英や白い砂粒、雲母などを含む。焼成は良好だが表面は摩耗している。**12**は**11**をややこぶりにし、口縁はやや外反し口唇は少し肥厚し丸くおさめられナデ調整されている。器表は摩耗しており胎土、焼成とも良好である。**13**は口縁径17.5cm、最大胴部27.3cmの壺大型破片である。口縁はややいびつながら外反し端部は丸くつまみ出されている。内面は口縁部がハケ目調整のあとヨコナデされ、胴部にかけては上半分部に粗いハケ目がつけられている。外面は全体にハケ目が施されている。胎土は精選されているが、焼成は甘い。内外とも灰色であるが一部黒ずんでいる部分もある。**14**・**15**はほぼ同様の高杯、杯部である。復原口径26cm、一段を有し内面は研磨されている。外面は摩耗しているが、ハケ目調整のあと研磨されている。**16**・**17**は手ずくね鉢である。**16**は底が尖るが**17**は若干平底で内外にハケ目が施されている。**18**は尖底部分だけで全体が不明であるが外面は削られている。内面はいびつであるがわずかにハケ目が残る。**19**は口



第48図　第３号住居跡実測図(1/20)



第49図　第３号住居跡出土の遺物実測図(1)(1/3)

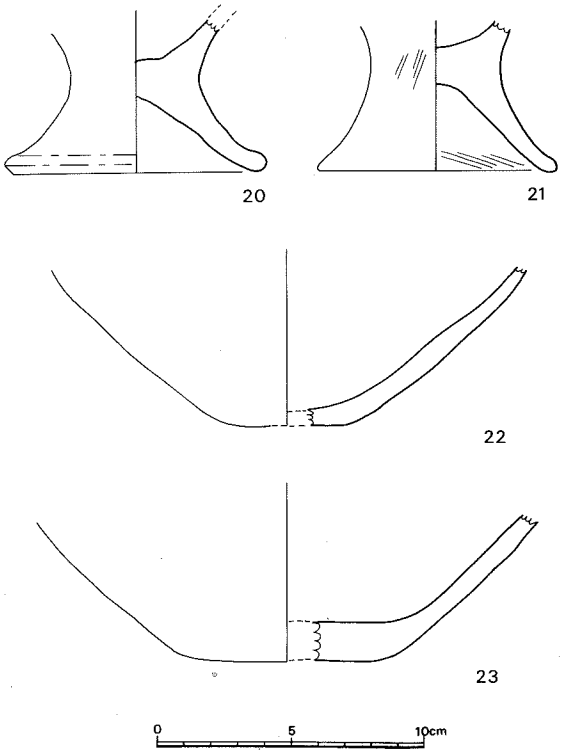


第50図　第３号住居跡出土の遺物実測図(2)(1/3)

縁径９cmの砲弾状になる鉢である。内面の上半は細かいハケ目調整のあとヨコナデされている。外面はやや粗いハケ目調整が体部上半に施されているが、口縁部はヨコナデ、下端部はヘラ磨されている。胎土は精選されているものの白い砂粒が目立つ。色調は内面が暗灰色、外面は黒灰色を呈する。

20～**23**は底部である。**20**は台付甕で裾部が広がり端部は厚くなり丸くおさまる。内面底はいびつで黒色スス状のものが付着している。胎土・焼成は良好で黄褐色を呈する。**21**は胴部への立ちあがり部分が**20**に比べて細く、内面は深いあげ底の台付甕である。内外面にわずかにハケ目が残る。**22**・**23**は壺底部である。底は胴回りに較べて小さくなっている。胎土には長石、石英、雲母を含み、焼成はやや甘い。内外とも灰褐色を呈し、部分的に黒ずんでいる。底は後期後葉に位置付けられよう。

第３号住居跡内出土の土器について概観した。甕、鉢、壺、高杯、手ずくね土器などである。いずれの土器も、共通している特徴は器壁がうすく仕上げられ、口縁が直行あるいは外反しながら開いていることである。この形態から時期的には後期終末に位置づけられ、従って住居もこの頃と考えられる。

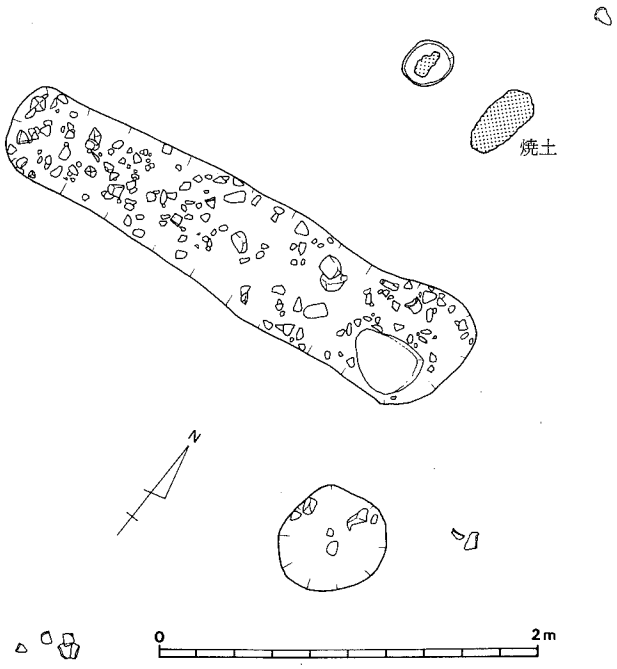


第51図　第３号住居跡出土の遺物実測図(3)(1/3)

集石を伴う土壙

E—3区の第1号住居跡と第3号住居跡の間に、北西から東南の方向に位置する。長さ2.7m東側の幅0.6m、西側が0.5mとやや狭くなっている。深さは10cm足らずと浅いが、上面は削られていると思われる。土壙内には東側の大礫1個を除いては、殆どが拳大以下の小礫である。弥生終末期の土器片も含まれるが、小破片ばかりである。この遺構との関係は不明であるが、北東方向に炭化した固まりと、径20cmのピットに焼石の入ったものがある。また南側には径40cmの浅い掘り込みに6個の小礫が認められる。

遺構の性格については推察の域を出ないが祭祀遺構と考えられている。本遺構の場合は住居跡の間に位置しているが、もともとは埋葬遺構と関係があったのかも知れない。埋葬遺構は住居跡の部分には見られず、住居建築の際壊された可能性もある。近接した所からは確認されているので可能性は無いとは言えないであろう。



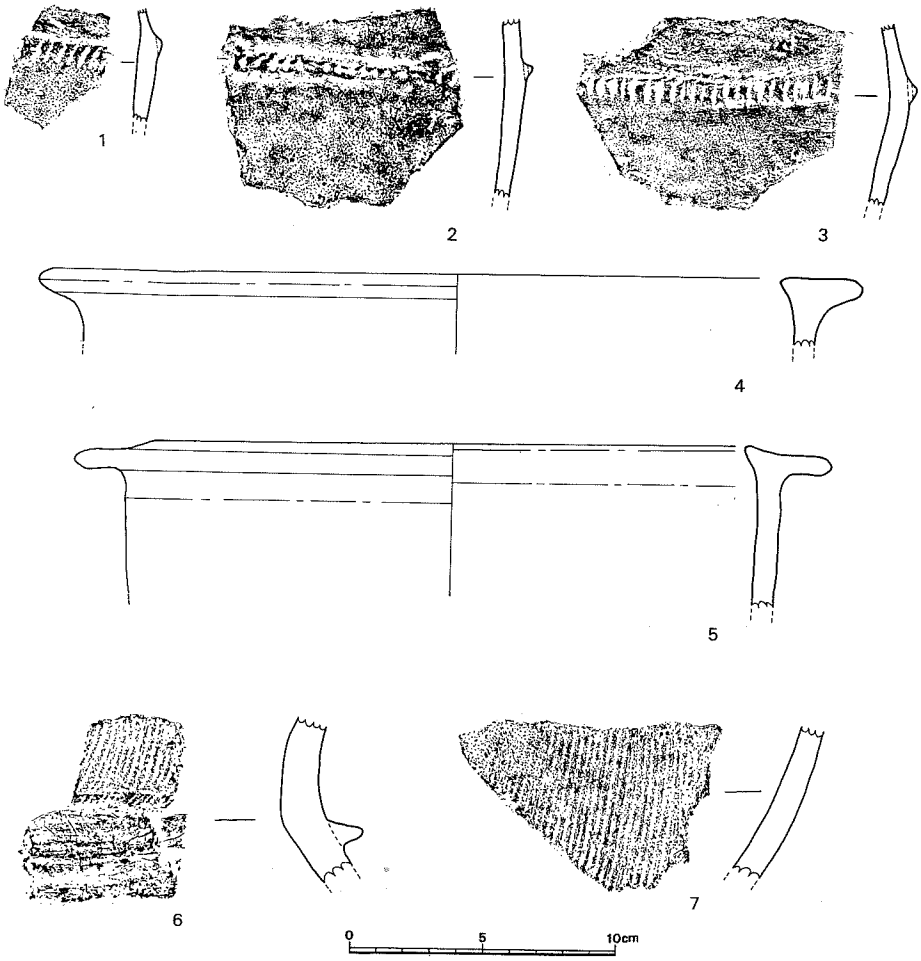
第52図　集石を伴う土壙実測図(1/20)

白井川遺跡出土の弥生土器　第53～56図

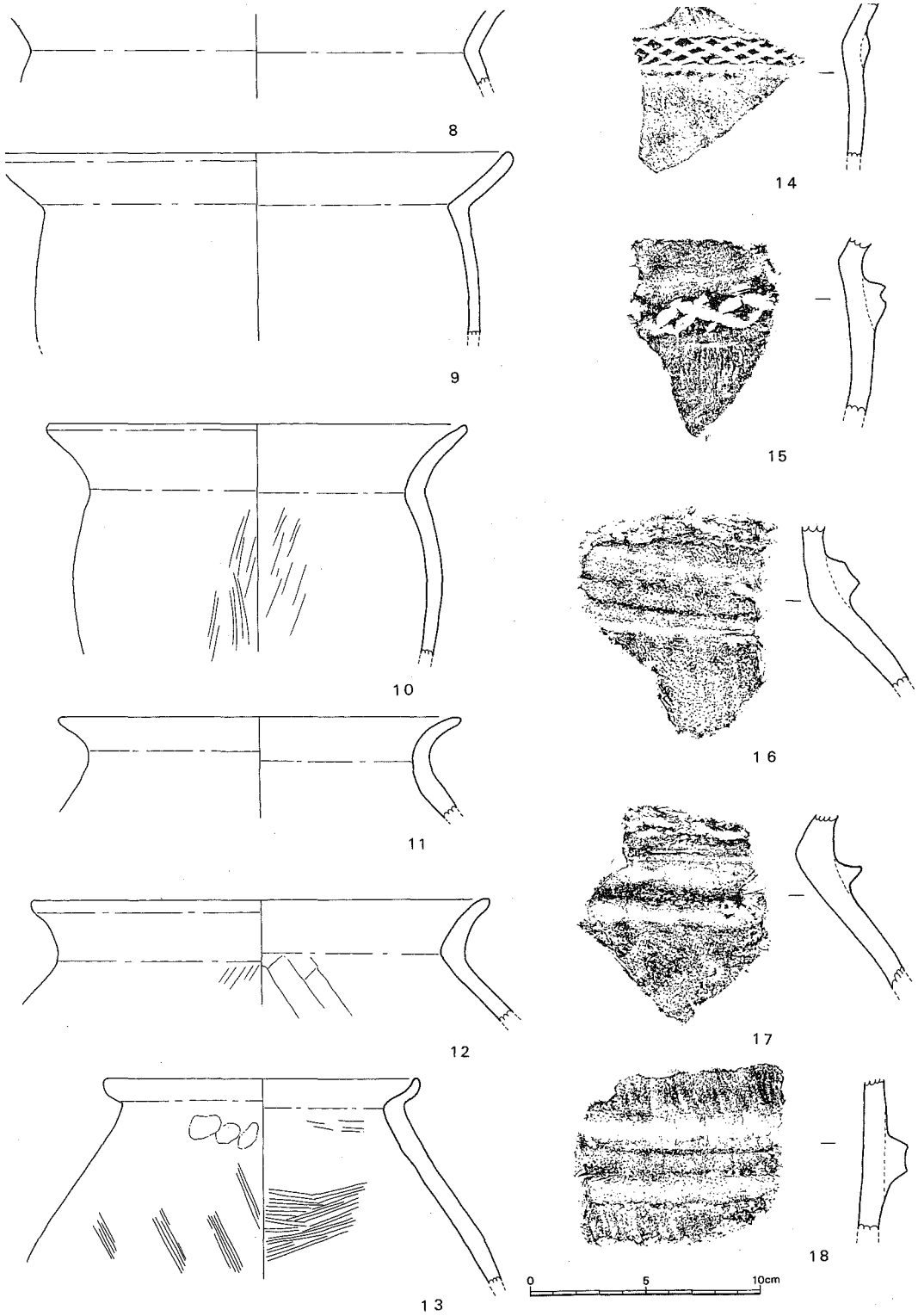
これまでの白井川遺跡における遺物の出土点数は５万点を越しているが、今回の調査区出土の遺物は約40,000点に達している。内訳は胴部が一番多く約35,000点と全体の89％を占め次いで口縁部の７％、底部２％、その他の土器の２％の順となっている。そのうち調査区の中で一番集中したのがＦ－２・３・４、Ｅ－３区である。

しかしながら、遺物の殆どは細片になったものが多く、図上復原すら困難であった。ここでは遺構外の調査区、および表面採集されたものについて概観してみる。

１～３はＦ－４区出土の刻目突帯文土器である。**１・２**は同一個体と考えられヘラ状の工具で胴部に細い刻目が施されわずかに「く」字形になる。胎土には長石、石英、白い砂粒を含み、



第53図　弥生土器実測図(1)(1/3)



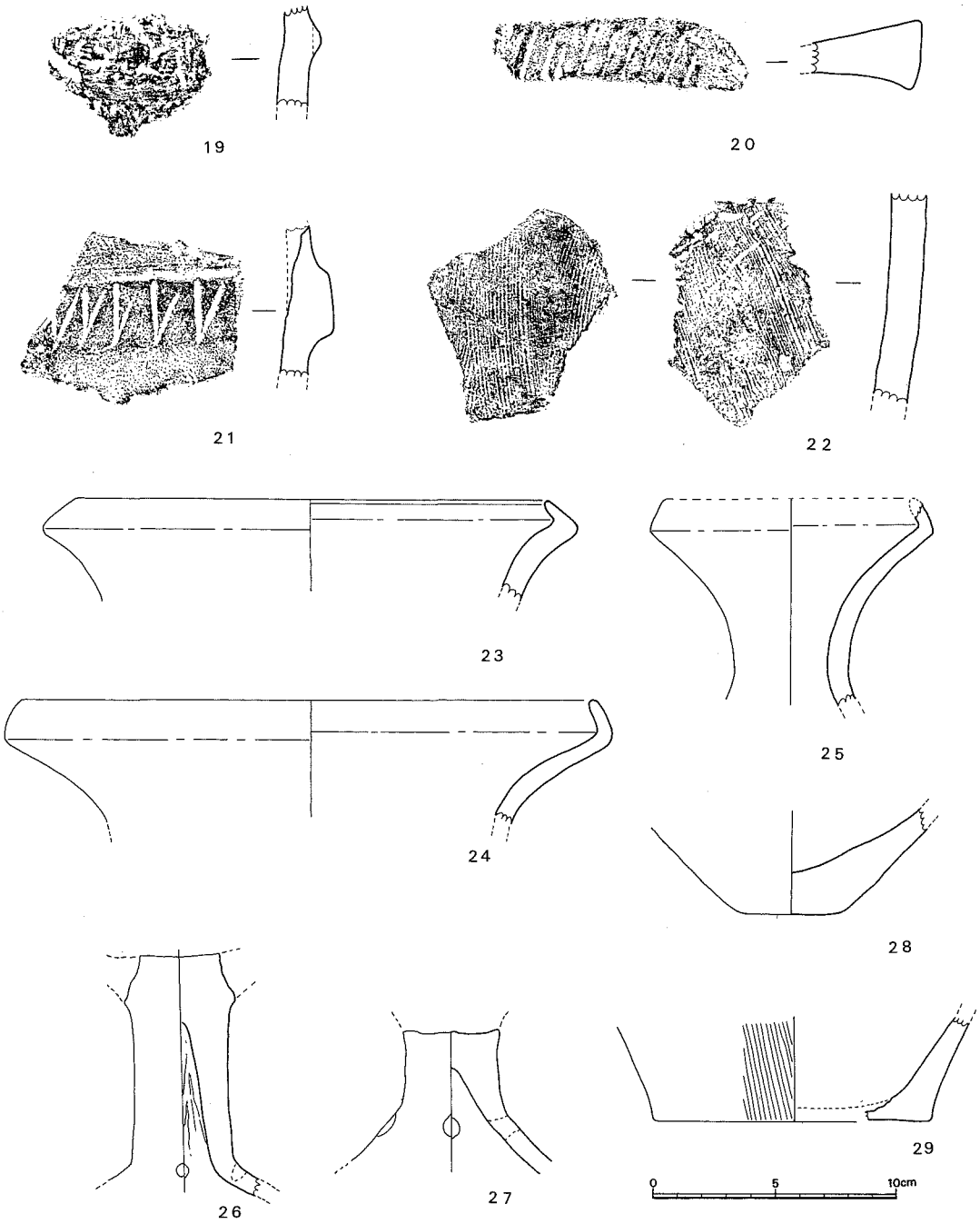
第54図　弥生土器実測図(2)(1/3)

内外とも暗褐色を呈している。刻目は細くくずれているところから弥生初頭の段階に位置ずけられよう。**3**は胴部に貼り付けられた細目の突帯に刻目が施されている。胎土には細かい雲母の他にやや粗い石英粒が目立っている。焼成は良好であるが、内面褐色、外面は暗褐色を呈する。胎土はあきらかに前者と違い弥生的であり、亀の甲式土器に包括されよう。**4**～**7**は町営白井川住宅南側周辺からの採集資料である。**4**は復原口径31.5cm。口縁部は、やや肥厚した逆「L」字状で内側につまみ出され尖っている。外面はヨコナデされ、胴部にかけ直行すると思われる。胎土は長石や白い砂粒を含み焼成はやや甘い。内面は灰褐色で外面暗褐色を呈する。時期的は中期中葉に比定できよう。**5**は口縁部が外側に下り気味の逆「L」字を呈し、平坦部はわずかに凹んでいる。内側は尖り気味につき出し、この直下もわずかに凹む。外側も頸部の所は凹みナデ調整されている。胎土は長石や雲母を含み精選され、焼成もよい。内面は暗灰色だが外面はスス状のものが付着し黒色を呈する。中期中葉に属するが、前者とは一時期後続のものである。**6**・**7**は同一個体の壺破片である。**6**は断面三角形の貼り付け突帯を有する頸部、**7**が胴部であろう。いずれも外面には粗いハケ目調整が施され、さらにその上に円塗りされている。中期中葉の資料であろう。

中期の資料は発掘調査においては出土しておらず、この土器が採集された周辺に中心が求められるのかも知れない。

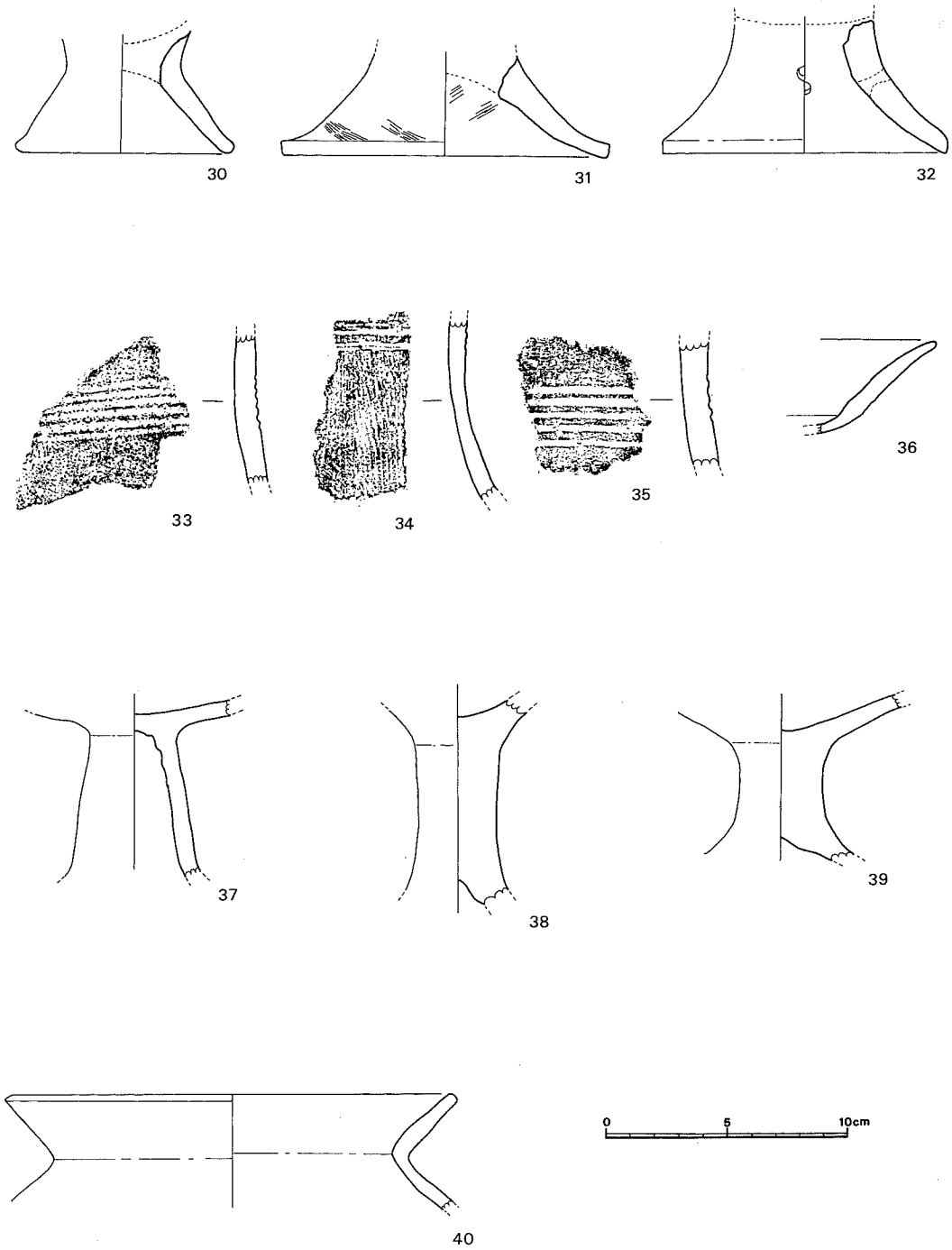
8～**10**は甕、外反する口縁部で復原径23.5cm口唇は平坦に斜行する。頸部はよくしまり胴部はゆるく張り出すと思われる。器壁はハケ目調整のあとヨコナデされている。胎土は石英、雲母、白い砂粒が含まれ、焼成良好。内外とも褐色を呈する。**9**は口縁部がわずかに内湾しながら外に張り出す。頸部内側は稜線がはっきりしている。胎土は長石や白い砂粒を多く含み精選されている。焼成は良好で内外とも暗褐色を呈する。復原口径22.2cm。**10**は口縁が立ちあがり頸部はゆるく湾曲し胴部の張りも弱い。胎土には微粒な滑石粉末を多く含み堅くしまっている。

胴部の内外には不規則な糸痕が見られる。内外とも暗褐色を呈している。復原口径18.3cm。**11**～**13**は壺、**11**は頸部が短く外に反り胴部が丸く張ると思われる。胎土には長石、石英、白い砂粒を含む。器表は摩耗を受け、内外とも褐色を呈する。**12**は全体的に厚味を持ち口縁は外反する。頸部から胴部にかけ内部にはケズリ痕が認められ、土師器とも考えられる。胎土には長石、石英、白い砂粒を多く含み焼成は良好。内外とも褐色を呈する復原口径20cm。**13**は口縁部が短く開き内湾している。口縁径は13.7cmであるが末広がりに胴部が広くなっている。内面は指頭調整の下に粗い条痕が横位に、外面には細いハケ目がタテ方向に施されている。胎土には長石、雲母、白い砂粒を含み焼成はしっかりしている。内面は褐色、外面は黒ずんだ部分もあるが褐色を呈している。**14**は甕頸部に帯状の貼り付けを行い、ヘラで網目状に刻んでいる。胴部の内外は状痕が浅く残る。胎土には滑石粉末をよく含んでおり焼成も良好。内面暗褐色、外面灰褐色を呈する。**15**は頸部がくびれ、その直下に断面三角形の突帯を貼り付け、それを斜格子状に刻んでいる。胎土には滑石粉末を含み焼成良好。形状は壺形を呈するが知れない。**14**・



第55図　弥生土器実測図(3)(1/3)

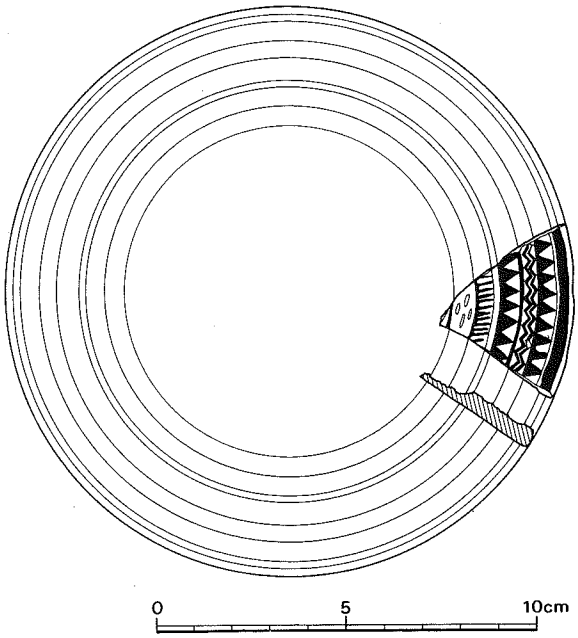
15の貼り付け突帯の土器はヘラ刻みの文様からすると南九州の影響を受けているものと考えられる。16～22は大形土器片である。16は断面方形の貼り付け突帯を有する壺である。胎土には石英や白い砂粒が多く含まれる。17も壺頸部で断面三角形の貼り付け突帯がめぐる。二本あったと思われ一条は剝落している。胎土には石英や雲母を含み焼成良好。18は胴部で、断面方形の貼り付け突帯がめぐり端部は若干凹んでいる。胎土には粗い石英や長石、白い砂粒が含まれ焼成は良い。19は厚手の破片で内外に粗い条痕が施されている。胴部には断面三角形の貼り付け突帯に条痕の施文原体で刻目が施されている。胎土は粗い砂粒を含み焼成は良好。20は壺口縁で幅広の縁にはヘラにより細い線が斜めに付されている。焼成胎土ともに良好。21は胴部に2.5cmの突帯を貼り付け、V字状の連続文を施している。施文原体はわずかに鋸歯状になったものを利用している。胎土には粗い石英や雲母などを含み焼成はやや甘い。内面は褐色、外面は黒色を呈している。22は滑石粉末を多く含んだ灰色の胎土に内外から丁寧なハケ目調整を施している。外面には朱塗りの痕跡が見られ、焼成は甘く軟欠である。16～22の破片は甕棺になるものと思われる。23～25は袋状口縁である。23が復原口径19cm、24が23.5cm、25は、わずかに口縁端部を欠失する。三者とも胎土は精選され焼成も良好で色調は灰黄褐色を呈する。26は、高杯脚部で上下端を欠く。脚部の開く部分に4個の穿孔を有するが、完全に穿孔されない穴もある。脚内面はヘラ状の工具で調整され、しぼった様にタテに線が入る。胎土には石英と白い砂粒を多く含み焼成は良好。27は脚部は短かく、外に広く高杯で上部を欠く。穿孔は2個残るが4個であっただろう。胎土、焼成とも良好である。28は壺底部である。底径4cmで平坦であるが、やや安定を欠く。胎土は若干粗く内面はヘラ状のもので仕上げられ、黒色である。外面も研磨を受けているが、わずかに風化している。29は甕底部で立ちあがりが急である。
全体にハケ目調整が施され、胎土には石英や雲母が見られ、焼成は良好。この底部の時期は後期を遡ると考えられる。30は器台と思われるが、上部を欠き下端は全体が残る。内外に粗いハケ目調整が施されている。胎土には微粒な滑石を含み石英や白い砂粒が目立ち焼成はやや甘い。31は焼土、焼成は30と同様であるが、高杯脚部であり端部若干つまみ上げられている。内外ともハケ目調整が部分的に見られる。32も高杯脚部で穿孔されている。端部は丸くおさめられ、胎土には石英や白い微粒を含み、焼成はやや甘い。33～35は数状の細い沈線を有し透しをもつ大形の器台になるものである。33は上下2段の透しが見られ、34はタテに長い透しが残る。いずれも胎土・焼成は良好である。36は高杯の杯部で内面に段を有する。内外とも研磨を受け、胎土・焼成とも良好。37～39は高杯でともに上下の端部を欠く。胎土は38に滑石粉末が入る他は精選され、焼成もよい。時期的には古墳時代に属すると思われる。40は頸部が大きくくびれ、口縁部は外反し端部は平坦で斜行する。外面上部はヨコナデされ胴部には、わずかにハケ目が認められる。内面は削られ器壁うすく、古式土師器の様相をよく残す。古墳時代初頭に位置づけられよう。



第56図　弥生土器および土師器実測図(4)(1/3)

鏡　第57・58図

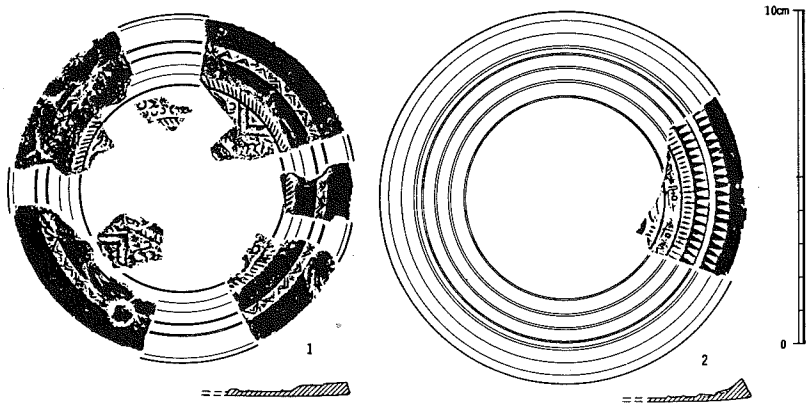
F－3区第3層からの出土で全体の十分の一程の方格規矩鏡破片である。復原直径15cm、平縁の最も厚い所が4㎜、内区の厚さが2㎜である。平縁の内側には鋸歯文を挟んで復線山形文がめぐる。一段低くなった内区には斜行櫛歯文を配し、さらに内側にやや長い点が4個菱状に見られる。おそらくこの圏線内に帯銘があったものと思われる後漢代の舶載鏡がある。鏡の鋳上がりは良好で、全体に艶があり、暗緑色を呈する。



第57図　鏡実測図(1/2)

鏡はこれまでの各地の出土例は墓地からの出土が殆どを占めるが、近年弥生時代終末前後とされる鏡は住居跡、溝などから出土する例が増えている。本例は弥生後期の包含層中からであり、埋葬遺構からのものではない。しかし住居遺構によって、墓地が壊された可能性も強く、副葬品と考えられる余地も残している。

県下における弥生時代の鏡出土は、対馬・壱岐を除けば松浦市栢の木遺跡出土の内行花文鏡[註11]と本例の2面にすぎない。栢の木遺跡出土の鏡は保存状態が悪いが、比較資料として壱岐原の辻遺跡出土の方格規矩鏡の実測図[註12]をあげておく。



第58図　原の辻遺跡出土の鏡

県下における晩期土器の編年について　第59図

本遺跡出土の縄文晩期の資料については遺物の項で説明してきたが時期的にはどのような位置にあるのだろうか。全体的視野にたって概観してみよう。

長崎県下における縄文晩期の出土遺跡も、ここ数年来増加の一途をたどっている。晩期の編年作業については、賀川光夫、乙益重隆、森貞次郎の諸先生方によって編年検討がされてきたものが今日でも大きな底流となっている。近年の資料の増加は、各地域における編年試案についても多くが試みられている。

しかしながら本県独自の編年案はまだ試みられていないのが現状であるが、九州における基準資料として用いられている遺跡は少なくない。代表的な遺跡として、礫石原遺跡[註13]、山の寺遺跡[註14]、朝日山遺跡[註15]、原山遺跡[註16]が島原半島に集中する。そこでこれら県内の主要遺跡について、発表されている報告書から抜粋して縄文後期終末から晩期について概略編年してみたのが第59図である。

縄文後期終末の遺跡は三万田式および五領主式系統の土器を出土する遺跡があげられる。これらの遺跡は島原半島に多く見られ、国見町筏遺跡[註17]では１類から７類まで分類され、西平式を上限に、三万田、御領、黒川の各土器が出土している。さらに有明町大野原遺跡[註18]や中田遺跡[註19]においても後期終末の様相がみられる。県北では宮の本遺跡[註20]に１例の報告がある。また最近調査された橘湾奥部に位置する飯盛町築崎遺跡[註21]からもこの時期の良好な資料が得られている。なおこの時期、石器には片器を利用した十字形石器の共伴が特徴的である。

晩期全体を見てみると、晩期初頭から前半にかけての出土資料は少なく、現在のところ長崎市深堀遺跡[註22]に見られるだけである。この遺跡は旧海岸線の砂洲上に営まれた、低湿地を伴った縄文から弥生時代にかけての複合遺跡である。大石式に近いとされる口縁部に沈線を有するものや肩の張る深鉢が見られる。浅鉢についても口縁部から胴部にかけて長く外反し、屈曲部が鋭いのが特徴としてあげられる。晩期後半の土器はやはり深堀貝塚に見られる。浅鉢では口縁部と胴部の張りの部分がやや近接したり、小さな山形の隆起部が口縁にみられたりする。深鉢では直立していた口縁が内傾するようになり、沈線を有するものもあるがやや乱れを生じている。礫石原遺跡の深鉢にも類似のものがある。県外では福岡県広田遺跡[註22]のⅣ期は晩期Ⅱ式（賀川編年）に近い分類が試みられており、熊本県天城遺跡[註23]出土の土器もこの頃に編年されている。

晩期中頃になると、県内においても類例は増えてくる。黒川式に代表される土器群である。深鉢では口縁部の沈線が消え、頸部のくびれがゆるくなり、胴部の屈曲がなくなり、ゆるくふくらむ程度になってくる。また口縁にはリボン状の突起を伴うものもある。浅鉢は口縁と胴部に著しい特徴をもつ。つまり口縁部が退化し胴部が左右に張り出すものが多い。リボン状の突起をもつものもある。この種の土器は丁寧に研磨されているものが殆どで、深堀貝塚でも多く出土している。県北では松浦市宮の下り遺跡や佐世保市宮の本遺跡にみられる。県央地区では東彼杵町宮田Ａ遺跡[註24]で多くの扁平打製石斧と供伴している。なおこの時期の埋葬カメ棺は大村

1～4　礫石原遺跡
5　深堀遺跡
6　宮の本遺跡
7　礫石原遺跡

9～12　深堀遺跡

13・14・16～19　深堀遺跡
15　名切遺跡

20・32　宮の本遺跡
21・28　宮の下り遺跡
22・30　宮田遺跡
23・27・31　朝日山遺跡
29　ケイマンゴウ遺跡
33　肥賀太郎遺跡

37・38　黒丸遺跡
39　名切遺跡
40　朝日山遺跡
41・42・45・46　山の寺遺跡
43・44　白井川遺跡
47　肥賀太郎遺跡
51　深堀遺跡

54・55・62～66　原山遺跡
56・58・59　白浜貝塚
60　名切遺跡
67　原山遺跡

第59図　県下における晩期土器の編年図

市黒丸遺跡[註25]や葛城遺跡[註26]で検出されており、埋葬方法を知る上で貴重な手がかりを与えている。

晩期後半は山の寺遺跡を代表するもので、貼り付け突帯に指頭状の凹文あるいは刻目を基本とする文様である。底部はあげ底気味で外面は台形状のものが多くなる。浅鉢は口縁が単純化し、わずかに外反しながら肩部が屈曲するようになる。大村市黒丸遺跡をはじめ壱岐名切遺跡[註27]のように海岸部から出土している。また小浜町朝日山遺跡は壺形土器も供伴している。西海町ケイマンゴー遺跡[註28]と中屋敷遺跡からはカメ棺の出土がある。五島白浜貝塚[註29]でもこの頃のピークをなす。

晩期終末は原山、夜臼式で代表される遺跡である。口縁と胴部の二条の貼り付け突帯には、いわゆる両方から刻目を入れた文様が連続し、空間は条痕による調整から板目による調整が多くなる。底も上げ底は減少し平底が多くなる。浅鉢はやはり口縁部と頸部が一体化する傾向やわずかに外反し肩があまり張らないものが多い。壺形土器も多くなり口が外反し胴部が丸く張り出すようになる。原山支石墓群からは浅鉢や小形鉢、カメ棺が出土しているが、胎土が非常にきめ細かく、色調が黄褐色という共通点を持つ。終末期の遺跡は田平町里田原遺跡[註30]や、白浜貝塚がその最たるものであるが、すでにこれらの遺跡に共通することは、弥生時代前期の遺物も多く出土する傾向にある。

以上のように縄文晩期の土器について編年を概観してきたが、白井川遺跡の土器については、晩期後半から終末にかけての刻目突帯文の時期ということができよう。

また組織痕土器については晩期中頃には供伴しており、その傾向は終末期まで続いていく。

文　献

註　1　北有馬町教育委員会　国指定支石墓群　『環境整備報告書』　1981

2　諫早市教育委員会　『風観岳支石墓群調査報告書』諫早文化財調査報告書第１集1975

3　佐世保市教育委員会　『宮の本遺跡』　1980

4　宮崎貴夫　「宇久松原遺跡」　長崎県埋蔵文化財集報IV　1983

5　多良見町教育委員会　『化屋大島遺跡』　多良見町文化財調査報告書第２集　1974

6　秀島貞康　『林ノ辻遺跡』　諫早市文化財調査報告書　第４集　1983

7　稲富裕和　『富の原遺跡』　大村市文化財調査報告書　第12集　1986

8　稲富裕和　『小佐古石棺墓群』－Ｂ地点－　大村市文化財調査報告書　第13集　1988

9　高野晋司　「久津石棺群」　長崎県埋蔵文化財調査集報Ｉ　第35集　1978

10　正林　護　「五反田遺跡」　長崎県埋蔵文化財集報IV　第55集　1981

11　正林　護　『栢ノ木遺跡』　松浦市教育委員会　1973

12　藤田和裕　『原ノ辻遺跡』III　長崎県文化財調査報告書　第37集　1978

13　古田正隆　『礫石原遺跡』　百人委員会埋蔵文化財報告　第７集　1977

14　古田正隆　『山の寺梶木遺跡』　百人委員会埋蔵文化財報告　第１集　1973

15　安楽　勉　『朝日山遺跡』小浜町文化財調査報告書　第１集1981

16　註１に同じ

17　吉田正隆　『筏遺跡』　百人委員会埋蔵文化財報告　第４集　1975

18　宮崎貴夫氏教示

19　吉田正隆　『中田遺跡図録』　百人委員会埋蔵文化財報告　第８集　1977

20　註３に同じ

21　藤田和裕　『築崎遺跡』　飯盛町文化財調査報告書　第１集

22　小池史哲　「福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器」　『森貞次郎博士古稀記念文化論集』　1982

23　島津義昭・清田純一　「天城遺跡」『古保山・古閑・天城』
熊本県文化財調査報告　第47集　1980

24　高野晋司　『宮田Ａ遺跡』　九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI
1989

V まとめ

昭和62年6月、彼杵中央地区圃場整備事業に伴う範囲確認調査としてスタートしたのが岡遺跡の調査であった。青温石製石塔の発見や建物遺構の発見は、それまで空白の部分が多かった中世史を強力に補強する資料にもなった。さらに第52号排水路の調査区で狭い地点から多量の国内外産の焼物が出土したことは中世陶磁器編年の上からも貴重なものであった。今後は、北側に位置する松岳城との関連や文献に登場する在地の武士団との関係、キリシタンの打ち壊しに遭ったと言われる寺院の存在の確認など、まだ多くの問題を抱えている。

古墳時代については古式土師器の出土があり弥生終末から存続されることは予想されるが、遺構まで広げて押さえることは出来なかった。しかし5世紀代の前方後円墳「ひさご塚」の存在から見ても、彼杵平野を生産基盤の中心としていたことは確実であり、今後の遺構の確認が課題となる。

弥生時代については住居跡3棟、埋葬遺構22基の成果を得た訳であるが、関連性は不明な点も多い。住居跡も含め、遺跡の広い範囲で出土した土師器片は弥生後期後半以降の物が圧倒的である。しかし中期の土器も表面採集とはいえ数点確認されており、地域によっては濃厚な範囲が予想される。埋葬遺構も南北250mの範囲の中に点在している。ただこれらの遺構は集中的な精査を行っていないので、どれだけ群集墓を成していたか不明であるが、まだかなりの数が残っていると考えられ、中期から後期にかけての時期であろう。

今回調査での大きな収穫の一つに鏡片の出土がある。方格規矩鏡で全体の10の1程にも満たないものである。しかし保存状況は極めて良い。弥生後期の土層出土であるが、箱式石棺に副葬されていた疑いが強い。県本土部における鏡出土の遺跡は数例にすぎず、しかも舶載鏡の出土は松浦市柏の木遺跡に次いで2例目である。柏の木遺跡は佐志川流域に発達した平野部を見下す台地に位置し、平野部には縄文晩期から古墳時代の集落まで確認されており、本遺跡と類似した環境にある。

このような生産基盤を背景に、「クニ」としての芽ばえが胎動していたものと考えられる。縄文時代については縄文時代中期の土器がわずかに採集されているだけで詳細は不明である。ただこの時期大村湾沿岸における遺物の出土について見るならば、すべて小規模なものばかりで、しかも調査では他の時代に混じって出土した例が殆どで単独の文化層から得られたものは少ない。おそらく小人数による移動が行われたということだろうか。後期の資料は第51号排水路の第5層からひとかたまりになって出土した鏡崎式土器がある。同一個体で文様もしっかりしている。ただこれだけの資料で関連性が見いだせないが、全体的に第5層を掘れば追加資料に恵まれるかも知れない。

縄文時代の資料では晩期後半以降の土器が大半を占める。標高3m～6mまでの間に遺物の散布が見られるが、特に注目されるのが、扁平打製石斧の一群である。これは同様の立地を示

す宮田A遺跡でも多量に出土している。この時期にはすでに稲作の受容期に入っている。その点については、遺跡の周辺には低湿地が所々に見られており、稲作の問題についても十分考えられることである。

縄文晩期の石器については、扁平打製石斧の石材供給は、近接した所に板状の玄武岩が露頭しており、さほど困難ではなかったと思われる。ただ黒曜石については不純物を含んだ質の悪いものを選んでおり、旧石器時代に良質の黒曜石を各地から集めているのと対象的である。質の悪い角礫の原石も得られているが、原産地がどこか不明である。遠くへ行けば良質のものが得られているのにそれをしていないということは、近くに原産地を求めているのかも知れない。

以上、時代を逆に問題点をまとめてみた。

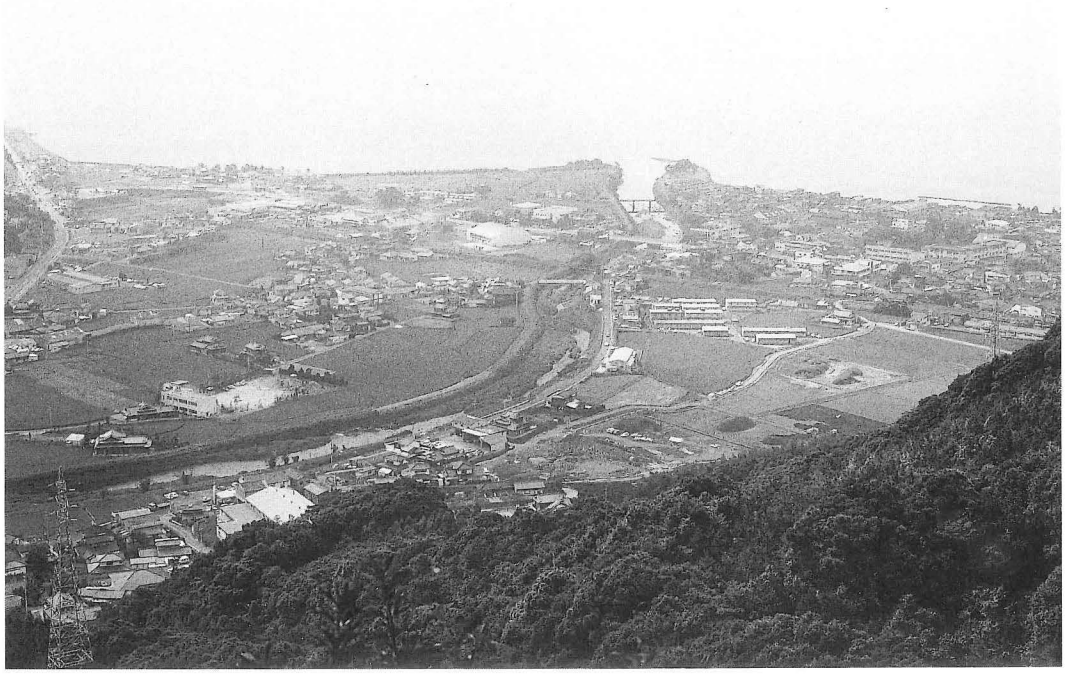
今回の調査で何よりも収穫が得られた原因は、点あるいは線から面的な調査を実施したということに他ならない。住居跡がその中に単独で3棟検出されたことが全てを語っているといえよう。

これまでの調査の成果により、出土遺物も膨大な量にのぼっている。今後は、この発掘した資料をいかに活用するかによって遺跡の重要性が確認されるのではないだろうか。

白井川遺跡は全体が圃場整備事業によって埋め戻されているが、調査範囲は全体の何十分の一にすぎないと考える。さらに遺跡の広がりは彼杵川の東側にも伸びている可能性があり、今後の開発行為にも十分な対応を備え保護して行く必要があろう。

図　　版

（北東から）

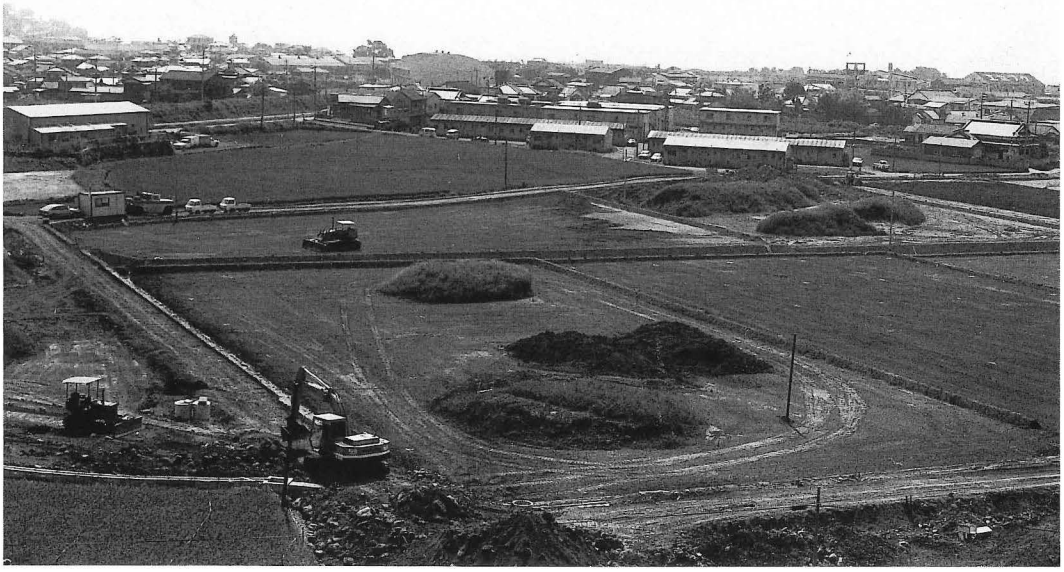


（北から）

遺　跡　遠　景

図版 2

遺跡遠景(西から)手前は岡遺跡



調査後圃場整備工事の進む風景

遺跡遠景および近景

調　査　風　景

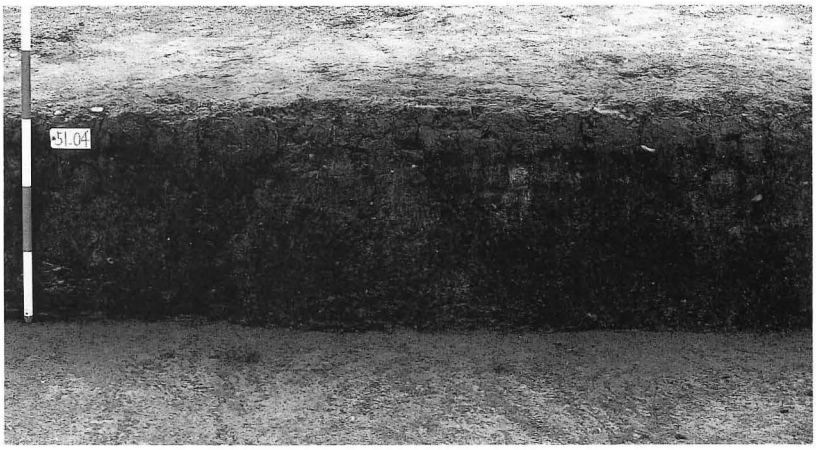
遺構調査風景

彼杵小学校の調査見学会

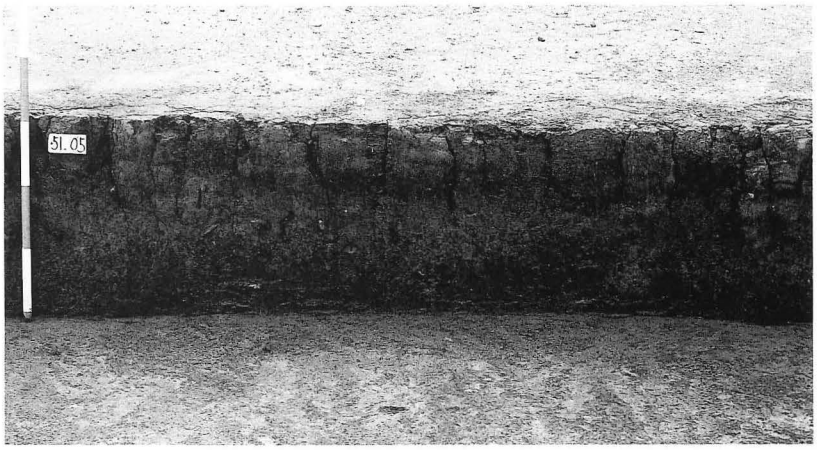
調　査　風　景

図版 4

第51号排水路土層

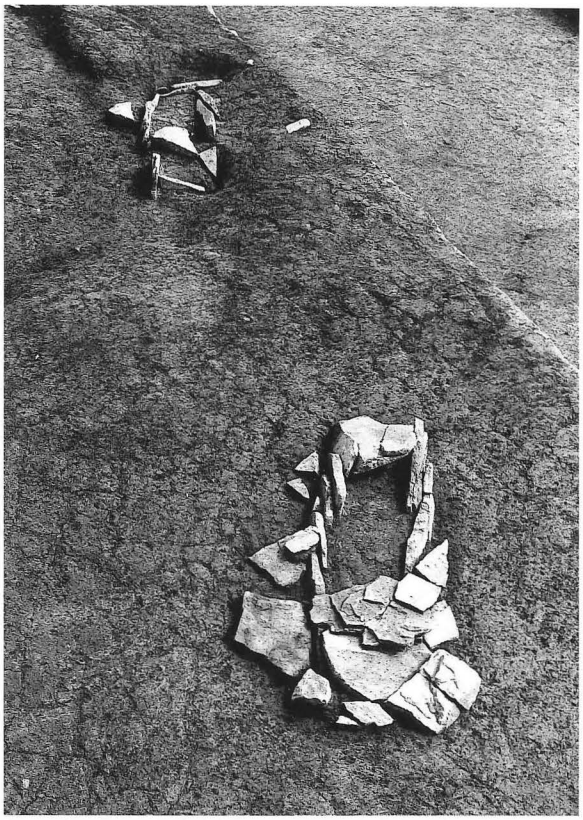


51水―4区土層

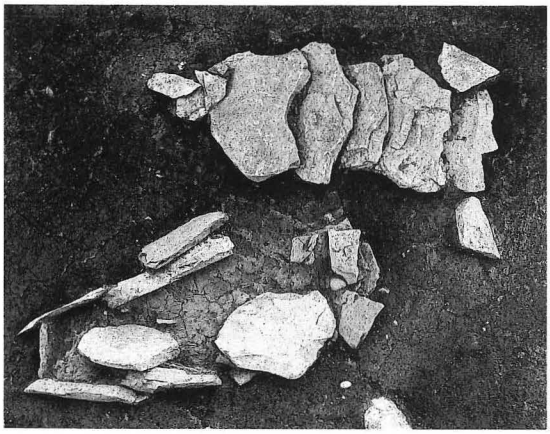


51水―5区土層

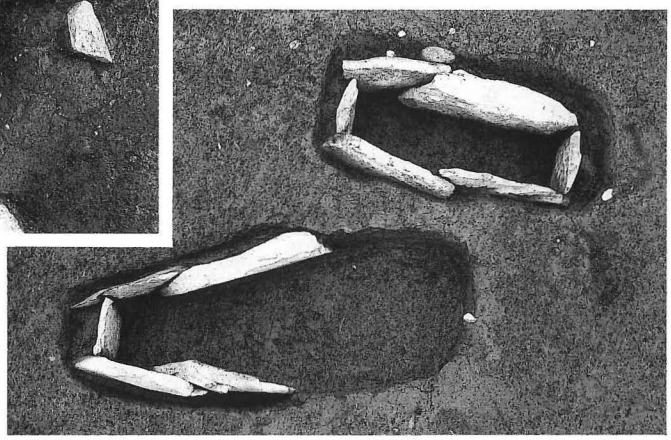
第51号排水路土層



第1号石棺墓



第4号・5号石棺墓

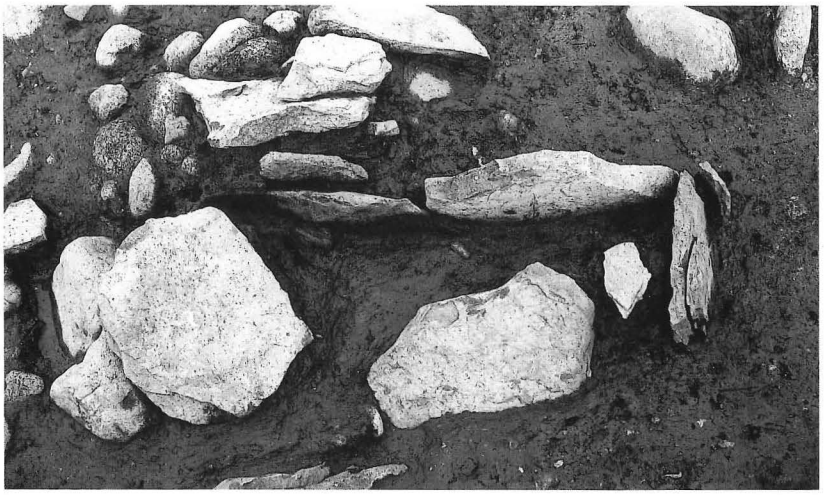


埋葬遺構出土状況(1)

図版 6

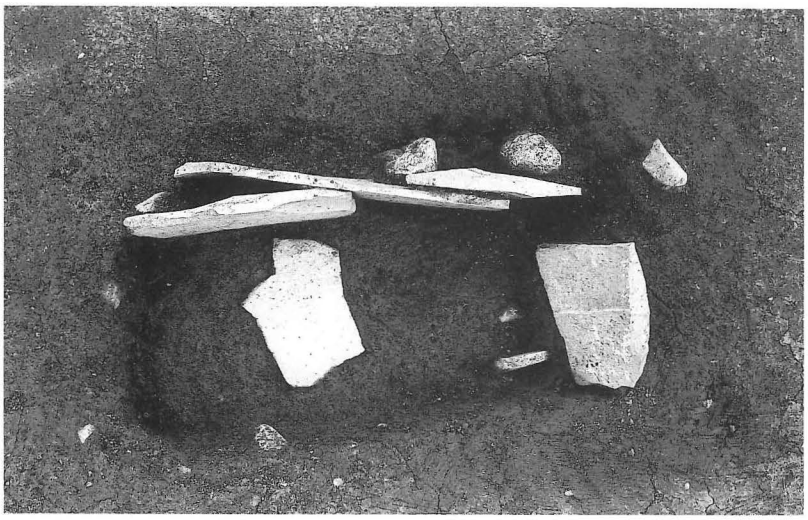
第9号石棺墓

第10号石棺墓

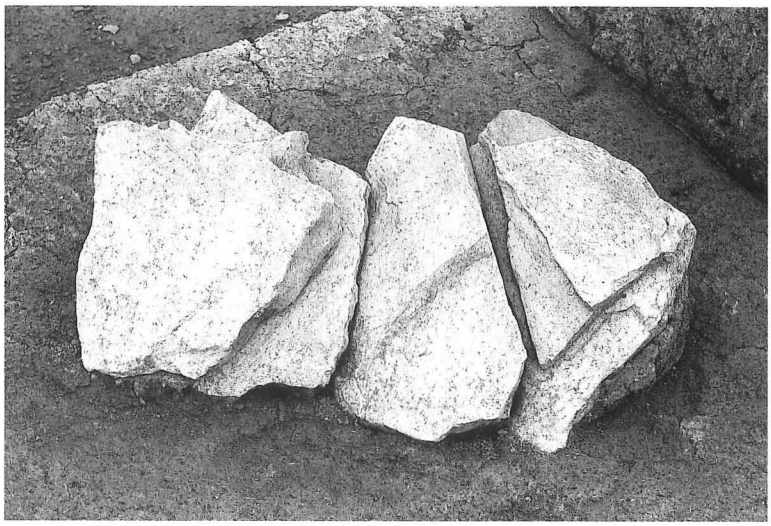


第11号石棺墓

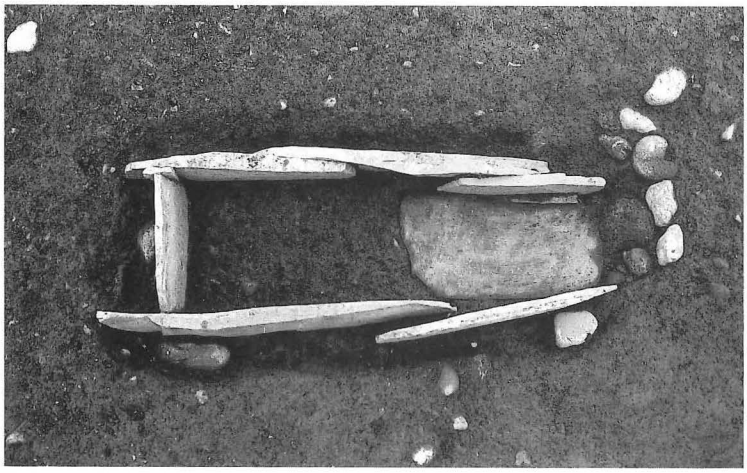
埋葬遺構出土状況(2)



第12号石棺墓

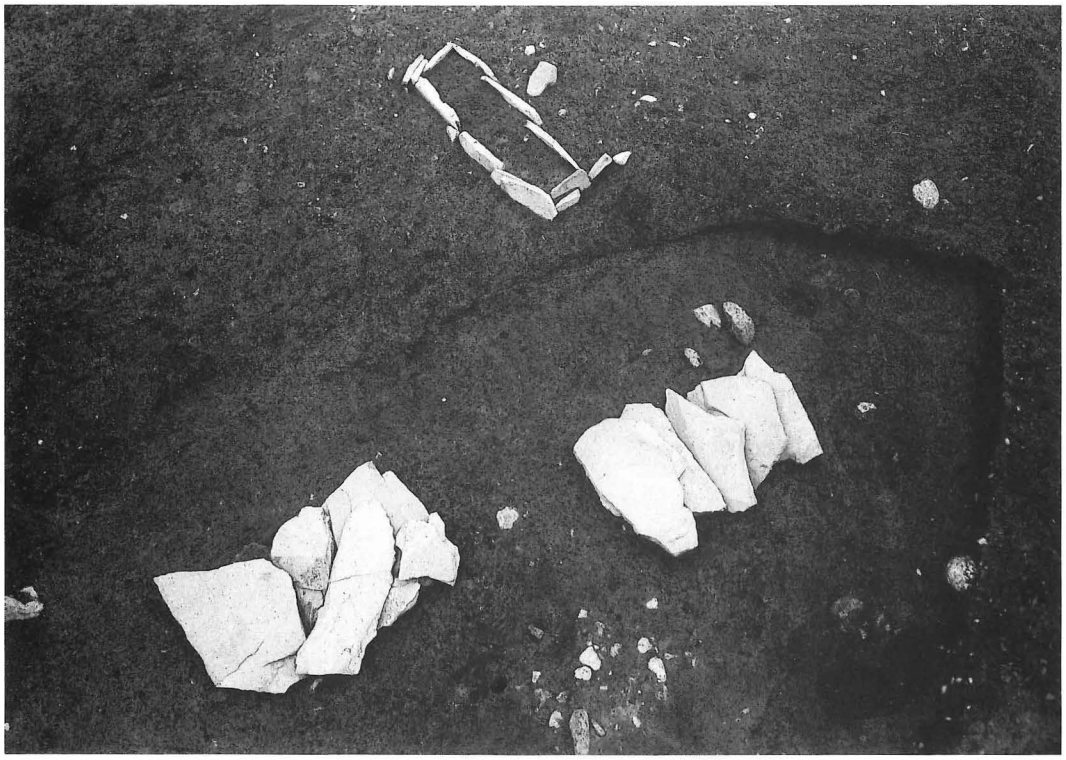


第13号石蓋土壙墓

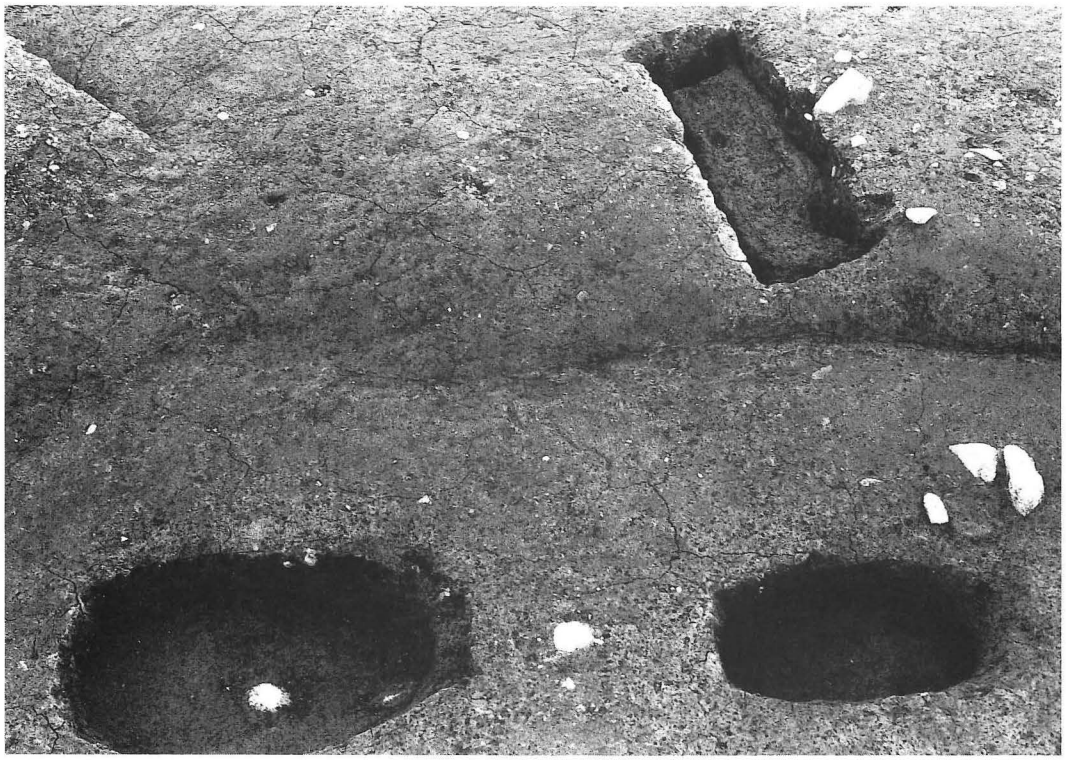


第14号石棺墓

埋葬遺構出土状況(3)

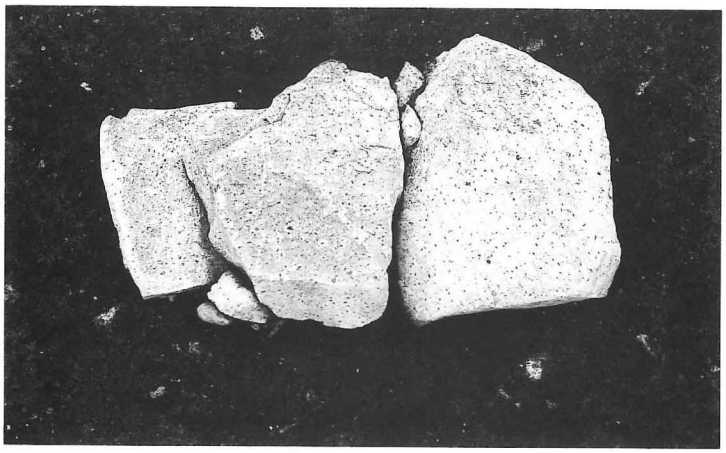


第19号石棺墓(上)・第15号石蓋土壙墓(左)・第16号石蓋土壙墓(右)



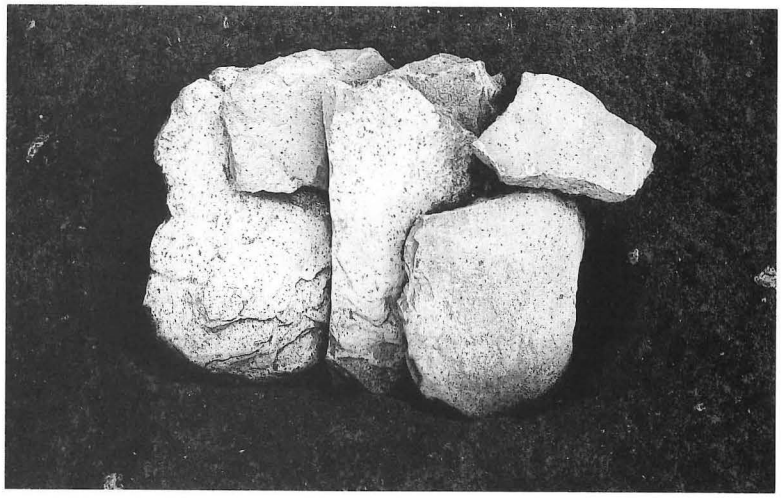
石組を抜いた状況

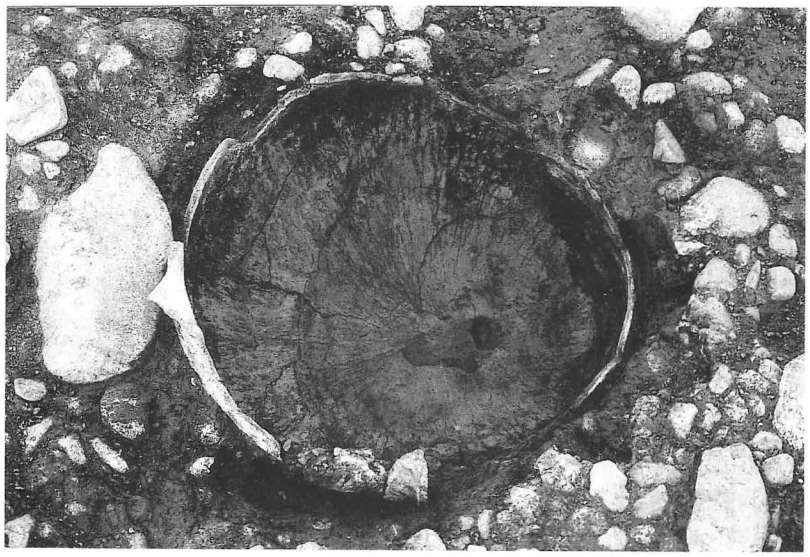
埋葬遺構出土状況(4)



第17号石蓋土壙墓

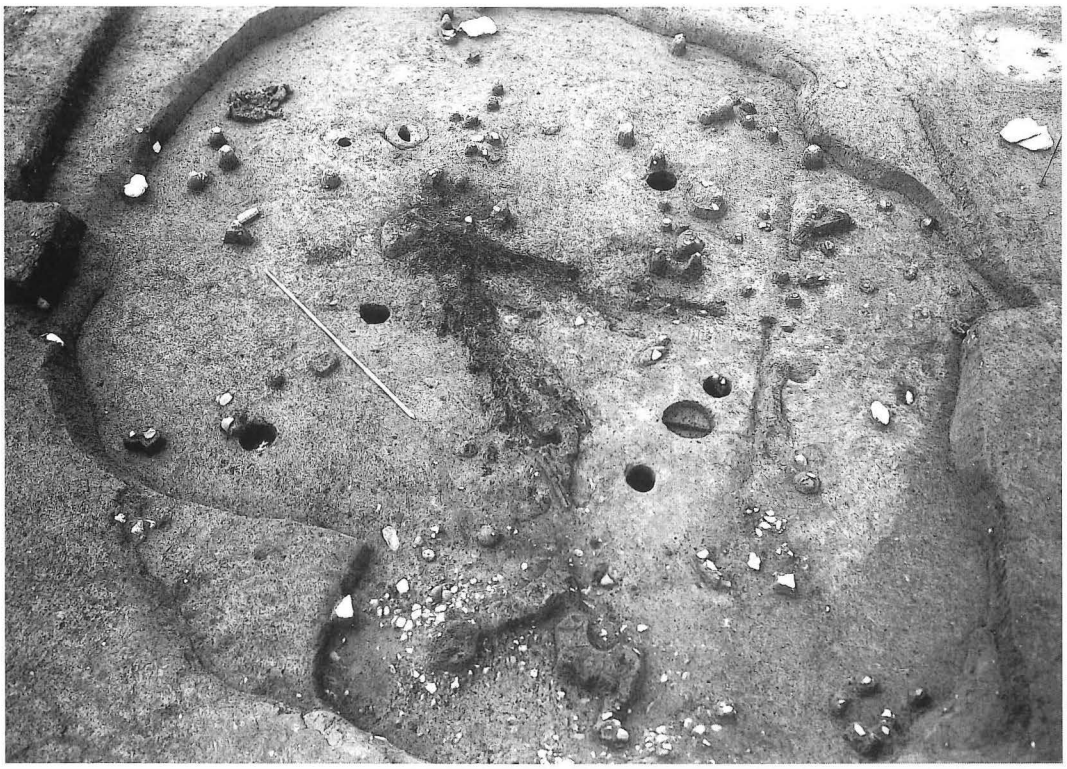
第18号石蓋土壙墓

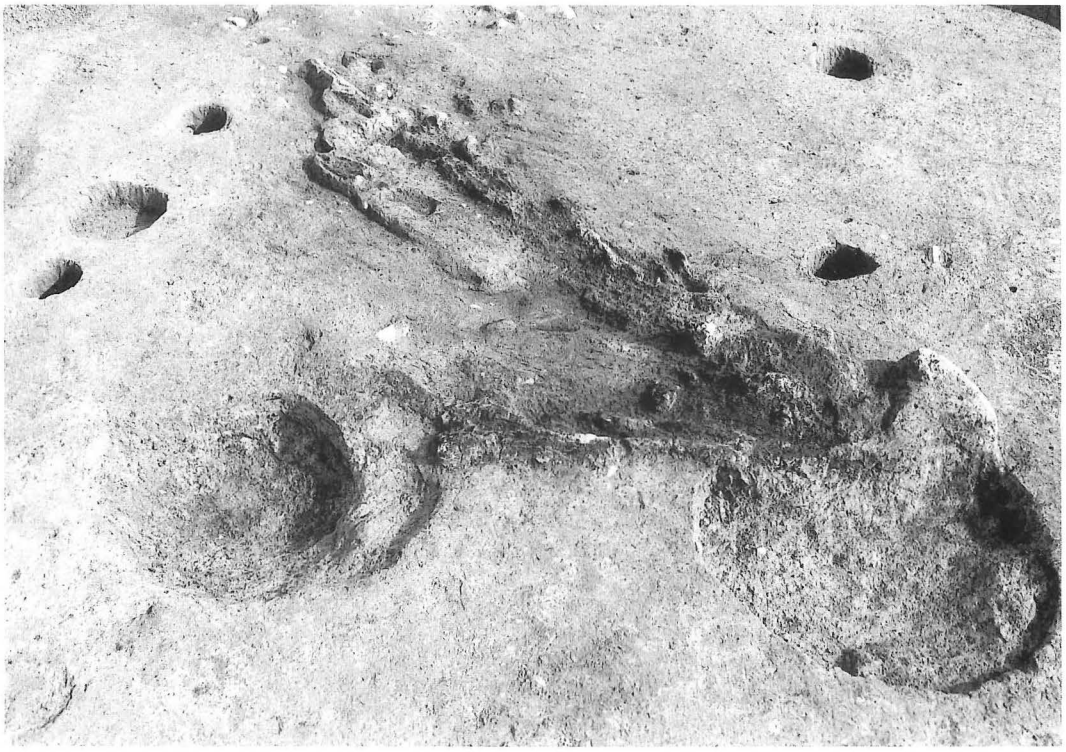




第22号甕棺墓

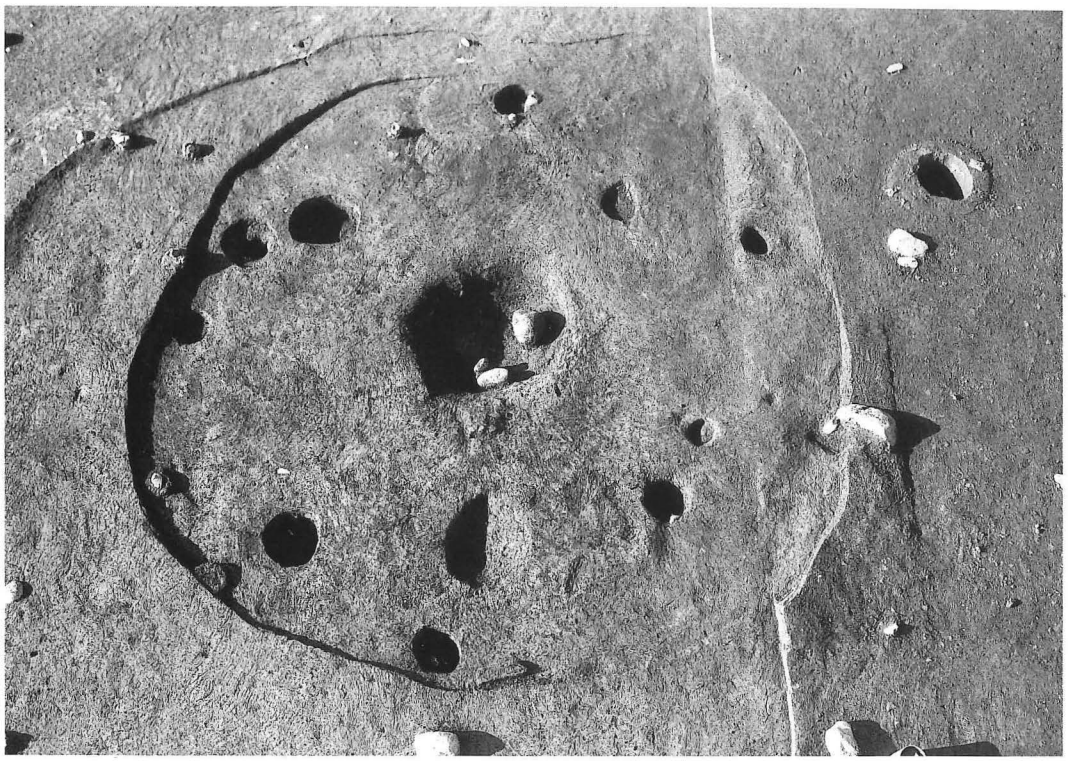
埋葬遺構出土状況(5)



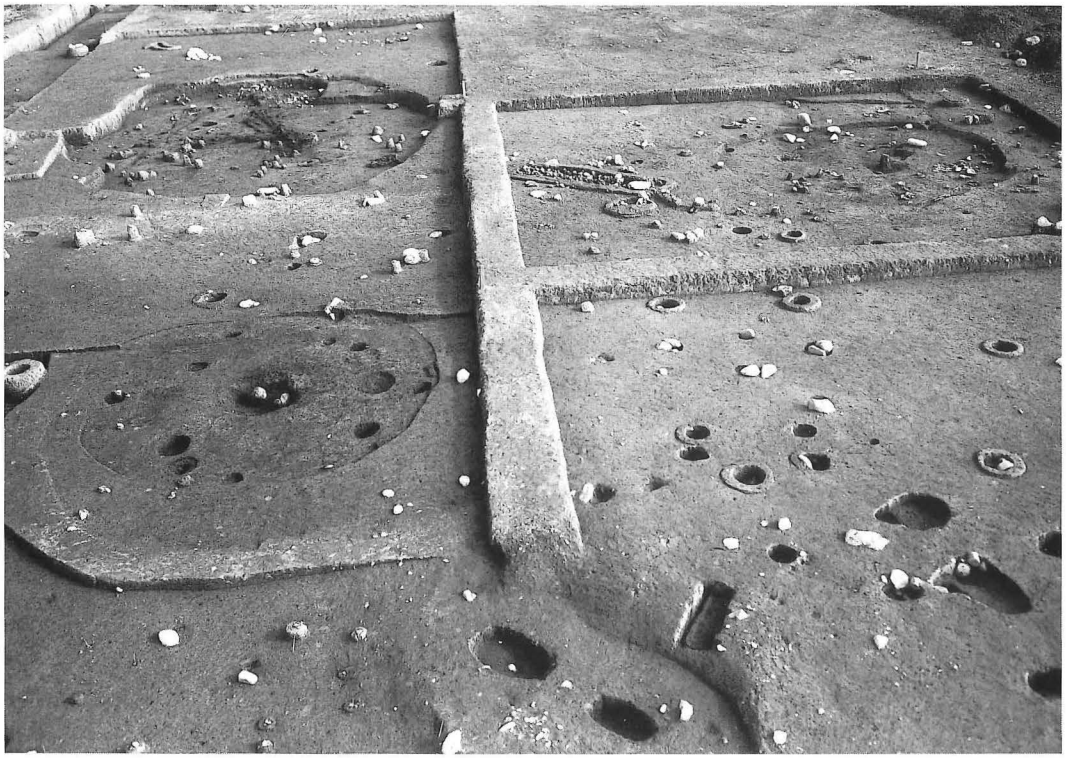


炭化物出土状況

第１号住居跡出土状況

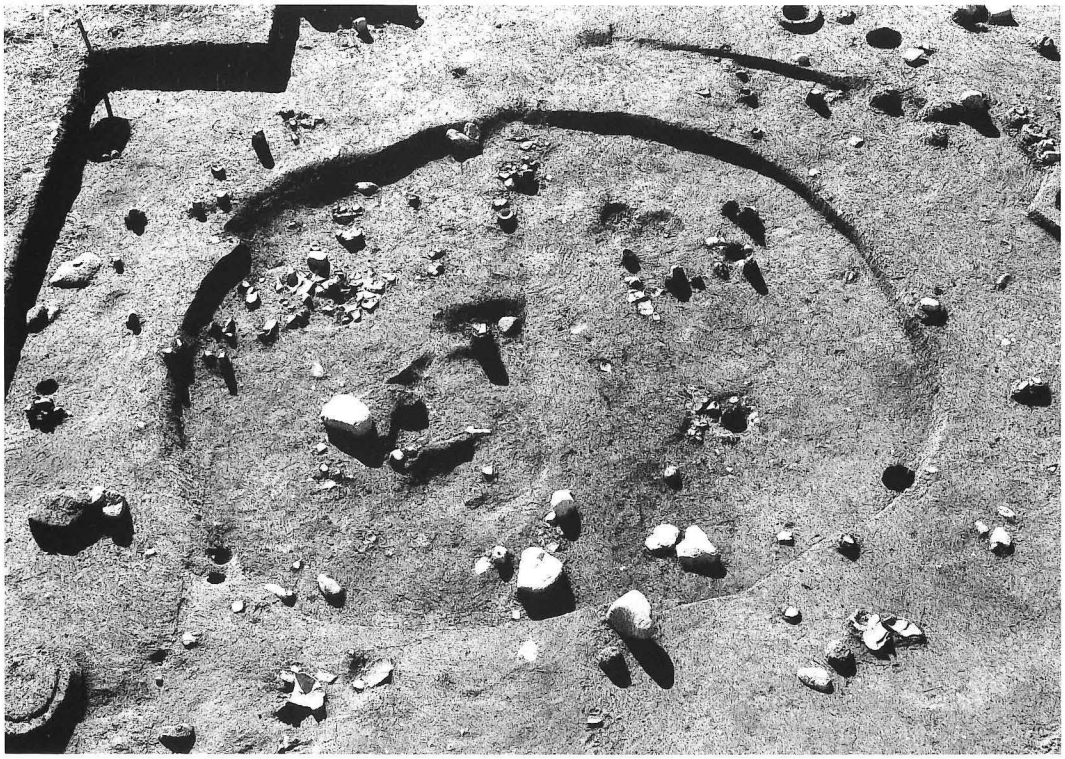


第2号住居跡出土状況

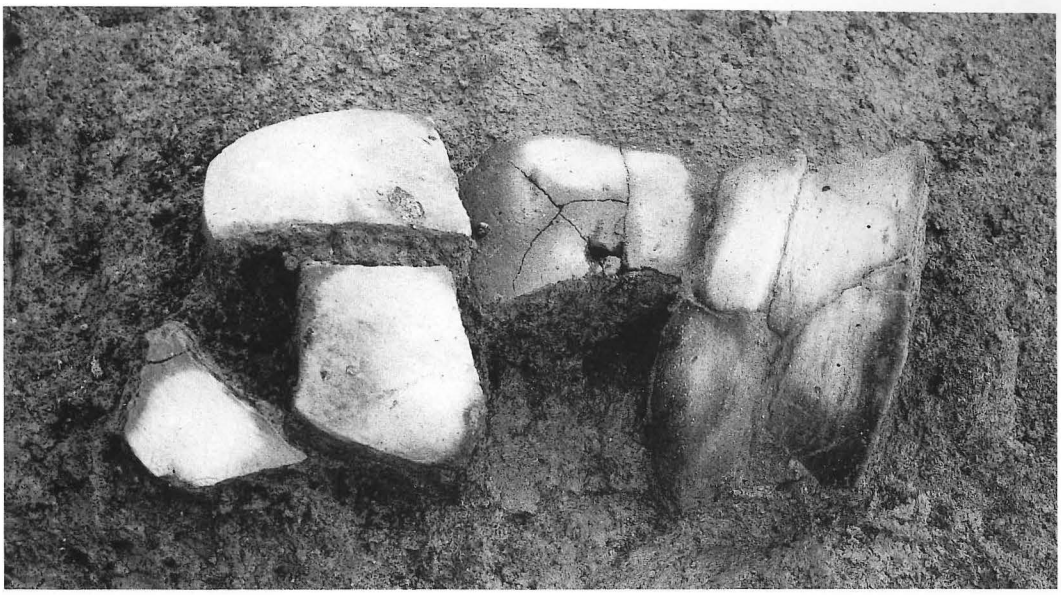


住居跡全景

図版12

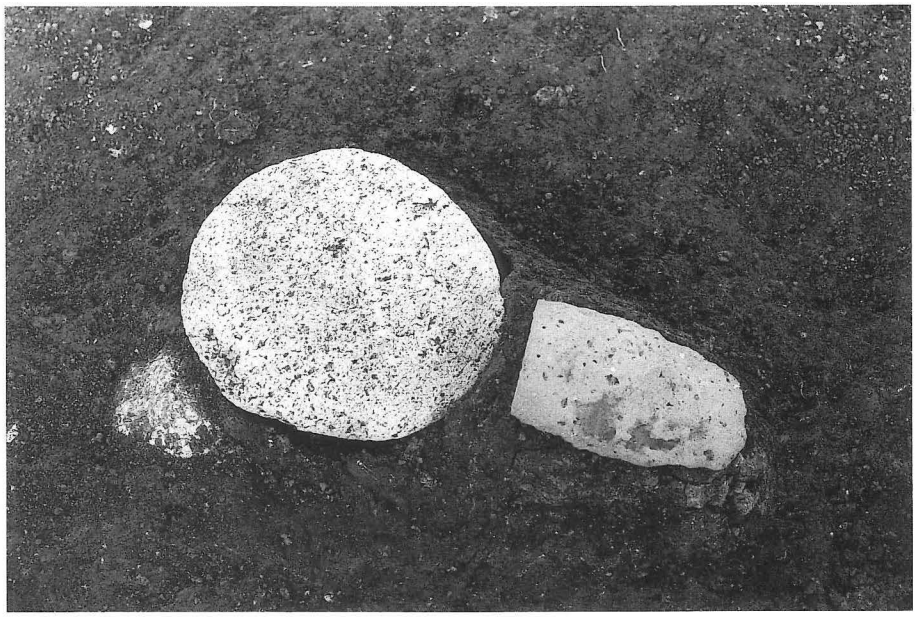


第 3 号住居跡出土状況

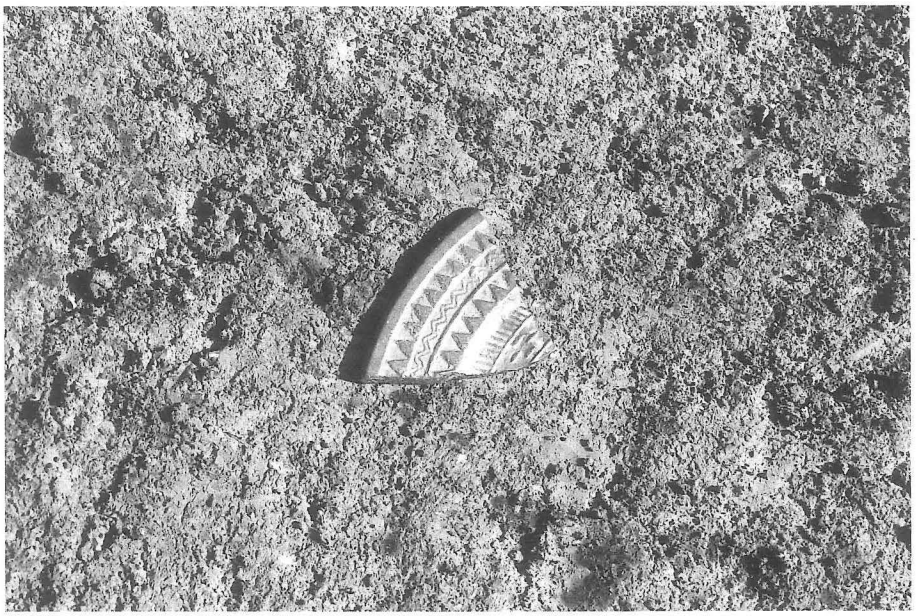


縄文晩期土器出土状況

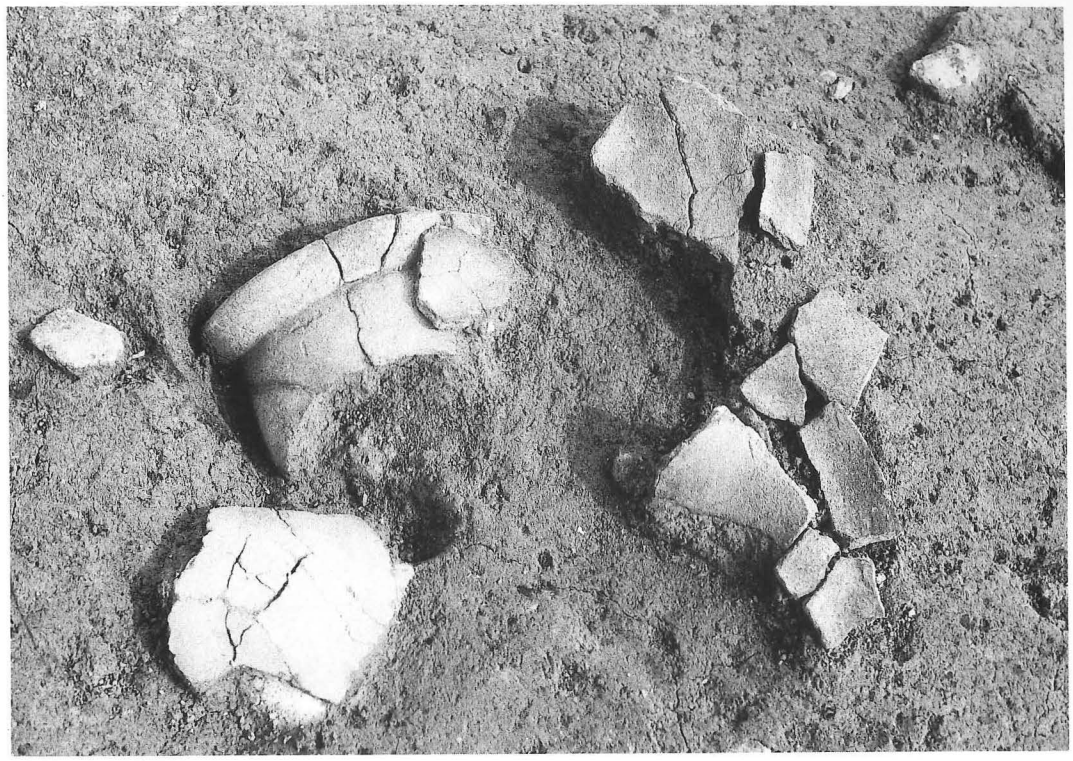
図版14



縄文時代の石器出土状況

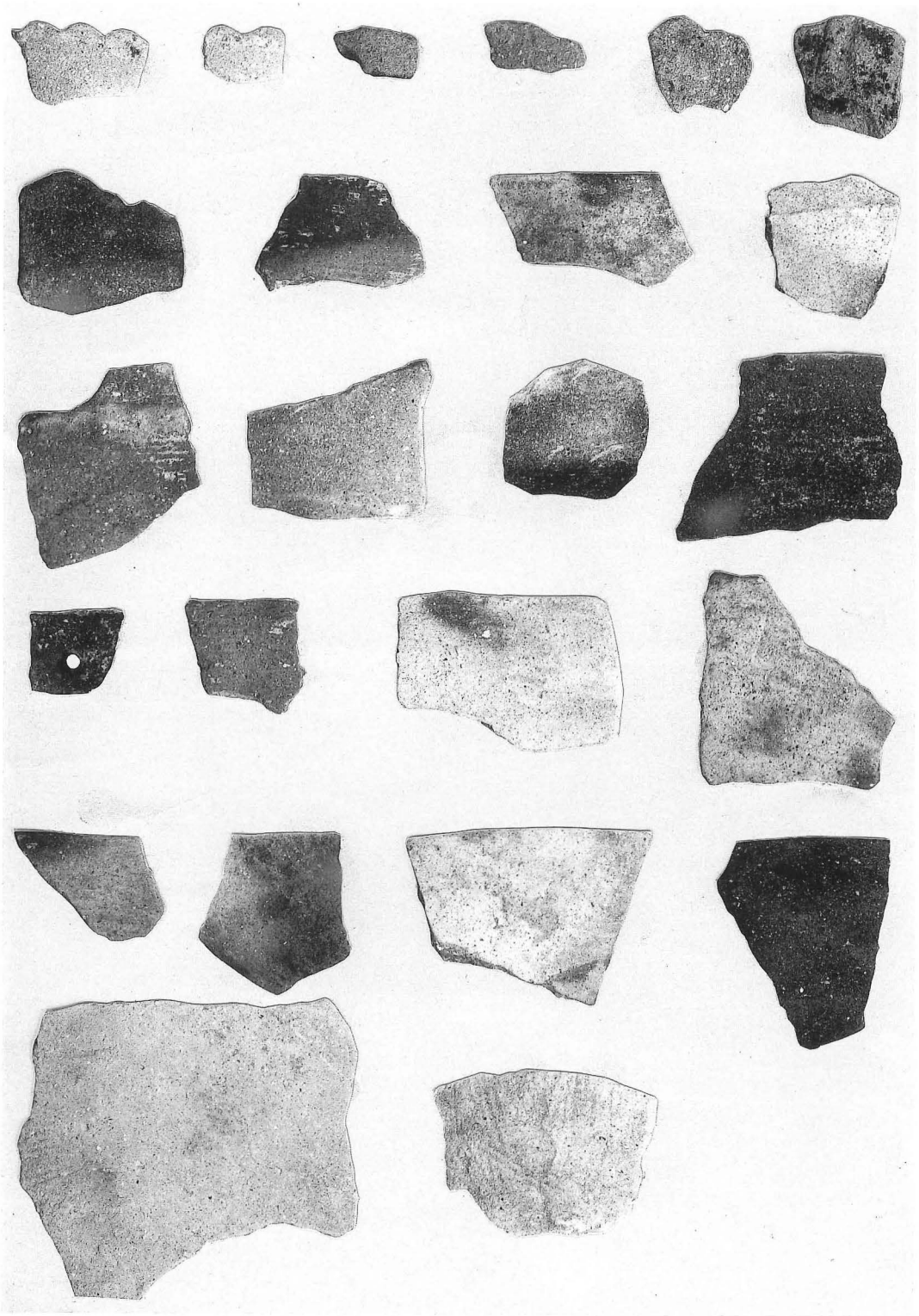


鏡 出 土 状 況



弥生土器出土状況

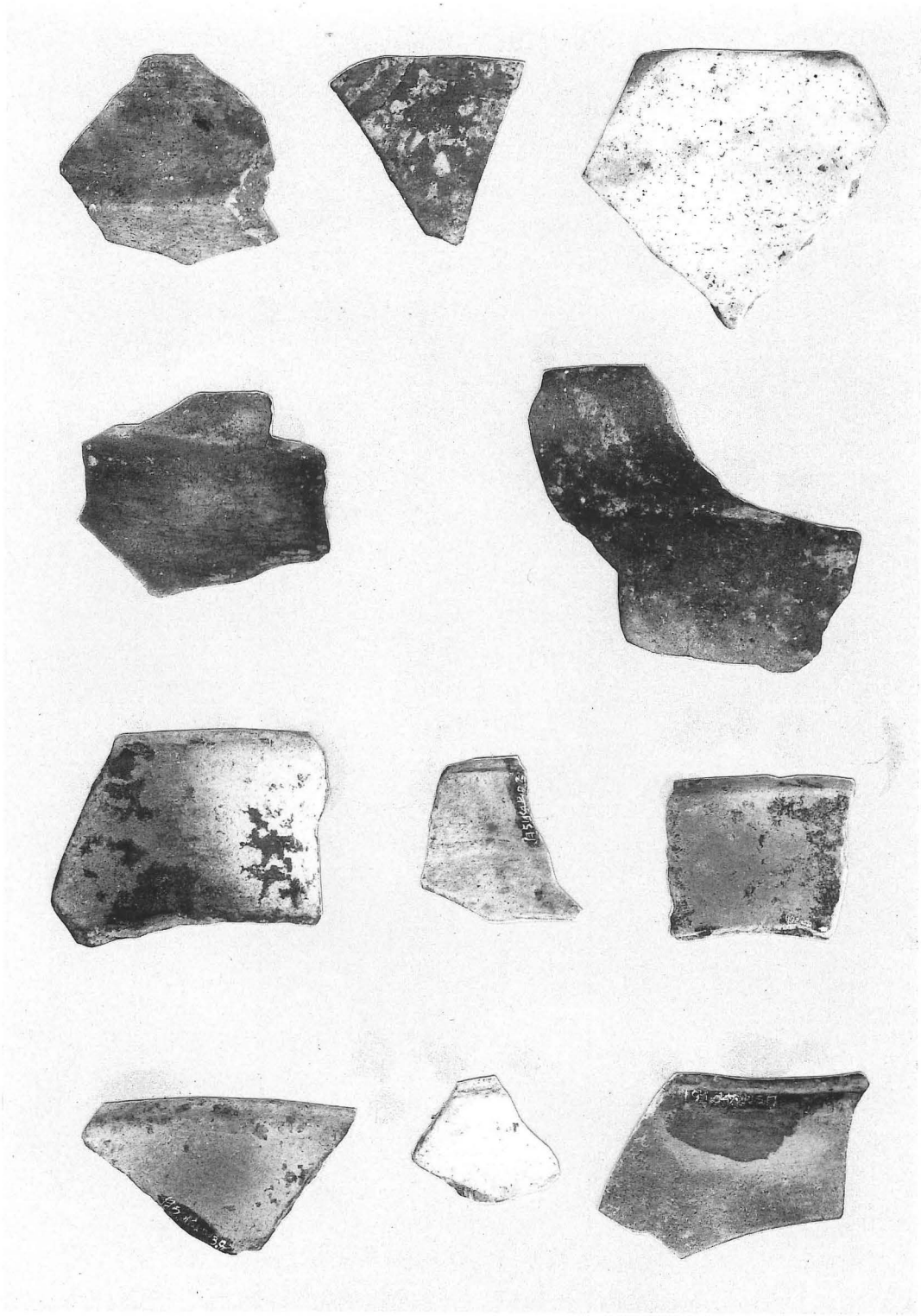
図版16



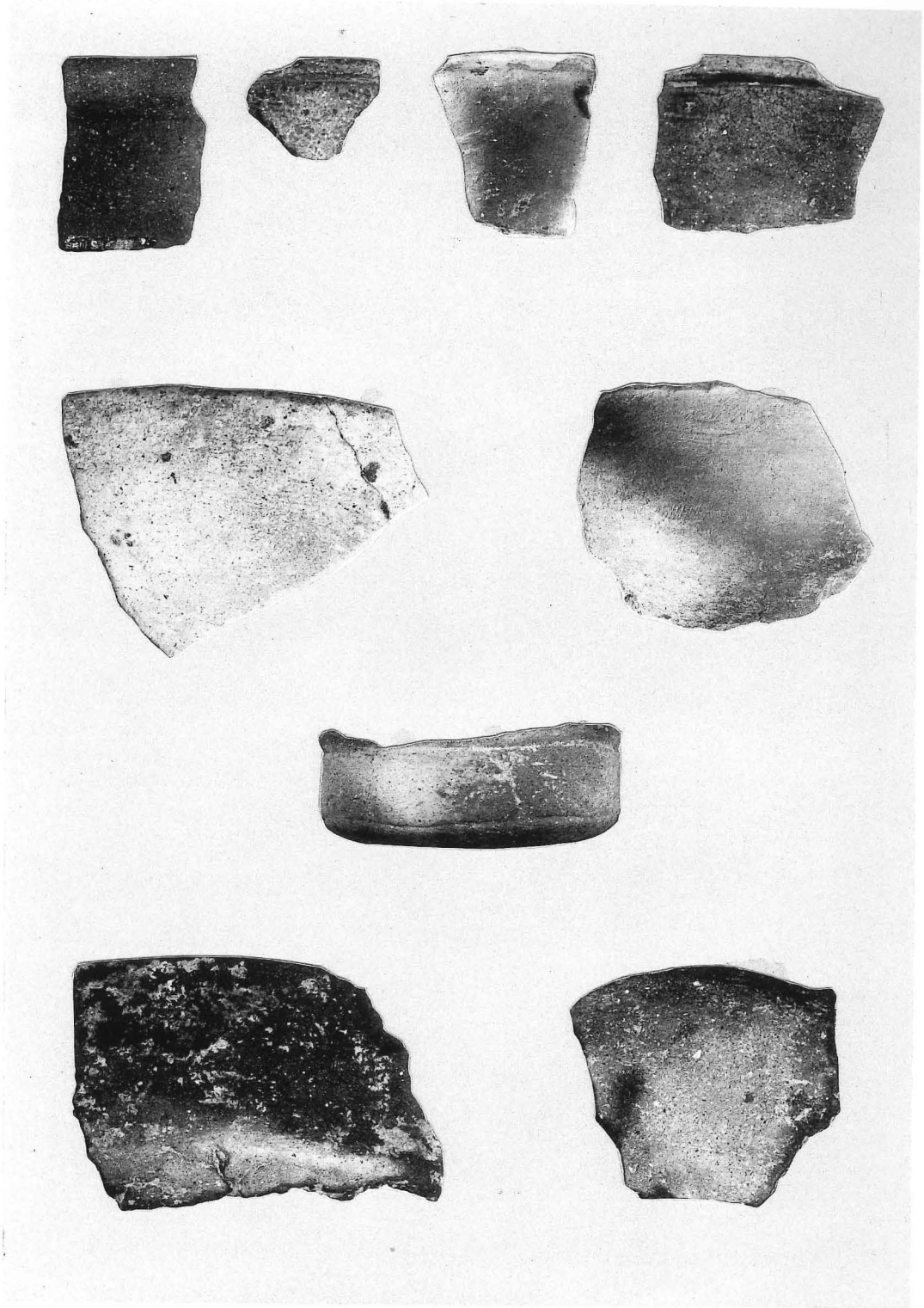
縄文中期および晩期の土器(1)

縄文晩期の土器(2)

図版18

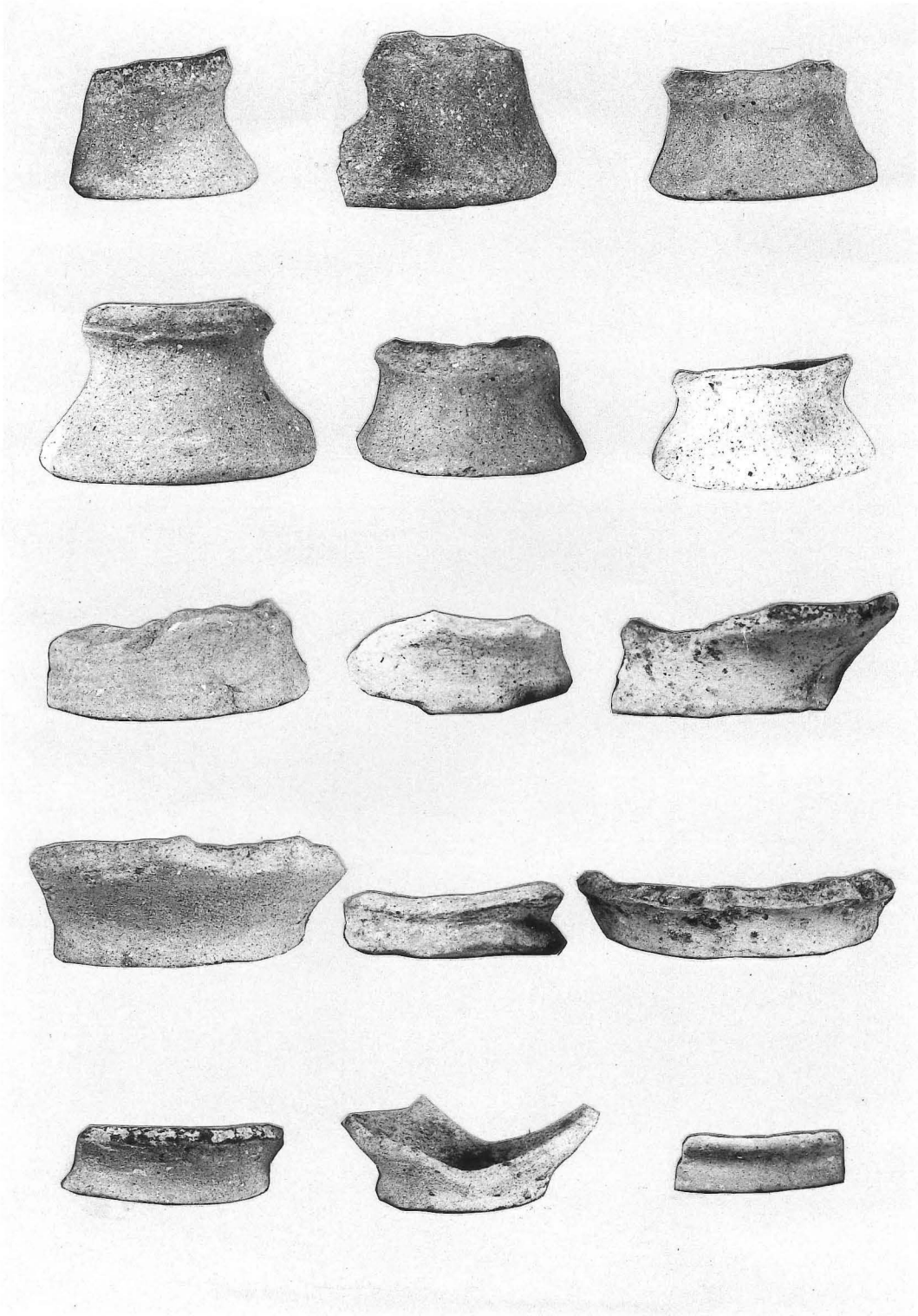


縄文晩期の土器(3)



縄文晩期の土器(4)

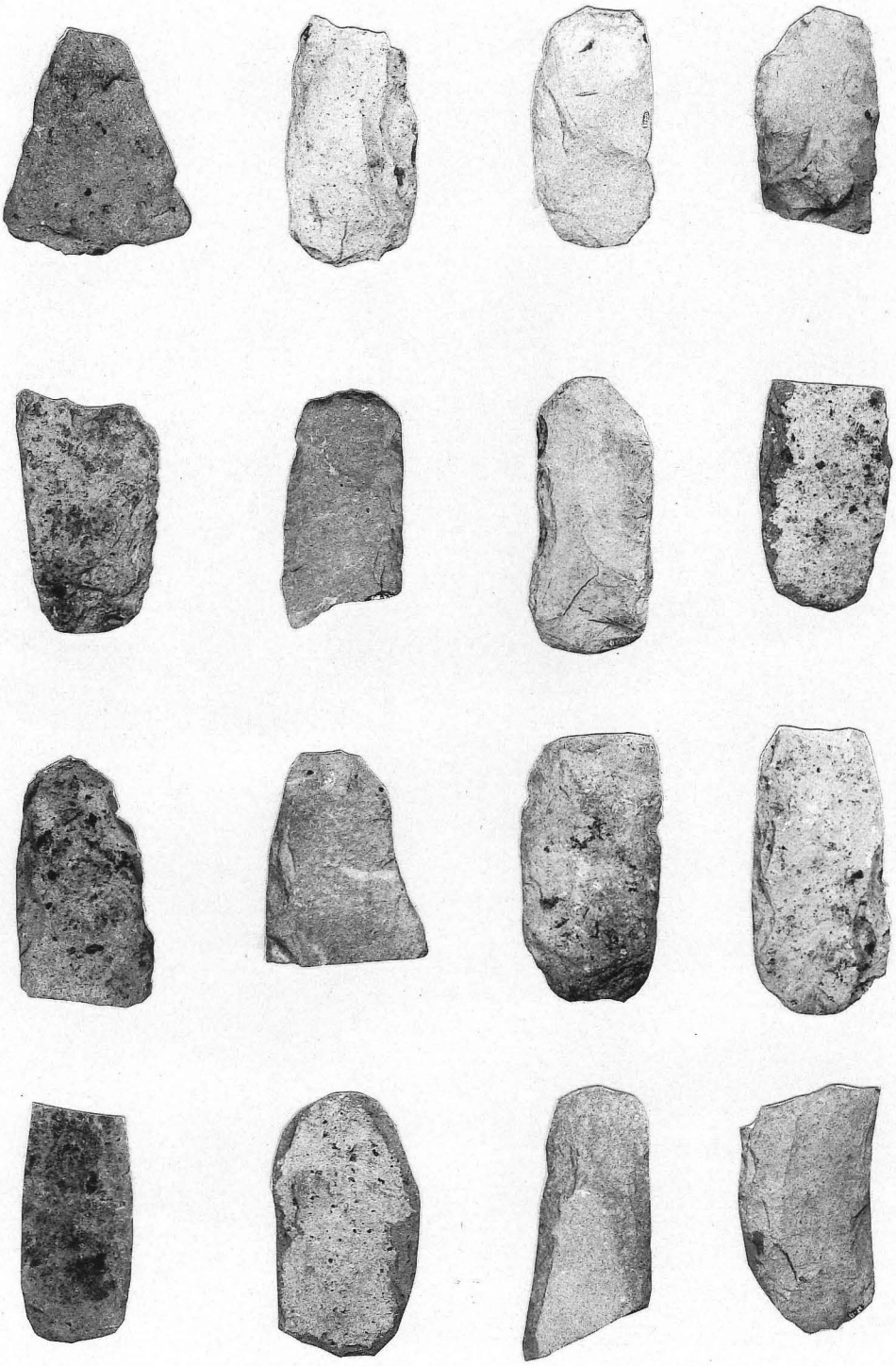
図版20



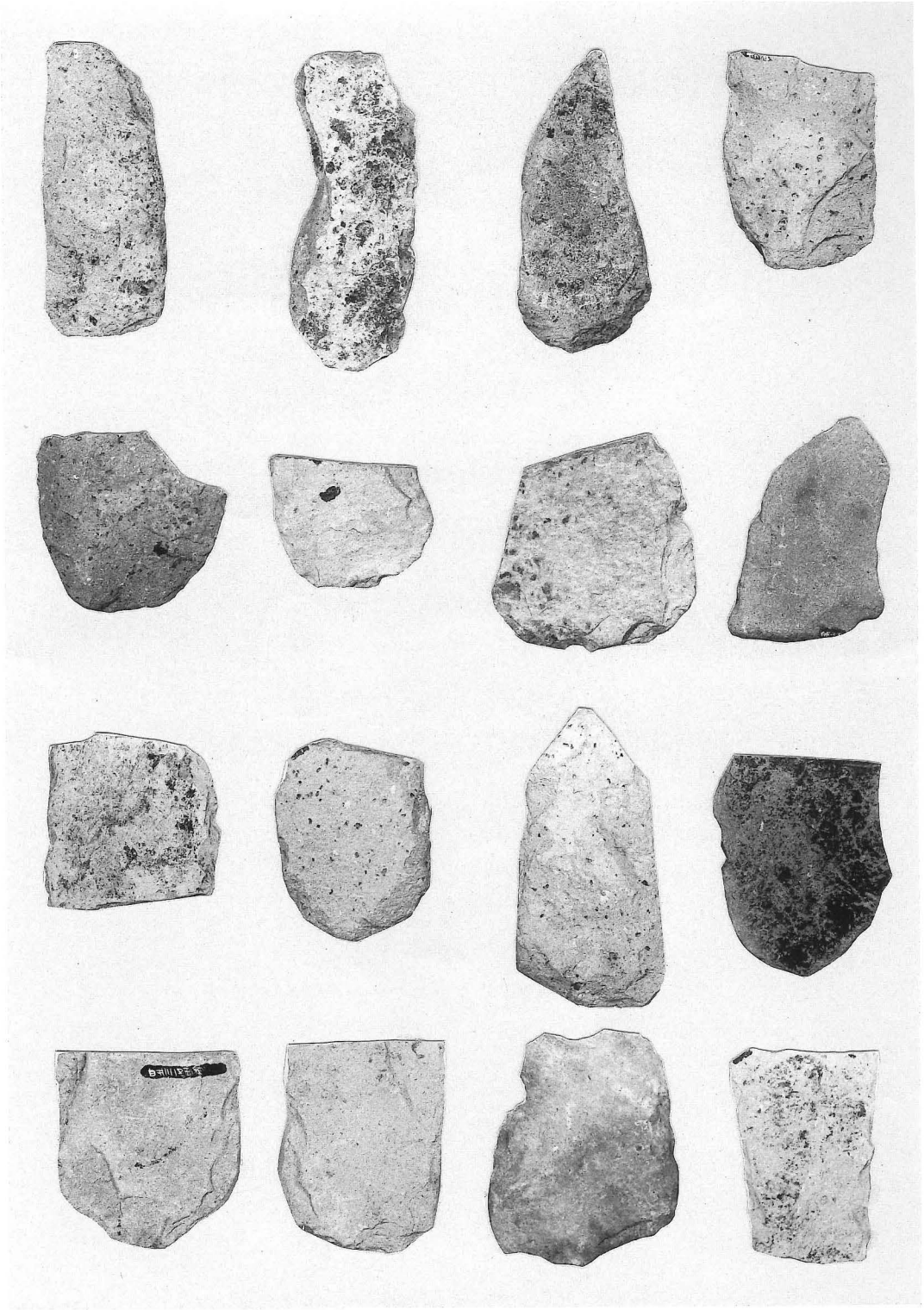
縄文晩期の土器(5)

縄文時代の石器(1)

図版22

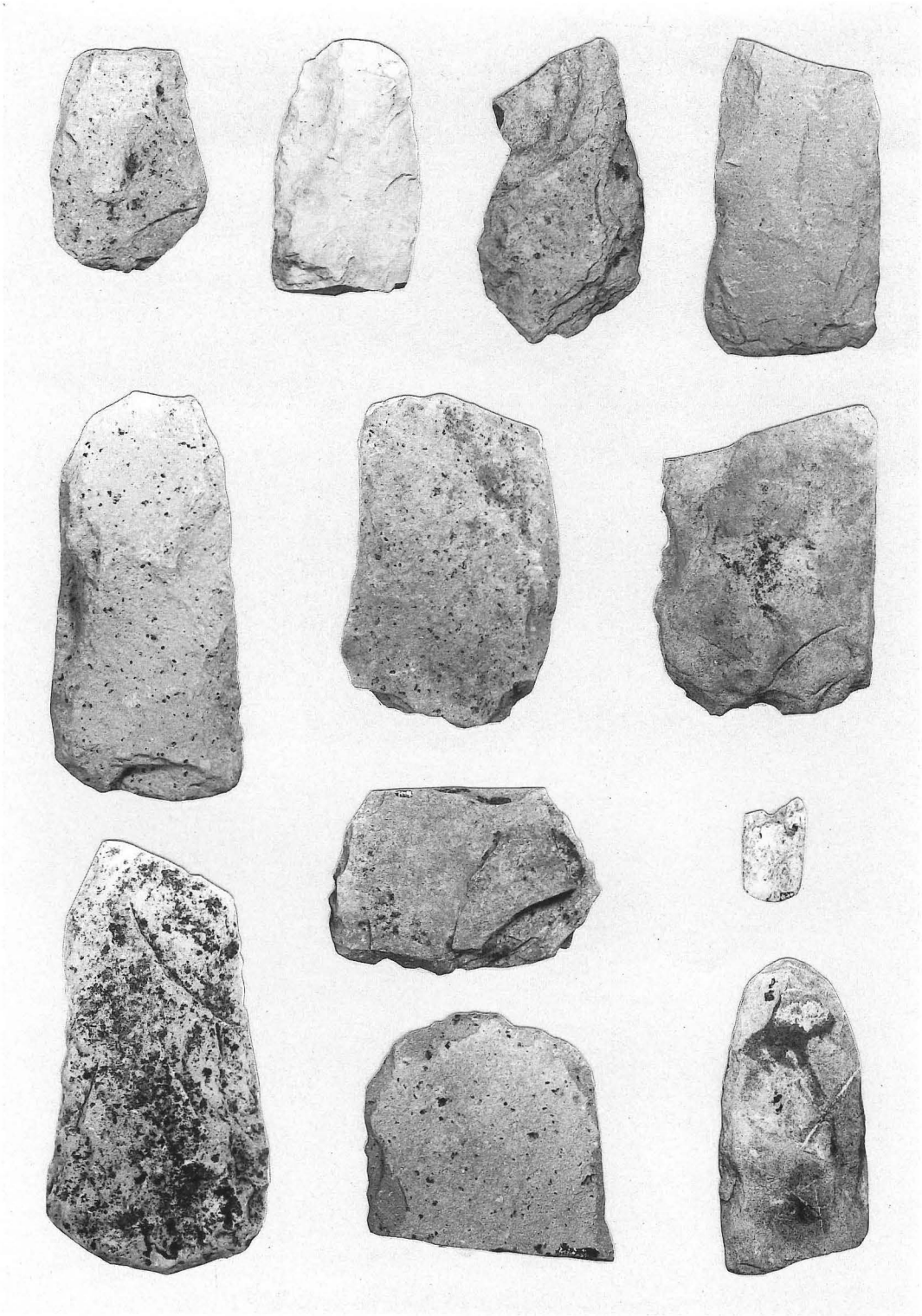


縄文時代の石器(2)

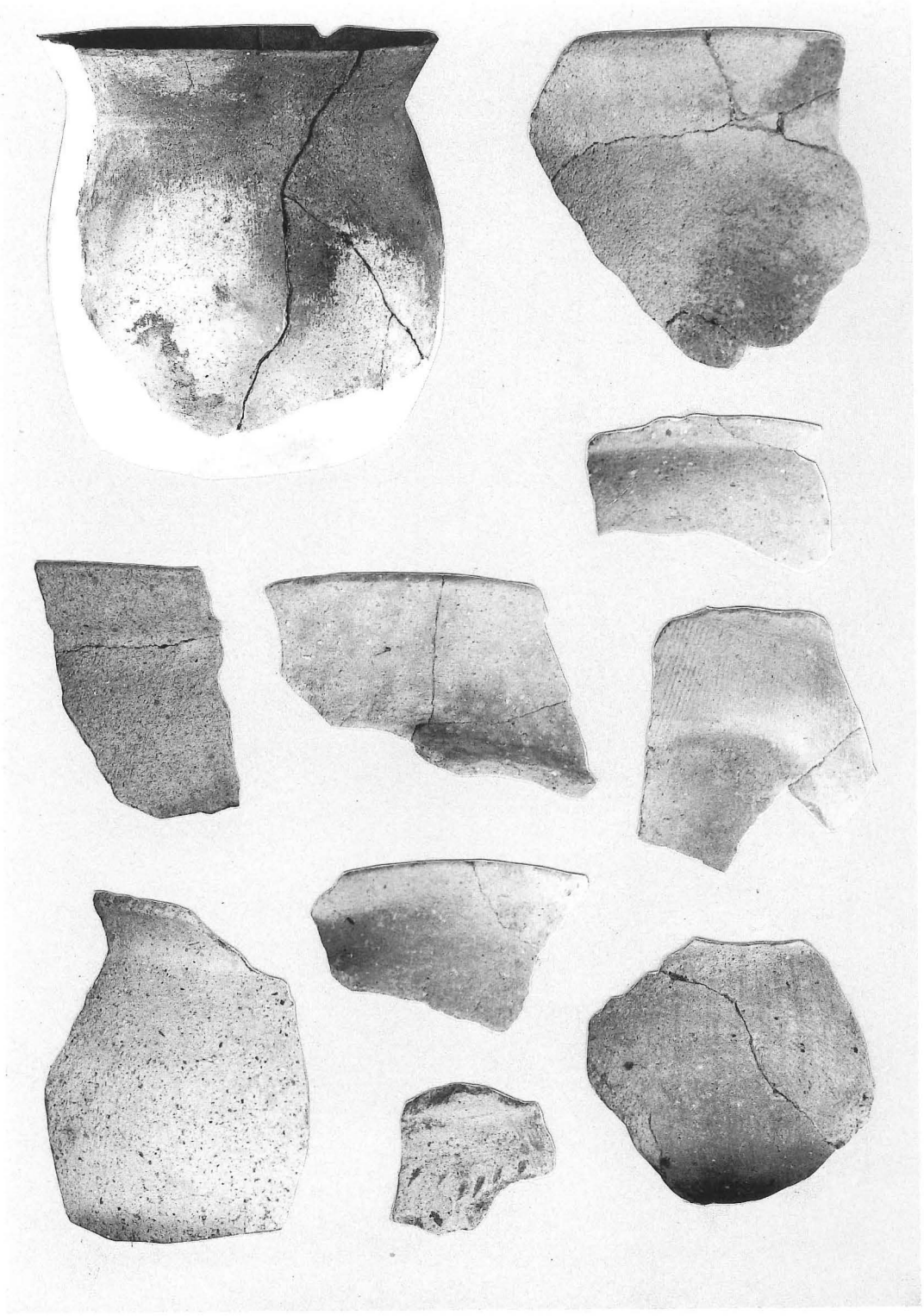


縄文時代の石器(3)

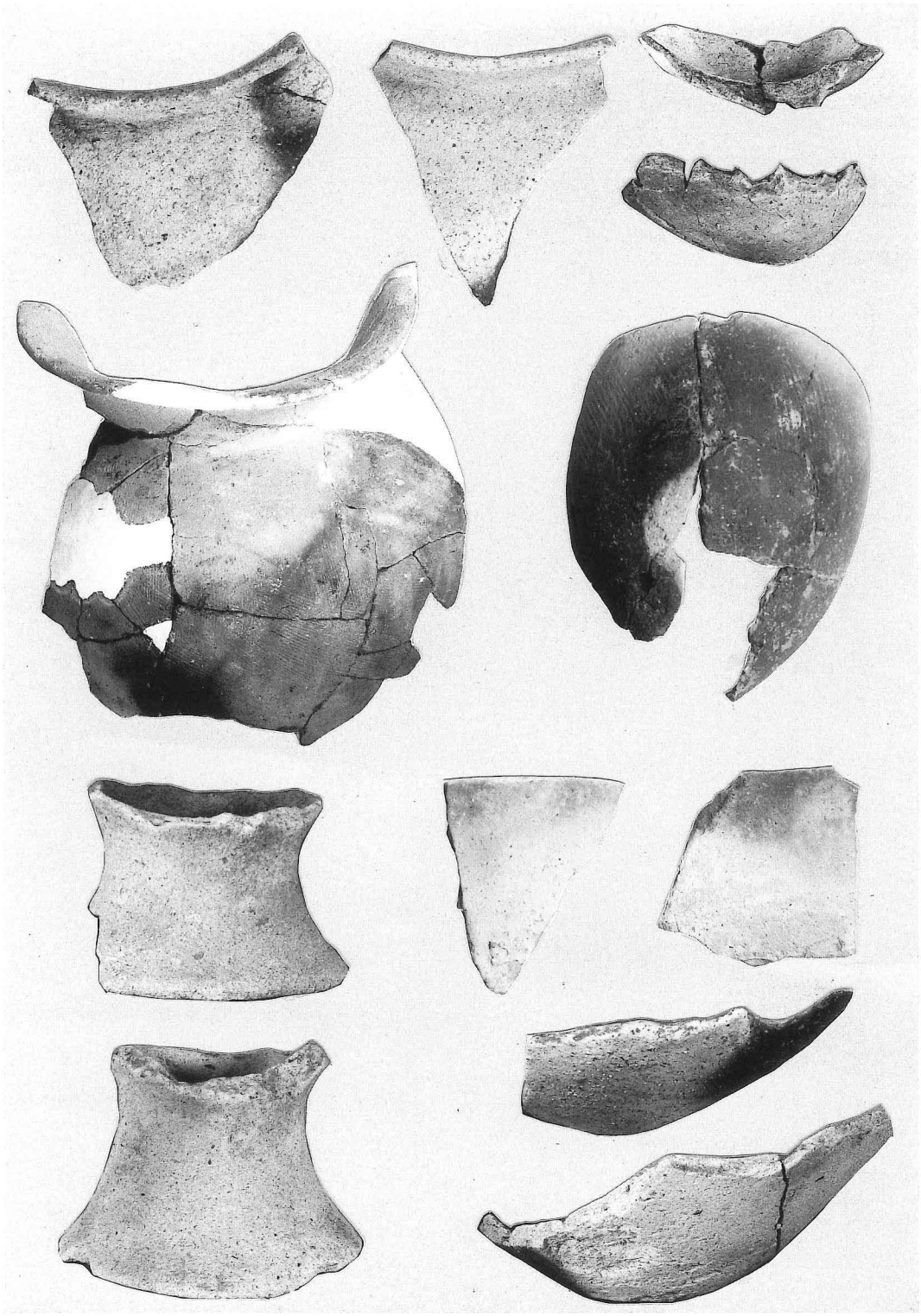
図版24



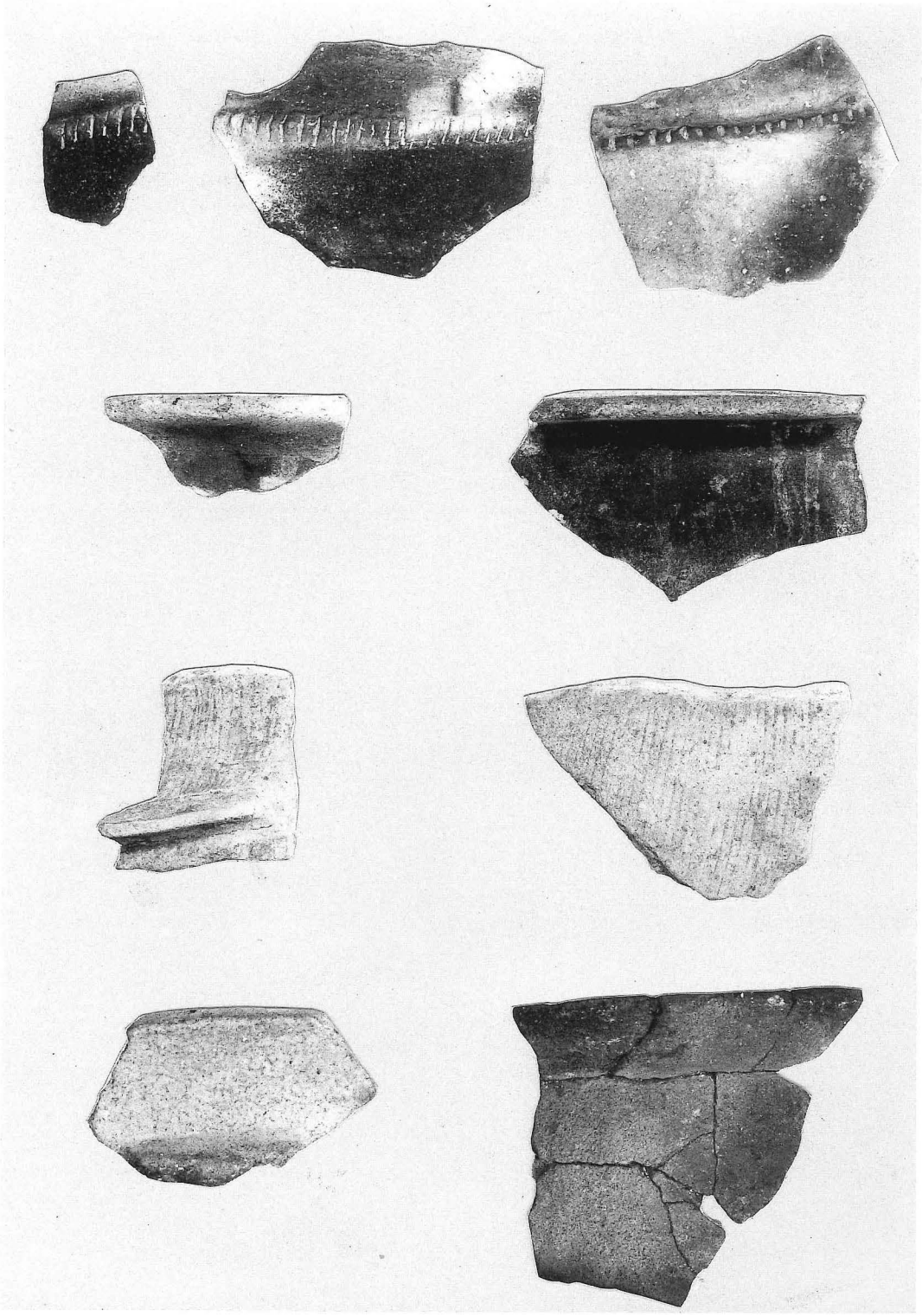
縄文時代の石器(4)



住居跡出土の弥生土器(1)

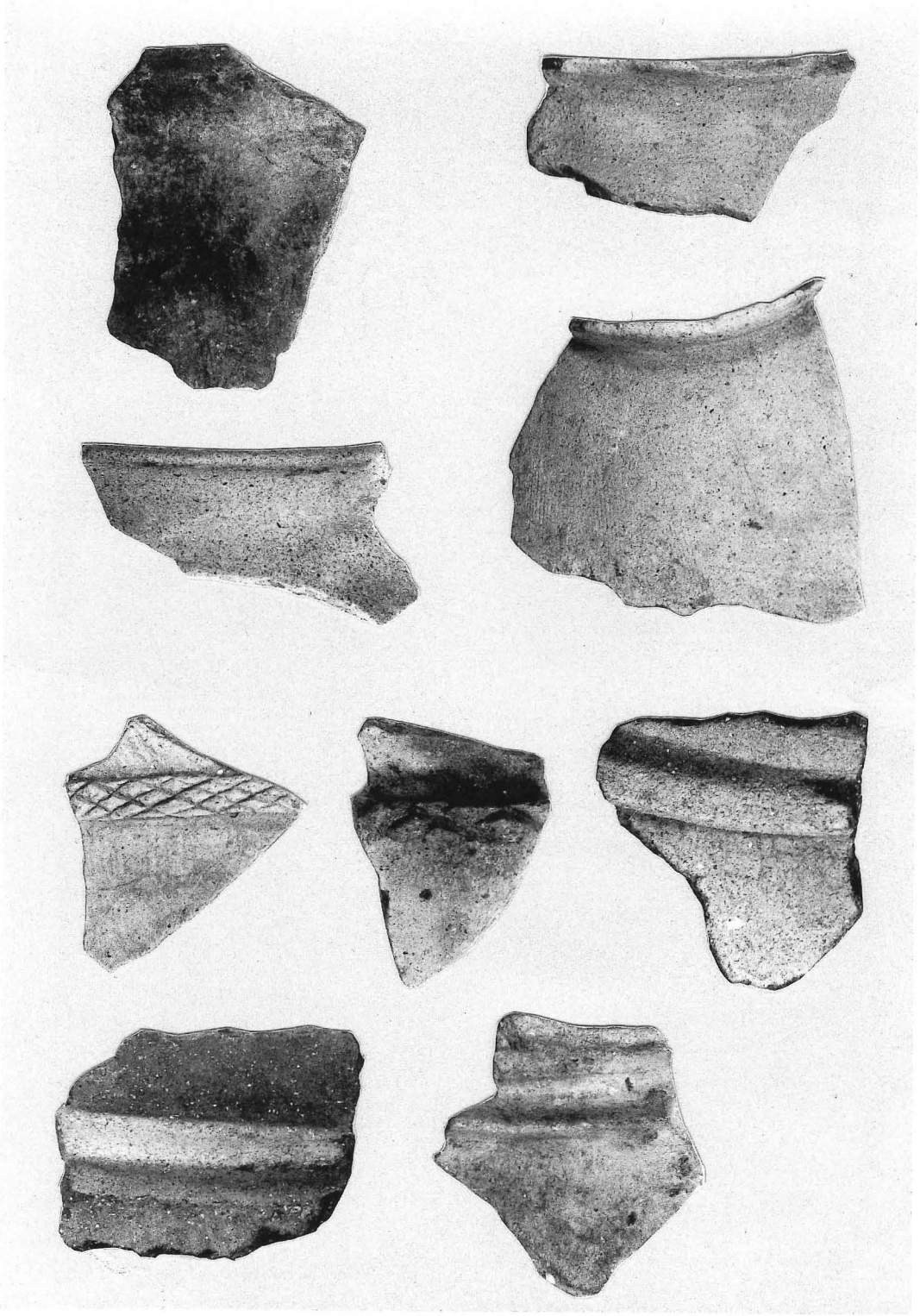


住居跡出土の弥生土器(2)

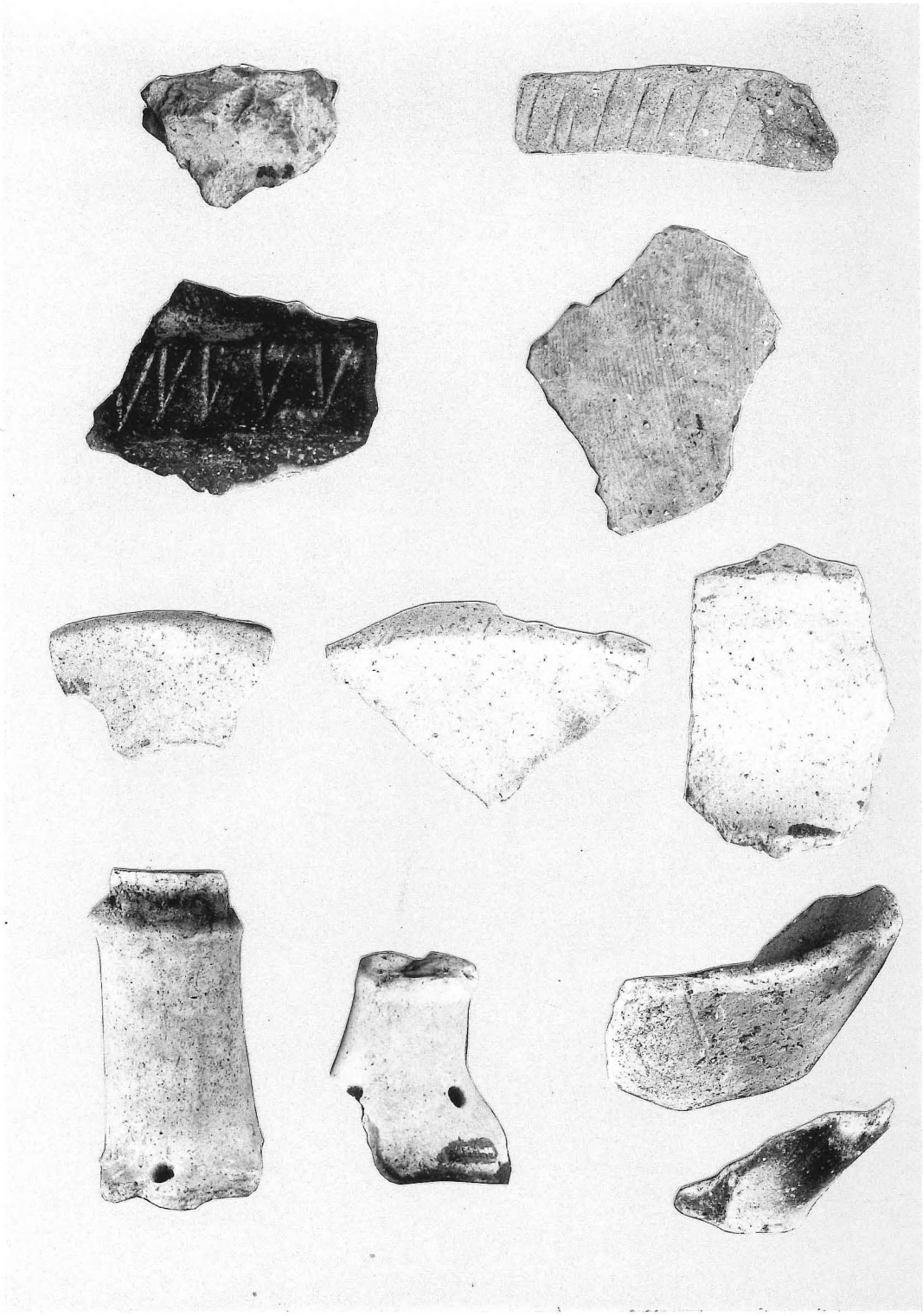


各調査区出土の弥生土器(1)

図版28

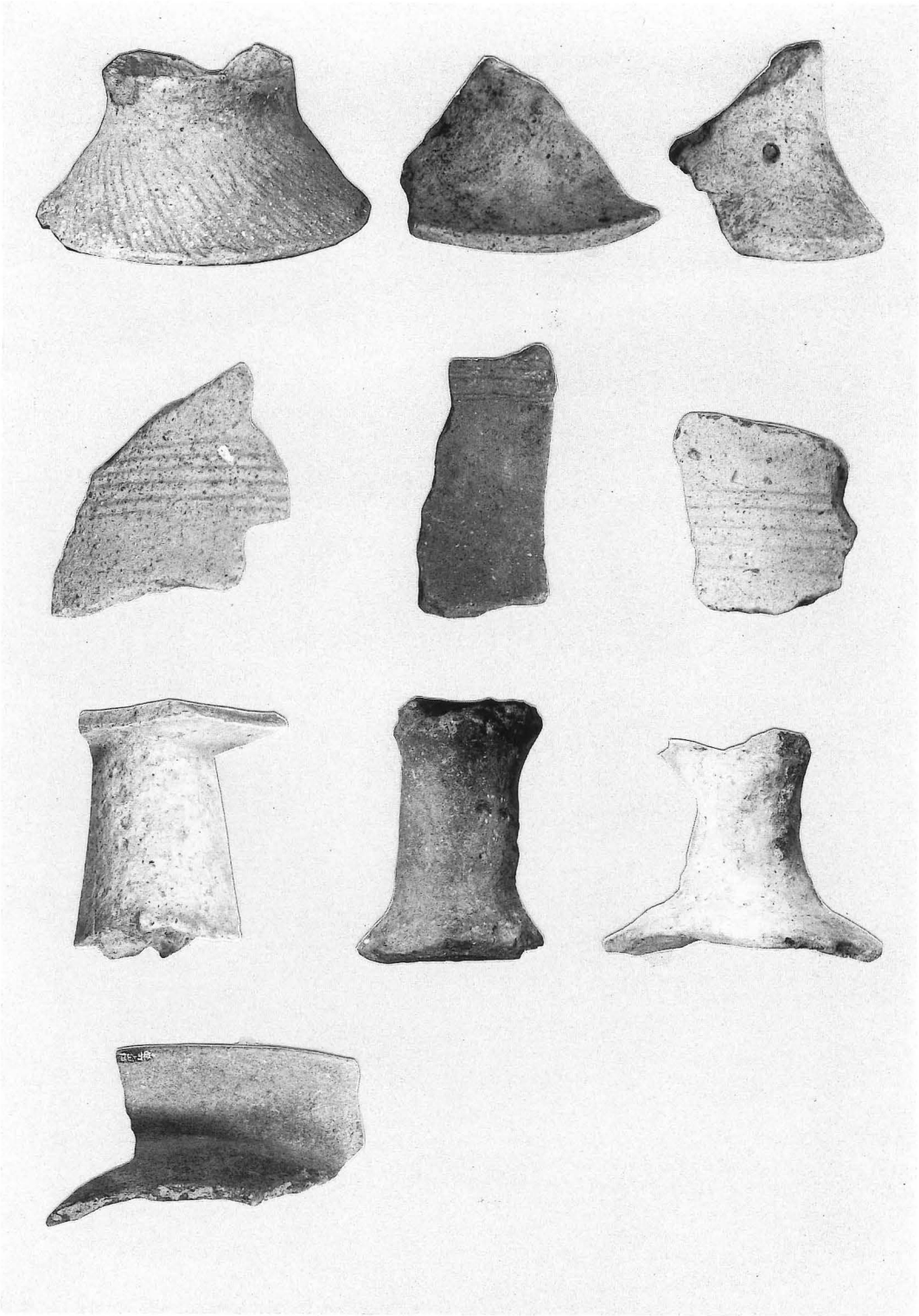


各調査区出土の弥生土器(2)



各調査区出土の弥生土器(3)

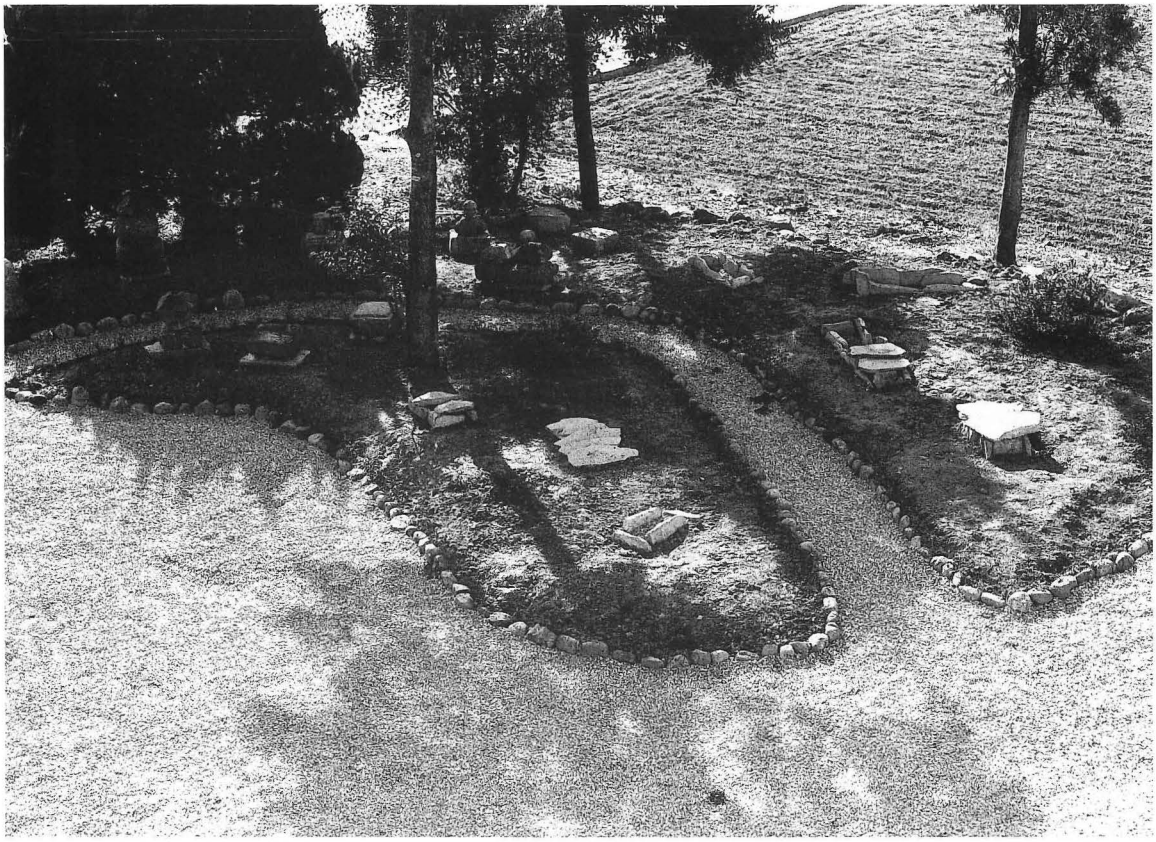
図版30



各調査区出土の弥生土器および土師質土器(4)

第22号遺構の甕棺

白井川遺跡に近接する板状剝離玄武岩の露頭



町教育委員会内に移転復原された石棺墓および中世石塔

ひさご塚（S58年撮影）

彼杵川古墳群（S58年撮影）

東彼杵町内所在の古墳

松岳城遠景(東から)

法音寺郷所在の文安祈願塔

発掘調査に参加した人達

東彼杵町文化財調査報告書第４集

白井川遺跡（II）

平成２年３月31日

発行　東彼杵町教育委員会
〒859-38　長崎県東彼杵町彼杵宿郷483番地

印刷　昭和堂印刷
〒854　長崎県諫早市長野町1007－２